最強魔王と下僕様!?

Nerine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強魔王と下僕様！？

【Ｎコード】
Ｎ０４９１Ｗ

【作者名】
Ｎｅｒｉｎｅ

【あらすじ】
無気力・無関心の駄目人間。悲観でもなく現実として、自分は不幸だと受け止めて毎日を過ごしていた高校生「中野一樹」は、ある日不思議な声を聞いた。
そして、選ぶ事になる。
タイムリミットは１年。
神様に嫌われた１人の高校生は、小さな小さなファンタジーと出会

った。

「俺、そんなの望んでなかったんですけど！」

さぁ、扉は開いた。

その先にあるのは、現実と幻想からなる真実だ。

プロローグ

例えば俺が、世間一般の”普通”に当てはまっていたとして。

みんなの為に自分が犠牲になるか、もしくは、自分の為にみんなを不幸にするかの選択を迫られたとする。

果たして、どちらを選ぶんだろう。

夜。街頭も少ない裏道を歩き、背中に気配を感じながら、そんなことを考える。

考えて、止めた。

だって、意味のないことだ。

”普通”に嫌われている俺がいくら望んだとしても、きっと叶うことはない。

だって、そうだろ？

異常が普通で、そしてそれに納得していたら、それは自分にとって普通以外の何ものでもないんだから。

（・・・なんか、ややこしいな。）

自分で考え始めといて、結局はこんがらがってしまい、軽く頭を押さえる。

その間もずっと、自分の足音に合わせて続く音。

「なぁ、まじで着いて来るつもりか？」

俺の足音がコツコツだとしたら、トコトコとかなり軽く小さな足音がピタリと止まった。

軽いため息をつきながら俺も止まり、空を仰ぐように振り向く。

（今日は、星がまったく無いな。）

まったく無関係な事を考えながらソイツを視界に入れれば、小さな唇が歪んだ。

「当たり前だろう？」

その口から覗いたのは、鋭い八重歯。

「私はお前の、ご主人様になったのだからな。」

見た目幼稚園児の様なその子供は、更に歪んだ笑いを浮かべながら異常な言葉を口にした。

（夢だったってオチには・・・ならないんだろうなぁ。）

俺は今日、世界で一番不幸だった。

そして、幸運だったのかもしれない。

俺の人生は比較的不幸が多く、それでいて幸運なんだと思う。

自分の中での記憶のスタートは、中学生から。
つまり、それ以前の記憶を失っている。

まずこれが、一番代表的な不幸だ。

そして、母親と父親共に2年前に他界。
兄弟は、兄が1人と妹が1人いるが、両親の葬式からずっと会っていない。

だけど、それぞれが別々の場所に引き取られたというわけではない。
2人の兄弟は母方の祖父母に引き取られたが、どうしてか俺は拒否されて一緒にいることが出来なくなった。

あー、違うか。拒否したか、もしくは強制されたのか。

なぜかと言うと父親は、元は結構な名家の出で、しかも長男。
だけど、母親はごく一般の家庭の生まれだ。

だから、駆け落ち同然の結婚だったらしい。

両親が死ぬまで絶縁関係もいいとこで、なのに俺だけが父方の家へと引き取られた。

なんで兄弟の中で真ん中の俺だったのかは、たぶん、兄貴はでかくなりすぎてて、妹は幼すぎたからなんじゃないか。

んで、わざわざそんなことをした理由は、父親の弟、つまりは俺の叔父とその息子達があまりに馬鹿すぎて不安になったからだろう。

こいつらに跡を継がせたら、歴史的な名家が落ちぶれるんじゃないかって。

だからこれに関しては、平凡から一気に金持ちの仲間入りができたから幸運の部類だ。

だけど、それからの生活を思いだしてみれば、足して二で割ったとしても不幸。

そんな幸運で不幸な俺の名前は、中野樹（なかのいつき）。

複雑な家庭を持っていて、最近高校生になったばかりの若々しい１６歳。

そして、誰よりも無気力という言葉が合う人間。

そんな俺はある日、とてつもなく不運で、それでいてとても幸運な出会いを果たした。

「つき！私の命令を聞けと言ってるだろう！」

「嫌だ。めんどい。」

目の前にいる、クソガキとの出会いを。

「貴様、ご主人様の命令が聴けないというのか！」

黒い髪に黒い瞳。日本人らしい特徴をしていて、そのくせ幼児のくせにえらく綺麗な顔立ちをしたこのガキは、どうやら俺のご主人様

らしい。

（あ～、なんでこう子供ってちょこちょこして鬱陶しいのかねぇ。）

「つーきー！いい加減素直になれ！でないとお前は、後1年命なんだぞ！」

「分かった分かった。だったら後1週間になったら頑張るよ。ちなみに俺の名前はいつき、だ。呼ぶなら正確に呼んでくれよ、ゴシュジンサマ。」

「むっきー！貴様の名前は呼びにくいんだ！」

そして、ついでのついでに言えば、俺の命はこのクソガキによって後1年しか無い。

でも、1年って微妙に現実味が無いっていうか、中途半端だと思う。

焦るものも焦れないっていうか、まぁ元々、後1週間ですって言われたとしても俺は動じないだろうけどな。

「あーもう、煩い。ほら、飴でも食って落ち着けよ、ゴシュジンサマ。」

「え、あ、くれるのか？なら貰ってやらなくもないぞ。」

少し意地悪く、子供の口には大きすぎる大玉の飴をやれば、何がそんなに嬉しいのか満面の笑みで受け取り、一生懸命口にいれようと頑張る。

そんな姿にちょっと笑えながら、小汚く狭い部屋の半分を占めてる

ベッドに横になった。

「つき！これは、どうやって食うものなのだ？もしかして、普通の飴とは違うのか？」

そして、困った様子で掛けられる声を聴きながら目を閉じれば、浮かんできたのはこのガキとの出会いだった。

3日前の夜、俺達は出会った。

「つーきぃー！寝るのか？」

切れない絆の代償に、魂を引き換えにして。俺は、ファンタジーな世界の扉を開けたんだ。

プロローグ（後書き）

ゆっくり更新。
それでもよければお付き合い下さい。

1－1　乱れた心

「25時まで、名だたる方をお呼びしたお食事会がある為、26時まではお戻りにならないようにと奥様から言伝を預かっております。申し訳ございませんが、その様に取り計らって頂いてもよろしいでしょうか？」

「・・・分かりましたと叔母様に伝えてください。」

「ありがとうございます。では、これで。」

「はい。伝言ありがとうございます。」

カチリ、とシンプルな黒の携帯を閉じて大きくため息。
軽蔑を含んだ口調を聞くのは、毎回疲れてしまう。

中野家。たぶん、その名前を聞いて動じない金持ちはいないだろう。
先祖には総理大臣がいた程で、未だに政界や大企業に通じている名家中の名家。

俺は、その名家の現当主の長男の子供だ。
だけど、父親であるその長男は、一般家庭の女性との結婚を望み家を飛び出した。
だから2年前まで、自分がそんな金持ちの血を引いてるなんて思いもよらず。

でも、両親が事故で他界した時から、俺はそんな金持ちの家の一員

となった。

だけど、それは決して幸運だったわけじゃない。
両親がいなくなったにもかかわらず、一般家庭より裕福な生活を出来ていることは勿論幸運だと思う。

でも、父親には弟がいて。その弟が、表面上は跡取りとなっているわけで。
さらに、俺にとって叔父にあたるその人には、生まれながらのお嬢様で、中野家のトップの妻になるのが目的の奥さんがいて、そして、息子が3人いた。

となると、だ。
いない人になっていた兄の子供が、突然その輪に入ることが面白くないのは当然。

こうやって、俺が各界のお偉いさん方と会わないようにやっかまれるのは今日が初めてでは無い。

携帯を閉じる際に見た時間は確か、午後1時。
最近入学したばかりの、というか無理やり入れられた学校の屋上で、言われた時間までどうやって暇を潰そうか考える。

（つーか、高校生に深夜徘徊を許すなっつーの。補導されたらどーすんだよ。）

でも、浮かんでくるのは不満ばかり。

（まぁ、補導されて困るのは俺だな。）

さらには、気が滅入ってくるだけで。

「はぁ・・・ダルイなぁ。」

結局、ため息しか出なかった。

「それにしても、腹減った。」

今日の昼ご飯である野菜ジュースのパックを吸いながら、どうしても自分を不幸だと思わずにはいられない。

無気力に空を見上げれば、限りなく晴天。

その爽やかさに、思わず苛立った。

「これから、どうします？」

「今日、俺のとこのパーティー来るんだろ？」

学生の性分である1日の授業が終わり、一気に校舎がざわめき立つ放課後。

アホらしい会話が耳を通る中、一人教室を出ようと席を立つ。

「樹君、もう帰ってしまうの？」

そんな時、一人の女子に声を掛けられる。

瞬間、眉間に皺が寄るのを我慢出来なかった。

「・・・何か？」

質問には答えず、学生鞄を手に掛けるのも止めない。

なのに、見るからにお嬢様ですって雰囲気を晒しているその女子は、何が可笑しいのか笑った。

「だって、今日はお家でお食事会があるのでしょう？」

すると一斉に、教室がクスクスという笑い声で満たされた。

そう、俺を馬鹿にするように。ていうか、馬鹿にして。

「だから？」

今日の俺は、いつにも増してため息の回数が多い気がする。

大きく息を吐いてから、めんどくさいですってオーラを前面に押し出して、すこし長くなっている髪をかき上げた。

そして、隠すつもりもなくその女子を睨み付ける。

こういうのも、この学校に来てから日常茶飯事だ。

金持ちのご子息達が通う、私立の名門高校。

つい最近まで一般家庭にいた俺は、この学校にいるお嬢様、お坊ちゃま達にとって、面白い玩具以外の何でもない。

どこにいたって、何をしたって、それこそ教師も俺の事を暇つぶしの玩具か、都合の良い道具としか見ない。

「もし、お家に帰れないのでしたら、せっかくです。私達が相手をしてあげようと思いまして。」

「流石、佐和さん！お優しいのね。」

「せっかくだから、私もご一緒しますわ！」

でも、俺の睨みはこの女子には何の効果も表さない。
それどころか、金魚のフンみたいに後ろにひっついている他の女子までが便乗し、ざわめき立ち。

まるで逃がさないとでも言うように、俺の周りはクラスメイトで固められてしまった。

「悪いが・・・」

「あら、何か用事があるのかしら？」

『あなたみたいな人間に？』語尾にそう付いていそうな口調で封じられた俺の言葉は、さらに教室のざわめきを強くするだけ。

しまいには、明らかな非難の言葉や、罵声すらが聞こえてくる。

一般人とはこいつ等にとって、同じ人間として見なくていいものとさえ言える。
そんな中に強制的に突っ込まれた俺は、不幸でしかない。

もう、今日何度目かも分からないため息を吐いて、俺は満面の笑みを浮かべた。
拒絶を示す、そんな笑みを。

「っ・・・！」

一瞬にして喧騒を静寂に変える程の笑いは、俺がつい最近身に着けたスキル。
これが結構、役に立つ。

そして、別段大きくせずに言葉を発せば、俺はこの現状から抜け出せるだろう。

「俺には、サンドバックになる趣味も、乱交パーティーっていう高貴なお遊びに対する興味も無いんだ。あー・・・佐和さんだっけ？悪いけど、そういうのは俺抜きでやってくれるかな。」

「え、あ。ちょっと！」

「じゃ、また明日。”俺みたいなのを”誘ってくれて、どうもありがとう。」

最後に駄目押しのワンフレーズを付け加え、安堵しながら教室を出て行った。
背中では、貧乏人だとか何だとか、あまり聞いて気持ち良くない言葉がいくつか飛び出していた。

「一般人よりよっぽど、金持ちの方が乱れてると思うけどね。」

背中に豪華な校舎と夕日を背負いながら呟けば、苛立ちは簡単に消える。

（俺で遊んだところで、面白みも何もないと思うけどな。ほんと、無駄な人生経験とスキルだけ増えていく気がする。）

将来なんて、とっくの昔に見えていないというのに。

両親が死んだのが2年前。
俺が中野家に引き取られたのも、2年前。

いっその事、両親や家族と過ごしていた時間全てを忘れていれば、
まだ楽だったのかもしれない。

そう思いながら、古びた廃屋敷で紫煙を揺らした。

外は既に真っ暗となっていて、周りは静寂。
ここは中野家からそんなに遠くない、今はお化け屋敷と呼ばれて大人ですら近づかない場所。

この2年間、唯一俺が俺らしくいられる空間でもある。

隣には、小汚い灰皿と吸殻が散らかっていて。
だけど、この屋敷全体が散らかっている為気にすることはない。

誰もいないから、一人で声高らかに笑おうが、嗚咽しながら泣こうが恥らう必要もない。

ただ無心に、延々と煙草を吸う。
俺の毎月の数少ない小遣いは、8割方これで消費されていた。

携帯には何度も何度も、確認の為か秘書の松田さんからの連絡がくる。
その度に、消費する本数が増えていく。

「どっかに軟禁でもした方が、楽なんじゃねぇの。」

ブーブーと響くバイブ音に対し、答えるのは自分の笑い声。
いっその事、本当にここに幽霊がいて、尚且つ俺を呪い殺すか乗っ取ってくれたほうがお互いのためになりそうだ。

そんな現実逃避とも、自虐的とも捉えられる思いを感じたのか、制服の右胸ポケットから覗くものが目に映った。

生徒手帳。だけど、重要なのはそれじゃない。
静かに開けば、出てくるのは古びた一枚の写真。

今は亡き母親と、父親。小学校高学年であろう兄とたぶん小学生に上がる少し前の俺。母に抱かれた妹。

全員が、大きな桜の木の下で笑っている。

「幸せ、か。」

それはきっと、この写真を表す言葉だ。

「あー・・・めんどくせぇな。」

現在(いま)が引き立たせる過去は、時に残酷だ。

『問題だけは、起こさないようにお願いします。できれば、こちらが連絡した際には出て頂きたいのですが？』

電話と違う短いバイブ音を響かせた携帯には、そんな言葉が並べら

れていた。

ガツン。

そして、次の瞬間には、その携帯は空中を舞い。鈍い音を立てながら落ちる。

「分かってるっつーの。俺が保険である間は、”みんな”幸せなんだろうよ。」

膝を抱えて呟いた言葉はきっと、この廃屋敷の塵の一つとして散っていく。

夏というにはまだ早い季節。でも、肌寒さは感じていなかった。

（「それには、お前も含まれているのか？」）

そんな、頭に直接響くような声を聞くまでは。

1－2　電波な俺

「は・・・？やばい。今俺、幻聴聞こえるぐらい病んでた・・・。」

ブルリと震えたのは、自分の危なさを感じてだと思った。
どんなに無気力な人間だろうと、堕ちる時には堕ちる。
だからこそこの廃屋敷が俺の楽園であり、現実逃避をしながらも、現実と向き合える時間を作って明日からをまた過ごせるんだ。

なのに幻聴まで聴こえてしまっては、軽く電波さんになってしまうだろう。

だけど震えたのは、本当に空気が一気に冷えたからだ。
額を流れた汗は、危険を感じた体からの警報だった。

（「幻聴ではない。」）

だって、俺の独り言に答える声が再び聞こえたから。

「え、いや。いや、いや、いや、いや！」

こんな間髪入れずの幻聴は、もう幻聴とは言えない。
だけど、慌てて立ち上がり辺りを見回しても写るのは、いつもと変わらない俺の楽園の風景だけだった。

「これはやばい。やばいぞ、樹。お前はそんな子じゃなかったはず

だ。」

（「ほう。お前の名は、樹というのか？」）

ピタリ。３度目にはもう、焦らない自分がいた。

胸の奥で激しく震える鼓動は、緊張からか。それとも、期待からか。

自分の事ながら、答えを出すことはできないけれど。

「幻聴じゃ、ない、のか。」

（「当たり前だ。私はしっかりと、存在するぞ。だがまぁしかし、今の今までは幻想に近い存在だったがな。」）

たぶん、俺にとっての普通である”異常”であるのは確かだった。

だってそうだろ？

会話というのは、通信機器以外では相手がその場にいてこそ成り立つ。

なのに、今この場には、俺しかいないんだから。

（「樹。お前は、私との対話が可能な程に孤独で満たされている。いや、孤独がお前を形成していると言っても過言では無い。」）

不思議な声は、こっちの気持ちもお構い無しに会話を続けようとしていた。

そして、放たれたモノがあまりにも的を得て過ぎていて苛立つ。

焦り、恐怖、困惑。

そういったものは不思議となかった。

「誰だよ、てめぇ。」

ただ、ほんの少し。

実際は苛立ちに隠れて、安堵したんだと思う。

（「私と、契約をしないか？私なら、きっと。お前の気持ちを理解できるだろうよ。」）

的を得た言葉を放てるということは、少なからずその本人も、そういう気持ちを抱いているということだから。

（「その暁には、切れる事の無い絆。裏切りの無い絶対。永遠の信頼が手に入るだろう。」）

俺がそれを望む様に、この謎の声の主も同じ望みがあって。

だからこそ、こんなにも明確に断言してくる。

「信頼するから、信頼してくれ」と。

そう気付けば、次に俺を満たしたのは興味と、幼稚すぎる親近感だ。

”契約”という、なんとも不可解な単語は耳を通り抜けてしまっていた。

「その言葉、本当か？」

後に思えば、これは悪魔の囁きでしかなかったんだろう。

甘美で、安易で、切ない囁き。

（「契約とは、誓約。成約は、鎖を結ぶ。裏切りは自身の破壊を産む。お互いが望まない限り、離別は出来ない。」）

「・・・。」

（「簡単なことだ。お前は、私を探し当てるだけで良い。それだけで、孤独から抜け出せるんだぞ？」）

電気も通ってない荒れた屋敷の暗闇の中。そこに佇む俺。
頭の中で冷静になれと必死に訴えてくる俺と、どうせこれ以上失うモノなんて何もないんだと誘惑する俺がいる。

（「お前がどうして孤独なのかは知らない。しかし、私も孤独だというのは真実。」）

この時、こいつがもし何か望みを一つだけ叶えてやるから、その代償として自分を解放しろとか契約しろとか言っていたら。
俺はきっと、断っていたと思う。

だけどこいつはとても狡猾で、冷徹で。
的確に俺の中を抉っていた。

そして、運命っていうやつまでもがこいつに味方をする。

「・・・？」

さっき放り投げた携帯が震え、淡い光を放つ。
見なければよかったのに。俺はこの状況で、少しだけ見えない声を警戒しながらそれを拾い上げた。

「っ！・・・どうすれば、いい？」

（「ほう。」）

カツンと、さっきとは違い静かに携帯を落とす。
力なく呟いた言葉でも、こいつには届くみたいだ。

まぁ、当たり前か。
元々こいつは、声を発するというよりかは俺だけに伝えてきてるんだから。

俺だけに。

俺、だけが。

（「この屋敷の中に私はいる。お前は、私を見つけ出せ。お前だけが私を見つけ出せるんだ。」）

その声を聴いた瞬間、俺は一心不乱に走り始めた。

携帯にきていたメールは2通。

一通は、兄貴から。

『久しぶり。こっちは皆元気にやってるぞ。お前の方は、ってどうせ豪華な生活送ってるんだろうな！たまには連絡くれないと、お兄

ちゃん寂しいな～？』

俺があそこにいる限から、皆が幸せなんだろう。
なんて自己中な考え。だけど、そう思ってしまう。

だって、兄貴達は知らない。
俺がこの2年間、どんな生活をしてきたかを。
どんな視線の中で過ごしてきたのかを。
俺達兄弟を繋いでるのは、携帯だけだから。

きっと、住み込みの使用人の方が良い部屋を宛がわれ、まともな食事をしてるだろう。
それでも俺があそこに居続けてるのは、羨ましがってる兄貴達の為だったりするんだぜ？

年金暮らしの祖父達が苦労しないよう、俺が保険でいる限り、中野家が資金援助をしてくれてる。
正確には、中野家当主が。

だからといって、この選択しかなかったわけではないのかもしれない。
提示された時、断ることだってきっとできた。
その時の代償はでかかったかもしれないが。

結局は、自分で選んだんだろう。

だとしたら、俺は相当自虐的な人間だ。

だって。

『このまま消えてくれたら手間が省けますが。しかし、ご自分の立場をお忘れにならないように。と、奥様からの伝言です。』

こんなメールを送ってくる冷酷な使用人と、そんな言葉を普通に発する人間に囲まれることを望んだということだから。

葛藤していた俺を追いやったのは、どこまでいっても孤独だった。

1－3上がった炎は始まりの灯火

（違う・・・。）

埃が舞おうが。

（違う・・・！）

朽ちた床に足を取られようが。

（違うっ！）

気にせず、屋敷中を走り回った。

扉を開け、部屋を見渡し、そして舌打ち。
それを繰り返すこと早2時間。
俺に科せられたタイムリミットだけが迫り、焦りが募る。

確信なんてものも、確証なんてものもない。
ただ、直感で違うと感じる。

庭だったろう場所も見た。
ただの泥水だけが溜まる噴水だった場所になんて、手を突っ込んでみもした。

（くっそ！）

なのに、見つけられない。

「っ、はぁ、はぁ・・・。ちきっしょう。」

ずるり、と廊下にしゃがみ込んで荒れた息に隠れて悪態を吐く。

（「軟弱だな。もうバテてしまったのか？」）

「んなわけあるか。闇雲に探すの、止めただけだ。」

なぜなら、粗方探し終えてしまったから。
こいつは、自分がどこにいるのか分からないらしい。
だけど、俺なら見つけられるとそう言った。

久しぶりだったんだ。
誰かに頼られる事自体が。

そもそも、こうやってまともに会話したのだっていつ以来だろう。

兄貴達と電話で話すことは俺が避けてきた。
ボロが出てしまいそうで怖かったから。

他の連中は、無関心かお遊びでしか声を掛けてこないから、会話というものがそもそも成立しない。

もしかしたらこいつだって、俺があまりに病みすぎて作り出した幻想だっていう可能性がある。
というか、そうでないと可笑しいぐらいだけど。

（「すまない、分かっている。ただ、あまりに嬉しくてな。・・・

会話するなんて、いつ振りだろうか。」）

「つーかお前、一体何なんだよ。」

どんどん冷静になっていけば、端に追いやられていた疑問が幾つも出てきた。

頭の中で、今まで見てきた屋敷のどこかに違和感がないか探りながら、それでいて静寂が嫌だからと話を振る。

（「私か？さぁ、自分でも分からないな。」）

（たぶん、はぐらかしてるんだろうな・・・。）

はぁ、と何に対してか分からないため息を吐きながら煙草を吸う。

点でしかないオレンジの光を見つめながら、ふと湧き出た自分のアホさを笑った。

（「どうした？」）

「いや。俺、ほんと無関心っていうか、無気力だったんだと思っただけだよ。」

2年間、この場所に通いながら何の疑問も感じてなかったこととか。

幻想にしろなんにしろ、自分の闇に何の対策もしなかったこととか。

こんな、ただの煙で誤魔化してきた餓鬼さ加減とか。

こうやって必死に何かをしてみて気付いた。

ここは、中野家に近い場所。つまりは、高級住宅街だ。

そんな金持ちばかりな連中が、こんな廃屋敷の存在を許すわけがない。
なのに、この2年間ここは当たり前のように存在していた。
俺以外の誰も足を踏み入れてない、それこそ見えてないんじゃないかと感じる程に。

（考えろ。可笑しくない場所が可笑しいんだ。）

携帯の充電は今にも切れそうで、そう長くはライトとして使えない。
それ以前に、もう少しで俺はあの牢獄へ帰らなきゃいけなくなる。
こんなチャンス、2度と訪れないだろう。
こんな、非現実的な出来事なんて。

「・・・あ。」

そして、不意に感じた違和感。
ジリジリと、フィルターが焼ける音がした。

（「いい加減、待ちくたびれたぞ。」）

「うっさい。分かってるっつーのっ！」

煙草を床に投げて踏みつけ走り出した俺に、そいつは毒を吐く。
何度も躓きながら、俺はさっき感じた違和感の場所へと向かった。
そして辿り着いたのが、1階の、元は書斎だったろう場所。

息が上がってるから、こんなにも心臓が脈打ってるんだろうか。
それとも、緊張しているのか。

理由がわからないまま胸を押さえ、ゆっくりとある物の前に立つ。
そこにあったのは、本棚だった。

高級そうな作りで、静かに佇んでいる。

一冊の本も落とさず、ここだけ時間が止まっているかのように朽ちることもなく。

それが、違和感の正体だった。

そのまま、必死に並んでいる本一冊一冊を視線に捉え、流していく。

「はぁ・・・っはぁ・・・っ。」

自分の荒い息遣いと鼓動の音だけが耳に響く。
まるでこれが、俺にとって最後の希望のよう。

まだ１６年しか生きてないくせに、どんだけ悲観ぶってんだよって感じだよな。

（だけど・・・。）

手が自然と一冊の本に伸びる。
吸い込まれるように。

「もう、一人はこりごりだ。」

（「・・・そうだな。私もだ。」）

手に取った本は重く、開いたページには見開きで魔法陣のようなものが書かれていた。
色あせているインクが、年季を感じさせた。

「おい、なんか魔方陣みたいなのが書いてる本があるんだけど。」

（「それを燃やせ。」）

簡単で、簡潔。
たぶん、笑っているんだろう。

そう思わせる声だった。

「・・・。」

（「ほら、どうした？」）

左手に本、右手にはライター。
親指に力を入れるだけできっと、この本は燃えると思う。

だけど、今になって、頭の中の冷静な俺が躊躇させる。

こんなの、馬鹿げてるって。

（「樹となら、分かりあえると思ったんだがな。だが、仕方がない。怖いのならやめても良い。なに、少しの時間でも一人じゃなくなったのだ。十分、安らげた。」）

「っ！」

ほんと、こいつはずるくて正直で。
強いくせに、強がりで。

「ばーか。からかっただけだよ！」

だから俺は、この先、お前の前に立とうと思ったんだ。
ずっとずっと、先の話だけど。

親指の軽い一押しで、本は簡単に燃え始めた。

そして俺は、一一を知る。

「ふはははははは！」

ライターから本に移った炎は、オレンジから青へと変化しながら強さを増した。
あまりの熱さに手を離すが、炎の塊となった本は床に落ちることなく、しかも揺らめく炎はまるで顔のように見える。

それは声と同じく、笑っていた。

その瞬間、やっぱりかと思ってしまう。

「はっ、馬っ鹿みてー。」

俺も笑った。俺自身に呆れて。

加えて、本がその姿を消していく変わりに、さっきまで激しく鼓動していた胸が疼く。
いや、疼くってもんじゃない。

だんだんと、痛みとなって俺を襲う。

「孤独を抱えてる者は、やはり扱いやすい。なぁ、樹？」

頭に響いていた声は、今ではしっかりと耳から伝わってきていた。

目の前の炎は、ニヤリとそれはそれは楽しそうに笑う。哂う。

非現実的なことには変わりない。

だけど、その表情は俺にとっての日常の中で良く見かけるものだった。

馬鹿にして。見下して。そうやって嘲笑う周囲と同じ。

必死に、探してやったっていうのに。

あんなにも寂しそうに、安らげたとかほざいてたくせにな。

「っ……、糞野郎が。」

痛むのはきっと、胸だけじゃなかった。

「だが私は嘘は付かない。一緒にはいてやるさ。いや、いてくれなきゃ困るんだよ。」

青い炎はそれから、ぎゅんっという効果音が付きそうな感じで急に蠢いて俺の目の前に伸びた。

近いし、熱いし、不気味だし、髪が焦げたし。

（ほんと、ふんだりけったりだ。）

確かに今日は、いつもの倍以上ため息を吐いた。

いつにも増して運が悪かったし、気分も曇ってた。

（だからって、幸せ逃げすぎだろ…。）

ジリジリと俺を焼く奴と、胸を襲う激痛。

もう対処しようとせず、委ねようと思う。

「我が名はルディウス。さぁ、樹。契約だ。」

（楽しそうで、なによりですよ。）

声も出すことが出来ず、蹲って痛みに耐え、額には脂汗が滲む。
それすら億劫になり、そのまま身体を埃だらけの床に横たえれば、
正体も知らない炎から手が伸びた。

「潔いな。見つけたのが樹で本当によかった。はは、私はラッキーだ。」

最早俺は目を閉じて、一方的な会話を聴くだけだ。
そうして、たぶん炎は手を俺の胸に当てた。

「っ……！」

「安心しろ、直ぐ終わる。殺したりはしないからな。」

体内の血液が沸騰している気がする。
瞼の裏に映るのは、真っ暗闇だ。
目を瞑っているんだから当然だが、その中にちらちらと青い炎が現れ、奥に俺が笑っている様子が映った感じがした。

まだ、何色にも染まっていない俺。

本当の、俺。

失った記憶を取り戻したいとは、不思議とあまり思わない。

だけど、染まってしまった俺の元の姿にはどうしてかホッとする。

（あー…、我ながら可愛いぞ。）

ひさしぶりにふっと笑えた。

と同時に、全身の激痛が徐々に引いていく。

「契りは交わされた。この先樹は、私の従者だ。よろしくな？」

上手い話には裏がある。

安堵の吐息に混ざって、俺は本日何度目かの悲観のため息を吐いた。

従者って、あれだよな。様は下僕ってことか。

思わず、某学園モノのアニメの主人公が良く言うセリフを叫びかける。

それをぐっと飲み込んで、諦めを含んで固く閉じていた瞳を開ければ、熱く揺らめいていた炎が収縮していく。

さらには、唐突にボンっと気の抜ける音がして白い煙が小さな部屋に充満した。

「やっと、封印が解けた！さぁ、いちゅ…いちゅ…っ！いちゅき！」

「……さて、帰ろ。」

その煙はすぐに消えて無くなったが、俺はその瞬間現実逃避をした。

ほんと、今更ながら現実逃避をしないとやっていけないと思った。

「こらー！いちゅっ、い…っき！つき！私を無視するな！」

え、何故かって？

そりゃ、あー…、えーっと、うん。

煙が晴れた時、俺の目の前には、さっきまでの謎の声や炎との対峙で感じた緊張感とは程遠い、幼稚園児ぐらいの餓鬼がいたからです。はい。

しかも、口調は偉そうで、さっきまで聴いていたのと同じに思えるけど、なにせ「いつき」が発音できていない。

最初は、噛んだのにあたかも噛んでませんと言いたげにゴリ押ししたし、二度目には諦めて略しやがった。

「そうか、チビ。悪戯すんのは楽しかったか。だけどな、あんまり人様に迷惑かけるんじゃないぞ？俺だったら、たまには遊んでやるから。だからほら、いい加減夜も遅い。さっさと帰らないと、今頃家の人達が心配してるから、な？」

俺だって馬鹿じゃないから、この餓鬼が今まで俺に不思議体験をさせてきた張本人だって分かってる。

だけど、頭で理解していても納得できないことって山ほどあるだろ？

そういう時はとぼけるに限る。うん、これ俺が今までの人生で培ってきた経験だから、参考にしてくれても構わないぞ。

早口にそう捲くし立て、餓鬼に目線を合わせる為にしゃがんで、偉く綺麗な漆黒の髪をぐりぐりと撫でた。

…今なんか、手にコツンと固いものが当たったが無視しておこう。
視界には映って無いから、気のせいだ。気のせい。

「お前、今までの流れ全部無視するのか！さっきまでの声も、炎も、私だ私！つきは契約で、私のじゅーしゃになったんだぞ！だから、うまやえ！」

「おしい。従者に敬え、だな。」

「っ！～～～！」

思わずつっこみが出てしまい、しまったと慌てて口に手を当てる。
すると餓鬼は、みるみるうちに顔を真っ赤にさせていった。

うん、開いた口から覗く八重歯が、異様に鋭く尖っているのも気のせいだなきっと。

「ようし、分かった。とぼけりゅつもりなら、お仕置きだ！しっかり教育するのも、ご主人様のちゅとめだからな！はっはっは！」

「そうかそうか。じゃ、また遊ぼうな～。」

つっこめるなら、つっこみたかった。
2度も噛んだし、本人は「はっはっは」と笑ってるつもりだが、「きゃっきゃっきゃ」にしか聞こえない。
だけど、これまた漆黒の綺麗で大きな目がニタリと怪しげに笑っていて。
不穏な空気を敏感に察知した俺は、あくまで普通を装って右手をシュタッと上げて立ち上がり、入り口に向けてダッシュした。

「あみゃいわ！」

「ぐっ！」

つもりだったが、予想は的中し、俺は見えない何かに押しつぶされた。

さらに、背中に小さな足が乗り。

俺は屈辱に呻く。

それを至極の笑みで見下ろす餓鬼は、餓鬼でありながら餓鬼じゃなかった。

「改めて、名乗ろう。私はルディウス・ド・シルベッティ。しょーしんしょーめい、それでいて最強の魔王だ。」

「…不幸すぎる、俺。」

それを聞いた途端、俺はさっきはぎりぎりで我慢した台詞を思わず呟く。

そして、本日最大のため息を吐いたのだった。

1－5　最凶駄々っ子

自分の事を魔王だと言い放った餓鬼は、俺を足蹴にしたまま言った。

「私は元々、こちら側の者じゃない。しかし、色々あって封印され、力を奪われてしまった。しかーし、つきのお陰でこうして復活を遂げたのだ。」

「だったら、さっさと自分の世界に戻ってクダサイ。」

当たり前に俺は答える。だけど、餓鬼はそうしたいのは山々だが、と呟いた。

「今の私は、人間と対して変わらない。だからこその、契約だ。」

（あぁ、これまた不穏な雰囲気ですよっと。）

ふふんと、さも得意げに告げる餓鬼、あぁルディウスだっけか。いや、やっぱ餓鬼のまんまでいいか。

餓鬼は、ぐりぐりと足を動かしながら、呻く俺にさらなるダメージを与えようとしていた。

「奪われた力を取り戻すため、つきに手伝いをしてもらうのだ。」

「断る。俺忙しい。つーか、体力も無いし頭も平凡だし、金はあるにはあるけど、俺に使う権利はないしな。あー、それに学校もあるしー―」

「断るだろうな、とは思ってたさ。しかし、それを1年以内に全て取り戻さなければつきの命は付きるとしても、か？ちなみに、奪われた力はキリ良く5つに分けられて、この世界散り散りになっているぞ。」

ピシリ。

あぁ、今の亀裂は俺の堪忍袋なのかはたまた人生が崩てただの塵となる前兆なのか。

とにかく、だ。

神様よ。いや、ゴットよ。むしろジーザス。

（俺、あんたの勘に触ること、何かしましたか？）

思ったのは何で俺ばっかという想いだけで、余命1年にされてしまったことへの憤りは沸かなかった。

「あー、やだやだ。」

「む？」

というか俺に、未練なんてものはない。

何て寂しい奴なんだと自分でも思うけど、頑張るとか努力とかそういったものは、俺には何の意味もないんだから仕方ないだろ？

唐突に笑えてきて、なんかよくわかんない力に邪魔されながらも、うつ伏せのまま背中の小さな足を手で払った。
突然の俺の抵抗に、餓鬼は驚いていた。

「俺に何か求めたって意味ねーの。頑張るとか何かするとか、めんどくさくてやってらんね。さっきのお前を探す力が俺の限界。つーかあれが、俺の一生分の頑張り。もうストック0なの。分かった？分かったなら他当たれよ。」

やさぐれとも思われる土豪に放った言葉。一気に喋りすぎて軽く息切れだ。

「1年後に死ぬとしても、か？死ぬには聊か早過ぎる年だろ？」

餓鬼は少し困惑したみたいだ。
動揺しない俺に。頷かない俺に。

「別に。でもそうだな、不安なことっていえば、それで死ぬ時って苦しいのか？というか、不信な感じで死ぬのか？」

「え、いや…」

そして、俺の若干ずれた質問に戸惑いつつも考え込む。その間にゆっくりと身体を起こした。良い加減、この不思議な重みをなくして欲しいんですけど。

よっこいしょと親父臭い動作で起き上がると同時に、餓鬼が顔を上げる。さっきまでの威勢の良さが打って変わって、その表情は自信

なさげだ。

「たぶん、電池が切れたように死ぬんじゃ、ないか？」

小さな口からでた言葉もまた、当てずっぽうにしか聞こえなかった。

「はは、そうかよ。」

またでた笑い。俺は悟った。

これは、神様がくれた贈り物なんだと。やっときた幸せな出来事なんだと。

（神様って、やっぱ残酷なんだな。）

「何がおかしい？」

立てた膝に腕を力なく乗せ、天井を仰ぐ。

餓鬼が一丁前に怪訝な顔するなっての。

「だったら尚更、俺には好都合だからだよ。」

なんたって俺は、保険なんだ。お前は知らないんだけどさ。

そして俺は保険として使われた時、きっと何もかもを失い、終わりを望むだろう。その保険が使われるとしたら、来年。

1年後だ。

「つき…お前…」

「だから、契約解消した方がいいぞ。」

にこりと笑えたのは多分、自分がどんな顔をしようとしたのか分かりたくなかったからだと思う。
そんな俺に、餓鬼は突然顔を真っ赤にさせた。

「嫌だ！」

「…は？」

フリーズ。うん、フリーズ。

「お前じゃなきゃ嫌だ！私が決めたんだ、つきは黙って俺に従えばいいんだ！」

お、おおう。何て俺様ゼリフ。だけども駄々っ子。
そりゃもう、足をばたばた、手をぶんぶん。

「うっお！」

しかも、何か変な空気砲みたいなのまで飛んで来た。
待てって、落ち着けって！

「とにかく、つき！」

「お、おう？」

若干シリアスだったマイワールドを圧倒するほどの餓鬼の駄々。ずびしっと指を指されて思わず返事をすれば、漆黒の瞳はぎらりと光った。

「お前は私の僕だ！」

どうやら俺の余命は後1年で確定したようです。

2－1　黒糖飴が最終兵器

「ルディウス、お前いい加減にしろってまじで！」

「つきが悪いのだ。私を無視するから！」

例の餓鬼と出会ってから1週間が経った。
その間の変化といえば、餓鬼をルディウスと呼ぶようになったこと。
んで、今居るのは学校の屋上だ。
そしてただ今絶賛口論中。

理由？それがですよ聞いてください。ていうか聞け。

「だからってお前、教室で騒がれても俺しか見えないんだからな？俺がまるで頭がおかしい奴みたいになるだろう！」

学生な俺は学校に通うのが性分だ。つっても適度にさぼってるけどさ。
当然、ルディウスは留守番させるつもりだった。
だけど、あろうことかこいつは学校にまで付いて来ると言い出して。

勿論、拒否した。
子連れで学校行けるかあほ！
しかし、そんな心配は無用だと高笑いされた。力を失っている今の状態だと、人間には俺かもしくは素質のある奴しか見えないんだと。
だからまあ、家にいさせられてたんだけど。

それでも嫌なもんは嫌だと最終的に全力で拒否ってやったら、空気砲が飛んできて激しく玉砕。

まあ、ここまではまだいいんだ。問題はその先。

着いて来たとしても、俺は相手ができない。授業中は静かにしなきゃいけないだろ？

最初はよかったんだ最初は。学校を探検したり、膝の上（超不本意）で読書したり。（これまたえらい難しいのを読んでて眩暈がした。）

だけど如何せんお子ちゃまだ。午前中すらもたない。後半はもう、俺に対しておもしろそうにちょっかいをだしまくるんだこれが。しかも、抵抗できないって分かってやってるから性質が悪い。

結果、俺はなんとか午前中をのりきった。だけど、無理。もー限界。午後まで耐え切る自信が欠片もない。ていうか俺、よく初日でキブアップしなかったな。

忍耐力なさすぎと呆れられてもいい。俺にしては、学校に連れてきた1日目でそうならなかったことが奇跡すぎる。

「はっ！みたいだとは笑わせるな。つきは、おかしいじゃないか。」

（こ　い　つ！鼻で笑い飛ばしやがった！）

「もう、いい。好きにしてくれ。」

怒りが沸きまくりながらも、それをぶつける気力が残ってなかった

俺は、けたけた笑うルディウスの横でがっくりと項垂れ大きく溜め息を吐くので精一杯だった。

ああ、こいつといると、数少ないＨＰ（ヒットポイント）がすぐに瀕死に追い込まれるよ。

「ほら、取りあえずこれ食っとけ。」

とにかくもう、とりあえず回復させてくれ。

そう思い、静かにして欲しくて常備している飴をあげようとする。

「お前はまたそれか。」

だけど、途端に渋い顔になるもんだからおもしろい。ルディウスはころころと表情が変わる。俺にはできない芸当だ。

「黒糖をばかにするなー？俺はこれがなきゃ死ねるぞ。」

主に栄養失調で、とは言わない。

ルディウスはもう、俺の立場と生活環境を知っている。

そして、憤慨してくれた。

分かるまでの間は、俺がやれば当たり前のように受け取っていた食べ物も、絶対に受け取ろうとしなくなった。例え、飴玉一つであろうとも。

「今の封印が解けきっていない状態の間は、別に食べずとも死なない。そもそも魔王にとって食事とは、嗜好でしかないしな。」

そう言って、しかしお前はと怒鳴り。

「城の使用人でも、もっとましなものを食ってる！」

と、ちょっと聞きたくなかった単語も入りながら憤って。

「いっその事呪い殺してしまおうか…。」

と、俺の身を案じてくれた。勿論止めたけどさ。

「また昼を抜くのか。」

「月末だからなー。」

「煙草なんて吸うからだ！」

コンクリの上に横になってる俺の隣でちょこんと座るルディウスに頭を叩かれ、だから辞めただろと言えば当然だとまた怒られる。

「ちょっと待ってろ。」

そして徐に立ち上がり、飴玉を口の中で転がす俺の傍を離れた。

「どこに行くんだ？」

特に引き止めるつもりもなく聞けば、ルディウスは口角を少し上げてニヒルに笑った。おぉ、魔王っぽいぞ。

「ここには馬鹿な奴しかいないからな。少しぐらい無くなっても、連中には端金だろう？」

それは立派な犯罪ですよーという言葉の変わりに手をひらひら振れば、ルディウスはトコトコと消えていった。

良い気はしないが、それで腹が満たされるなら文句はいえない。
もう3日ぐらいまともに食えてないからな。
育ち盛りには地獄すぎる。

にしても。

「馬鹿しかいないって、俺も含まれてるのかよ。」

そこはちょっと、勘弁したいよご主人様。

（あー、青いなぁ。）

空を見上げながら、ファンタジーな世界に慣れてきた自分を感じた。
だけど、これはただの序章にすぎないなんて。

感覚が大分麻痺してる俺には、気付くってほうが無理だったのかもしれない。

2－2　思春期してるか少年達！

昼休みの終了を告げるチャイムが響く中、俺は未だに屋上で寝っ転がっていた。

「あのやろう、ぬか喜びさせやがって。」

屋上には、チャイムに加えて腹の虫が泣く音が混ざる。

鳴くじゃなくて泣く、で合ってるからね俺の場合。

ルディウスはあれっきり、戻ってくる気配がない。

かく言う俺も、未だにＨＰを回復中。動く気なんてさらさらございません。

だからただぼーっと、空を眺める。そのまま、目を瞑ってまどろんでいた。

そうして暫くすると授業が始まり、教師の声が聞こえてくる。

「あらやだ、美味しそうな子がいるわね。」

時たま、聞いてはいけないような会話も。にしても、エロい声だなー。

「少し痩せすぎな気もするけど、まぁ若いから元気よねきっと。」

おぉ、これはもしや、美人保険医と生徒のアレですか。
ありがちな展開ですか！

「ていうか、綺麗な顔してるわねぇ。これであっちも良い感じだったら最高だわ。」

うんうん。若いうちに色々経験してみるのは良い事だ。ただし、学校にはばれない様にもちっと気を付けた方がいいかもなぁ。そもそも、窓を開けっぱで事に望もうなんてがっつきすぎだろ。

なんて微笑ましく聞いていると、ふと気付いた。

（保険医じじぃじゃねーか。しかもあんな若い教師いなかったはず・・・。え、生徒か？いやでも、だったら若いからとか言わねーよな。）

「あーもう、もろにタイプ！今が夜だったらいいのに～。」

違和感はもうひとつあった。

その声は、間近でしていた。
睡眠欲求よりも探究心の方が上回り、ぱちりと目を開ける。

視界に映ったのは、青い空ではなくばっさりと長い睫。

「え？」

「あら？」

素っ頓狂な声を上げた俺に、それは同じく驚いたように声を上げた。
あまりに顔が近すぎて、ビクッとなりながら後ずさる。

向こうは俺を凝視したまま動かない。　俺も、動けなくなった。

気まずい静寂。視線をさ迷わせて誤魔化そうとしたけど、突き刺すような相手の視線にそれもできない。

遠くからは、教師の流暢な英語が聞こえるけど、まるでここだけが別世界みたいだった。
いや、実際別世界だろう。

だって。

「あんた、あたしが見えるんだ？」

ニヤリ。

真っ赤で妖艶な唇をしたソイツは、どこをどう見ても人間じゃなかった。

腰までの長い髪と瞳は、血より赤そうで。俺の顔を覗き込んでいたからか、四つん這いの姿勢で強調されている魅惑的な腰と臀部の後ろでは、ゆらゆらと槍みたいに先が尖った鍵尻尾が揺れている。
全身も、豊満な胸の露出しちゃいけない部分や下半身が真っ黒な毛皮みたいなので覆われているだけだ。あれは絶対服じゃない、デフォルトだ。コスプレでもない。

「うふ。今日のあたしは、相当ついてるみたいね～。」

そう嬉しそうに発した口からも、人間には到底ありえない鋭さの牙がのぞく。ルディウスよりも鋭くて、それはどう見ても凶器。

（あ～、もう、こんちきしょう！）

誰にぶつければいいのか分からない苛立ちを押し込めようと心の中で悪態を吐いている間も、まるで獲物を前にした肉食動物のように舌なめずりをしていた。

その姿に、ぞくりと身震いする。身体が危険信号を発する。たぶん、命よりも貞操の危機を察して。

「夜ならまだしも、こんな真昼間にあたしの事が見える人間なんて、一生の内に会えるかどうかも分からないもの。」

おいおいおいおい。

俺っていつの間に、そんなレアな奴になったんだ。

そしてあなたは何ですか。

思わず頭を抱えてしまう。

こうして悩んでいる間にも、んふふと笑いながらセクシー露出狂美女（今命名）は俺の方へ四つん這いのまま迫ってきていた。

一歩近づいてこれば、俺が一歩下がる。

しばらくそうして逃げていたけど、すぐに背中がフェンスへとぶち当たった。

ついでに、自分がレアになった理由も悟る。

「ねぇ、坊や。このお姉さんと契約しない？そしたら毎日、あ～ん

なことやこ～んなこと出来るわよ～？」

うわお、色気はんぱねぇ。あれか、これが大人の色気ってやつか。
大人なのか知らねーけど。

クラリと揺らぎながらも、右手は自分の胸を掴んでいた。
どう考えてもこいつは、ルディウスと同じようなファンタジー側の存在だ。
そして、契約という単語。

俺がこうして、明らかに人外なものと遭遇しちゃうレアな奴になったのは、ルディウスとの契約が理由だろう。

今、右手が触れている場所にはその証が刻まれている。
心臓の上に真っ赤な薔薇の花の蕾があり、そして腋近くまで伸びる真っ黒な茨の蔓。そんな刺青が。

格好いい？よかねーよ全然。

「そして、私が生きている限り死なない身体にして、大切にしてあ・げ・る。」

「それは困るな。そいつは私のものだ。」
白く滑らかな手から伸びる真っ赤で鋭い爪が、俺の顎をくっと持ち上げようとした時だった。
なにがそんなに楽しいのか、セクシー露出狂美女に負けないぐらいニヤリと笑うルディウスが、屋上の扉にもたれながら静かに声を発した。

いつの間に戻ってきたんだか。タイミングからして、絶対見計らっ

てたなこいつ。
でも、その甲斐あってか見事にベストタイミングだ。きゃーかっこいいー、ぐらい言ってやるべきかも。
ただ、残念なことに見た目はどうしたって餓鬼だ。
その姿で扉にもたれかかって偉そうに格好つけたとしても。

「ぷっ、笑える。」

思わず噴出せば、ぎろりと睨まれた。

ひぃ、射殺される！

「あ～ら、陛下。もしかして、この子って陛下の？」

止まっていた指先がつっと俺の顎を持ち上げた。

（いいから早く、俺を解放してくれよ。）

ゾクッと背筋が凍る様な雰囲気は、俺のいない所で出し合ってくれ。
そう願い、ルディウスに目配せをした。
勿論、通じろと念じるのも忘れない。

「そうだ。」

「なら、尚更欲しいわ～。」

だめだ。
こいつら、巻き込む気満々だ。

（ていうか、仲間いんなら力探しはそっちに頼めよ！）

ルディウスについては、自称魔王ということしか知らない。後、確実に人間じゃないってことか。

だから、交わされる2人の会話は分からない単語ばかりで、むしろ耳に入らないようにした。

そのせいか？

ルディウスの表情が、普段と違っていることに気付く。

（あいつ、何で焦ってんだ？）

視線がせわしなく、屋上全体を見回している。

扉から一歩も動かない。

眉間には皺を寄せ、まるで隙を窺っているような。

（まてよ？…うそだろ、おい。）

そこで浮かんだ、1つの予測。

一瞬で、これまでのルディウスとの会話を辿る。

そこから素早く要点を絞り出す。

封印、契約、俺の必要性。魔王、餓鬼の形（なり）。

――力の、喪失。

俺にとってはあの空気砲だけでも充実脅威だけど、仮にルディウスが最強だったとして現状あれが精一杯だとしたら。

そして、その力を奪えるとしたら？

答えなんて、分かりきっている。
その考え自体は、俺の周りにも溢れてるじゃないか。

陥れ、蹴落とし、奪い取る。

ルディウスは、こちら側の者じゃないといっていた。
だけど、セクシー露出狂美女はその存在を知っている。

と、すれば、ルディウスはこっちでも有名なのか、もしくは追いかけてきていたか。
ここら辺は予想でしかないけど、どっちにしろ頼ろうとしないところからして。

「走れ！」

「やっぱり敵かー！」

「きゃあっ！」

それぞれの反応はばらばらで、ルディウスはあの空気砲を突然ぶっぱなし、俺はその行動で考えていたことが当たっていたことに思わず叫び、んでセクシー露出狂美女は油断していたのか空気砲をもろに受けて悲鳴を上げながら吹っ飛んだ。

呆然としそうになりながら慌てて立ち上がりルディウスの方に掛ければ、間を置かず叫ばれる。

「そのまま走って逃げろ！」

「お前はどーすんだよ！」

後ろでは、いたたたたと美女（長くてもう美女でいい）が起き上がっている感じの音がしていた。

「私はこの淫魔（サキュバス）と話をしなければならないからな。」

やっぱりか。

たぶんそう言うだろうなと予想はしていた。

かなりオブラートに包んだ言い回しをしたのは意外だったけど、雰囲気からしてその話合いとは決して穏便ではないだろう。

だから、聞いた途端走りながら器用にため息を吐く。

「も～、頭きた！」

美女改めサキュバスはお怒りなご様子。ビシッと地面を何かで打ち付ける音もした。

振り向かなくても分かる。鞭だ！むしろ、鞭じゃなきゃ嫌だ！

とまあ、余裕ぶっこいている様に思える俺は、内心頭を働かせるので忙しかった。

余裕？ふざけんな。

サキュバスとか、どこのＲＰＧですか。

俺は、俺しか持ってない。

それだけだ。

だから、自分で動く。

自分の為に、だ。

そして、丁度ルディウスの横に辿り着いた時、この状況から脱するプランが組み上がった。

「気にせず行け！」

「ふっざけんな～！！」

戦略的撤退。名付けて、誘拐犯じゃありません！プラン。

俺を置いてお前は逃げろ発言をしたルディウスを、ノンストップで小脇に抱え、唖然とするサキュバスを屋上に残し、俺は階段をそれこそ転がるように駆け下りた。

勝手に死亡フラグたてんじゃねーよ！巻き込まれたらどーすんだ！

2－3　悪知恵だけが取り柄です

「つき、下ろせ。……つき！」

「うるせぇ、黙ってろ。舌噛むぞ。」

叫び暴れるルディウスを抱え、どんどん階を下りていく。

勿論、この後のプランに落ち度は無いか探りながらだ。

だけど、その奥で小さかった怒りが徐々に膨らんでいく。

「あの淫魔を放っておけば、もっとやっかいになるんだ！私は大丈夫だから、いい加減下ろせ！」

尚も騒ぐルディウスを無視し、俺は目的の場所の前に辿り着いた。

そこは、俺のいるクラスの教室の扉の前。

なぜここに、と訝しげな顔をするルディウスを地面へと下ろせば、小さな口はこの好機を逃すまいと開いた。

「私は、」

「ここで待ってろ。」

でもそれは、俺の言葉に一蹴りされる。皆まで言わせるか！

「しかし、」

「いいな、待ってろ。そこから一歩も動かず黙って待ってろ。」

生憎俺は、久しぶりに怒ってるんだ。手加減無しに睨んでやれば、それこそ「ぴっ！」と変な悲鳴を上げて固まっていた。
それを確認してから、がらっと扉を開ける。

勿論室内は授業中で静まりかえっていたから、普段以上に大きな音で響く。全員の視線が俺へと集中する中、足は教卓へと向かった。

「失礼します。授業中に申し訳ありません。」

教師の前まで来て深々と頭を下げれば、日常で向けられる嫌な視線を全身に浴びせられる。

今日の俺はとことん最悪な運なのか。今は数学の授業中だった。教師は普段から俺を蔑む嫌な野郎だ。
数学教師はごほんと咳をして、あからさまな音を立てて教卓に教科書を置いている。

「遅刻とは良い度胸をしているね。君は、私の授業を受ける気が無いのか？」

自分が有名私立高校の教師をしていることを、何よりも自慢に思っているんだろう。予想通りの言葉に聞こえないよう内心でチッと舌打ちしてから顔を上げる。

おーおー、いかにも私は真面目ですって感じの眼鏡をクイっと上げ

て睨んでくれて。ご苦労な事ですよ。
そう毒吐きながら、用意していた言葉を発した。

「すいません。体調が芳しくなかったので保健室で休ませてもらっていたのですが、保険医の先生が今日は早退した方が言いとおっしゃって。」

「そんな連絡は受けていないし、早退届けも持っていないようだが？」

めんどくさいとは思うが、予想していた言葉しか口にできない教師が可笑しくも思う。
そんなもんの切り替えしなんて、簡単なんだよ。それよりも、待たせているルディウスの方が気になる。
これでさっきの言葉を守ってなかったらどうしてくれようか。

あからさまに蔑みの目を向け続ける教師に対し、俺は少し首を傾げて眉を下げた。
後ろで聞こえるクスクス笑いは、無視だ無視。

「そう、ですか。どうしよう、困ったな。保険医の先生が連絡を入れて早退届けは出しておいてくれるという話だったので、もう家に連絡を入れて迎えを呼んでしまって。到着の連絡を受けたので、出きるだけ早く下に行かなければならないんです。なんでも、お爺様をお迎えに行こうとしていた時に僕が連絡をいれてしまって。それを耳にしたお爺様が、お忙しいにも関わらず体調を崩しているのならと、お待たせしてしまっている状態なんです。」

邪魔を許さない口調で一気に捲くし立てた言葉は、勿論嘘だ。
ポイントは、控えめに困惑した表情を作るというところ。

案の定、前半はてめぇ立場を弁えやがれって感じの顔をしていた教師が、お爺様というフレーズを聞いた途端恐れ慄く素振りを見せた。ついでを言えば、クラス全体が凍りつく。そして、生徒全員が教師の動きを伺い始めていた。

お爺様。この言葉の力は本当に偉大だ。

俺の家での立場がどんなものなのかは、皮肉な事に同学年に在席する叔父の末の息子が親切にも全校生徒に伝えてくれている。

だから、他の金持ちをも黙らせる名家に所属しながら見下されているわけなんだけど。

だけど、それが出来るのはお爺様にそのことが伝わらないからだ。

基本的にあの人は、自分の利益以外に関心がないからな。

逆を言えば、中野家当主であるあの人の怒りを買ってしまえば、もう社交界では生きていけない。

そのお爺様を待たせていると言った今の状況で、この教師は俺が早退するのを許す以外に選択肢は無い。

「……なら仕方が無いな。早く用意をして出て行きなさい。」

ふっ、勝った。しかも、保険医は物忘れが激しいじいちゃんだからな。この後わざわざ確認を取るなんて面倒なことしないだろう。

許しが出たらもう、お礼もそこそこに自分の席の荷物をまとめて教室を後にする。

仕方ないから、一礼だけは忘れずに。じゃないと、明日からの嫌味がめんどい。

そして、背中で扉を閉めた瞬間、言いつけを守っていたルディウスが言葉での猛攻撃を始める前に再び小脇に抱えてダッシュ。

「走りにくいから鞄抱えてろ！」

「づぅ～～ぎぃ～～～！」

再び小脇に抱えられ、尚且つ鞄まで押し付けられるとは思っていなかったのか、若しくは俺の足の速さがさっき以上に増したのに驚いたのか、ルディウスの上げたぐえっという悲鳴は空しく廊下に響いた。

仕方ねーだろ！視界に鬼の形相なサキュバスが映ったんだから！いくら美人でもあの顔はねーわ。むしろ美人だから怖さ倍増だわ。

ルディウスも気付いたのか、ひっと息を呑む。

華麗な動きで靴を履き替えだだっ広い校門までの道を駆け抜けながら、恐怖以上の怒りをどう処理しようかと、俺は青ざめるルディウスを見る。

相手の行動が読めるくらい同じ時間を過ごすなんて、一体いつ振りなんだろうか。

記憶の中には何故か、今は亡き両親と兄弟との思い出しかない。気付いていたのか、それとも蓋をしていたのか。

初めて俺は、自分という存在に違和感を覚えた。

開いた扉は、一つではなかったのかもしれない。

2－4　むしろ蛙に睨まれた蛇

「餓鬼は黙って言う事聞いとけ！」

雲一つ無い晴天。その昼下がり。
その穏やかな時間に、無駄にトゲトゲしてて当たったら確実に肉抉られるだろって思う危ない鞭を手にするサキュバスを目の前に俺は、ルディウスに声の限り容赦なく怒鳴る。

怒鳴られるのに慣れていないのか、それとも怒鳴ると思ってなかったのか。
息を呑んで固まるルディウスからサキュバスに向き直り、手に持つ鉄パイプを握る力を強めた。

サキュバスは目を輝かせながら、心底楽しそうに笑う。
身体を襲う緊張感は、確実に危険で異常を知らせていた。

「や、ばい。あれは、ヤバい！けど、腹減りすぎて力でねぇ。てめぇが期待させたからだぞ、こんちきしょう！」

「なっ…仕方ないだろう！その後すぐに、あのサキュバスに見つか

ったんだから！」

見つかんじゃねぇよという切ない願望の言葉は、儚く風に浚われていく。

頭から離れない鬼の形相のせいで後ろを振り返ることができないが、俺達は未だにサキュバスに追いかけられていた。

学校を出てから右へ左へ、とにかく人の居ない場所を探しているが、無情にも天は美女の味方だ。

さっきから、全力疾走する俺に、すれ違う通行人の奇異の目線が突き刺さる。

きっとみんな、『どうしたんだろうあの子。まるで何かに追われてる様な…。』的なこと思ってるんだ。

そうです、見た目は美女だけど鬼に追われてるんです！

ついでに言えば、分かってます。誰もそんなこと思ってないだろうなってことぐらい！

でも、そうでも思わなきゃ、空腹で今にも力尽きちゃう。

「で、てめぇは何で追われてるんだ！？」

味の向こう側ならぬ空腹の向こう側に到達出来る事を願いながら、それでもこの鬼ごっこが少なからず俺に時間をくれたのは確かだった。

ただし、走りながらの会話は余計に体力を消費するから諸刃の剣だ。

「……大方、私の力を欲したんだろうさ。何せ私は魔王だからな。」

ああ、人は余裕があってこそ何ぼだと思う。つまり、余裕のない俺の沸点はかなり低くなっているようだ。

（聞きたいのはんなことじゃねぇんだよ、クソガキがっ！）

恐らくルディウスははぐらかしたかったんだろう。普段の俺なら、そんなこと余裕で分かる。だけど、今の状況だと馬鹿にされているだけに感じた。

俺は自慢でも捻くれてでもなく、純粋に希望は持たない。何故なら、それが俺にとって無意味だと分かっているからだ。ただ、だからこそ現状維持を心がけている。そして、今を壊されるのだけは無視できない。

なのにその破壊が、ルディウスが原因で起ろうとしている。それに巻き込まれているんだから、必要なことをはぐらかすのはルール違反だろ。

とうとう、爆発した。

「馬鹿にするのも大概にしろよ。仮にてめぇが、その最強の魔王様だったとしても、俺が聞きたいのは今の状況なんだよ。俺がてめぇをこうやって抱えて走ってんのはな、別に助けたいからじゃない。助けられるのが嫌だからだ。しかもあの女、俺だけ逃げても追いかけてくるだろうよ。」

「っ！そんなの、分からないだろうが！」

怒りというものを表に出す時、誰もが激情するとは限らない。俺みたいなタイプは特にそうだけど、心の中で怒りを煮えたぎらせながらも淡々と言葉を発する奴もいる。

んで、ルディウスみたいに気持ちまかせに叫ぶ激情タイプと、その正反対なタイプがぶつかれば、表面上冷静な奴の方が有利だ。

「だったら聞くが、てめぇは今現在、最強なのか？」

もし肯定したら、俺は即効ルディウスを後ろの鬼に献上してやるよ。だけど、予想通りルディウスがこの質問に頷くことはなかった。

「相手が格下だったら、俺は先にお楽しみを確保しておくな。」

欲求に忠実な奴なら尚更。しかも、サキュバスからしてみれば俺達は契約している間柄で、先にルディウスを狙ったとしたら俺がそれを防ごうとすると思っているはずだ。だったら尚の事、俺の確保を優先させたほうが楽だろう。

美女に迫られるってこと自体には悪い気はしないが、でもまぁサキュバスっていったらあれだよな。精を喰らう魔物だっけか、悪魔だっけか。流石に俺、人間でいたい。魔王と契約させられてるけど。後1年の命だけど。

でもサキュバスが死ぬまで生きさせられるよっかは、まだマシだ。

「で、だ。俺は保身の為に動きたいわけだけど。サキュバスってのは、人間でも倒せるのか？」

「…お前の順応性の高さが怖いんだが。見える人間なら倒せる、こともない。」

おいおい。そろそろこの餓鬼、お仕置きしていいですか？
嫌味以外ははぐらかしてばっかじゃねーかよ。はっきりしない奴ってのは、どうにも苛々する。

（危ないなんて百も承知なんだけど。）

もう呆れるしかなくてはぁ～と溜め息を吐いている横で、ルディウスも何故か落ち込んでいるけど。仕方ない、詳しい事は後で吐かせるとして。

いつの間にか人気が無い場所へ辿り着いていたのか、やっとこさ切なくなる視線を感じなくなっていた。

そのまま、周囲を探れば都合良く武器も隠れ場所も満載の工事中のビルを発見！

（これはあそこしかないでしょ。）

人生で最高の速度を出している足は止めず綺麗にターンを決めて、そのまま山積みにされていた鉄パイプを一本拝借。
ちょっと心もとない作りかけの階段を上がって、柱だけで何も無い広いスペースがあった階で戦うことに決めた。

「うぇ、走りすぎて吐きそうだ。」

「吐くもの入ってないだろうが。」

ほんっとにこいつは一言多いな。
ええ、胃液しか入ってないですよ。

っと、カリカリしすぎてる場合じゃないな。
耳を澄ませば、カツンカツンとサキュバスがこっちに向かってくる足音がする。

「物理攻撃は？」

「え、あぁ、効く。」

「んじゃ、俺前衛。お前後衛な。」

鉄パイプをしっかり握り、後はサキュバスが出てくるのを待つだけの臨戦状態に入り、いつでも来いよと気合を入れた。
柱に隠れて奇襲も考えたけど、失敗した時のリスクが高いから却下。

一番無難なのが、俺が前に出てサキュバスの気を引き付け、ルディウスがあの空気砲で隙を作り止めを刺す。
上手くいく確証なんてものはないが、それでも頭の中で何度かシュミレーションをした。

なんで、初の喧嘩が人外相手なんだよ。
これでも俺、人殴った事もないんだけど。

でも、不思議と落ち着いていた。
握る鉄パイプは両手で持ってたら、なんかすんごく違和感がしたから片手にするか。

そんな俺の様子をじっと探る様に見ていたルディウスは、俺が片手に鉄パイプを持ち変えた時、一気に焦りを表す。

「お前、戦の経験ないのか！」

（えー…、今更ですか。）

どうやらこのちびっ子は、俺が何かしらの格闘技を齧っていたり、もしくは喧嘩慣れしてると思っていたらしい。

「そんな剣の持ち方したら、隙ができまくりだろうが！」

「いやいや、鉄パイプだから。」

これが剣って、名前はパイプソード？
うわ、格好悪っ！

「もういい、やはり私がやるからお前は下がってろ！」

「ばっ！せっかく俺が頭使って足酷使したっつーのに。台無しになるだろうが！」

ぐいっと前に出ようとするルディウスを足で押し返そうとしつつ、二人でぎゃーぎゃー。

「貴方達、本当に契約してるの？陛下も、小さくなって可笑しくなってしまったのかしら。」

そんな俺達に、流石に呆れたのかサキュバスがとうとうつっこみを入れた。
俺としても、嘘であってほしいんだけどね。

しかし、ダメージを受けていない俺に対し、ルディウスが一気に眉

を顰めた。

出会ってから今まで、一度も見た事無かった表情だった。

呆れてとか、言う通りにしない俺に向けてとは全然違う、例えるなら侮辱されて怒るようなそんな感じだ。

「己の縄張りすら作れずに堕ちたサキュバスが、この私に可笑しいだと？」

餓鬼の口から出るには到底低すぎる声と、違和感ばりばりの言葉使い。

ルディウスの〝本来の姿〟を知らない俺とは違い、サキュバスはそれを知っているんだろう。

刷り込まれた恐怖に一瞬固まったのを、無視することは出来なかった。

ルディウスは完璧に冷静さを無くし、コツリと無駄に足音を響かせながら俺の前へと出た。

サキュバスは無意識なんだろう、視線は餓鬼のくせになんか違う表情をしたルディウスに釘付けのまま片足を後ろに下げる。

（怖っ。だけど、ちょ、ま……！）

「な、なによ。最強の魔王なのは、封印される、前の話じゃない！あれから、どれだけ経ってると思ってる、のよ！」

サキュバスは震えながらも、強気に言葉を返した。

それにより、ルディウスの威圧感が増す。

だけど、いってしまえばそれだけだ。威圧感だけは本物だが、それに見合った能力が無い。
だから俺は焦ったんだ。

逆上されては困るから。

だけど、気持ちとは裏腹に、この蛇に睨まれた蛙が感じるような威圧感に対して免疫のない俺は動けずにいた。

（まずいって。止まれって俺の震え！）

神様に嫌われている俺の願いは、いっつも菓子折り付きで叶えられない。
サキュバスは、それにと続けた。

「最強って言ったって、下らない情に流されて、封印されるオツムの足りない魔王じゃない。あんたの時代なんて、とっくの昔に終わってたのよ！」

「……なんだと？弱小の、魔物にも魔族にも慣れない種族めが。己が世界にも留まれない塵が偉そうに。」

「なんですって！？」

どっちも、終わった。
気になる単語がありすぎるのはちょっと脇に置いておいてだ。

サキュバスは、ルディウスの逆鱗に触れ。ルディウスも、サキュバスの逆鱗に触れ。

二人は、俺の逆鱗に触れた。

この偉そうな餓鬼と出会った時に聞いた何かが壊れる音は、神様の思惑通り、そして残念ながら、俺のちっぽけな日常が欠片も残さず崩れる音だったんだろう。

「堕ちたのはあんたじゃない！さっさと死にやがれ！」

「てめぇは何がしてぇんだよ！」

サキュバスの鞭がルディウスに襲いかかるのと、俺がルディウスの横っ腹に容赦なく蹴りを入れてふっとばし、立ち位置を奪うのは同時だった。

「つき！」

「てめぇは一切説明も知識も与えずに俺を巻き込んでおきながら、勝手な主張と行動ばっかしやがって。挙句に俺まで殺すのか、あ、ぁ？これが終わったら、質問には全部答えろ。とにかく今は、俺が前衛でてめぇは後衛だ。柱の影でびくびく震えながら、適当に空気砲をぶっぱなしゃーいいんだよ。この、無能がっ！」

迫り来る、鞭。息を呑むルディウス。

震えは消えていた。

「とにかく！」

躊躇なく目の前にきていた鞭を片手で去なし、サキュバスを無視してルディウスにパイプソードを向けた。

そして冒頭へと戻る。

頭の中は真っ白で、俺は俺であって俺でなかった。

2－5　人間9割は黒歴史でできている…はず！

頭に上った血は、さっきの攻撃を防いで一気に下がった。

冷静に戻れば戻る程、正直、逃げたくなる。

かといって、後ろで不安そうに、それでいて怒っているルディウスを見捨てることも出来ないと思う。

助けられたくないなんて、ただの建て前だ。

確かに、こいつと出会ってから毎日精神と体力共にくたくたで面倒くさい。

だけど、俺の無機質な日常が色づいたのも事実だから。

（大分絆されてるな。）

さっきまで怒っていたのも、俺を頼ろうとしないルディウスに苛々したのかもしれない。従者を庇うご主人様ってどーよ。

こんな状況で余計なことを考えすぎだけど、浮かんでくるんだから仕方ない。

しかも、ルディウスのことばっか。

本当、らしくない。

らしくないよ、俺。

感情的になるのは、かなりいただけない。見えるものも見えなくなるし、見なくていいものが見えてしまう。

ということで、今日の俺は黒歴史として記憶から消し去ることに決定。

抹消してしまおう。

「安心してね。私好みの君の顔は傷つけないから。」

サキュバスはクスクスと笑った。

若干青筋がたってるけど、それはルディウスに対してだ。

（そりゃまあ、余裕に思うだろうな。）

サキュバスにとって、男は餌みたいなもんなんだろう。1対2とはいっても、相手は餌と餓鬼。本気になれってほうが難しい。俺が初撃を防いだことで、向こうも駆け上がってきた血が大人しくなってくれたようでほっとする。

（油断してくれたら、こっちは助かる。ただ、ちょっとむかつくな。）

思わず眉を顰めれば、あらやだいい顔と更に喜ばせてしまった。

「今後の為にも、今のうちに躾てあげるわ。」

「慎んで遠慮する。」

冗談じゃない。そんな鞭でビシバシやられたら、色々抉れる。

「ふふ、つれないのね。」

「あいにくと、苛められて喜ぶタイプじゃないんでね。」

それを跪かせるのが最高なんじゃない、と女王様、違った。サキュバスはカミングアウトした。

まぁ、その気持ちは分からなくもないけど。ただし、する側だったらの話ね。

「お前はインキュバスか。」

珍しくルディウスにつっこまれたよ。

呆れた顔を向けられ、素知らぬ顔をする。

この間も、サキュバスは楽しみで仕方ないのか鞭でビシビシと地面を叩き、尻尾を揺らして舌なめずり。

俺が動くのを待っているんだろう。

本音は、相手の動きを待ちたい所だが、これ以上はまたルディウスが騒ぎ出しかねない。

鳥頭は恐ろしい。

「恨みっこ、なしってことでよろしく。」

俺は無意識に、パイプソードの切っ先を刀でも持つかのようにサキ

ュバスに向け、左手を逆側に添えた。

「行くぞ。」

合図は、ルディウスの為に。

（お前が最強の魔王だという証拠を見せてもらうぜ。）

鞭をしならせるサキュバスに対峙した。

「生意気ね、坊や。生意気すぎるわ！」

動きが変則的で自在に操れる鞭は、そのせいで使い手を翻弄していた。

俺の視線は、サキュバスの鞭を持つ手首に固定されている。

ふっと息を吐き、手首から狙われている位置を予想して鞭を去なし、すぐさま構えを前方に戻す。

さっきから、それを繰り返していた。

観察力と視野の広さ。それが、俺の最も頼りにしてる長所だった。

それは今までの生活が身に付けさせてくれたものであり、全てに於いての命綱。

あと、どうやら俺は反射神経も結構高いようだ。元々、運動は苦手

ではないし身軽でもある。じゃないと、頭に体が着いてこれないもんな。

だけど、自慢じゃないがもやしっ子。力任せに迫り来る鞭を叩き落す芸当は出来ない。だから、軌道を反らすためにパイプソードを使う。

最初からこの武器は、防具として使うつもりだった。

それでも、既に手が痺れてきていた。

サキュバスも、軽視していた俺が予想外に粘るもんだから、徐々に苛立ちを見せてきている。

体力と精神共に疲労し、額を流れる汗。

手首だけ見ろ。そこだけを観察しろ。

自分にそう言い聞かせ、無理やり冷静さを保つ。

でないと、色々折れる。

だって、鞭を去なす度に床から変な音がするんだもん。

ピシパシじゃなくで、ドカって音が。

しかも音と一緒に、足になんかの破片が当たる。

それって確実に、床抉れてるってことだよね。

きっと今周りを見ちゃったら、所々にちっちゃなクレーターがあるよね。

コンクリ砕く鞭にさっきから対抗してるとか考えたら、冷静になんてなってられないよね！

（だ、だめだぞ樹。考えるな、感じるんだ！）

利き腕は結構限界にきてるが、ルディウスはまだ一切の動きをみせていない。

ただ、視界に映らないってことは、ちゃんと隙を窺ってはくれているようだ。

（それでいい。後は俺が、サキュバスの意識を向け続けて隙を作ればいいだけだ。）

チャンスは1度きり。
失敗は許されない。

タイミングは、サキュバスの苛立ちが限界に達する直前だ。

「もう！なんでそんなただの棒が抉れないのよ。」

（抉れるって言っちゃったよ。やっぱり俺を抉るつもりだよ…。）

やーめーてー。
全力で引いてしまい、今自分がどんな顔をしているのか想像がつかない。
俺には、見た目冷静な顔をしているようにと念じるしかできなかった。

ちなみに、コンクリをも抉る鞭を去なしてもパイプソード（だんだん愛着が湧いてきた）が抉れない理由は、鞭の鋭利な棘が全て下に向いている、つまり、鉤状になっているからだ。

あれは、まず対象に引っ掛けてから所有者が自ら引くことで抉れる仕組みだ。
なら、引っ掛けられる前にこちらから鞭の表面をすべる様に力を加えて力の方向を変えればいいだけ。
だからパイプソードは抉れない。その代わりに、目を凝らして見てみれば、無数の引っかき傷が出来上がっている。

「あんたが格下だからだろ。」

「なんですって!?」

思わず出てしまった言葉。いや、実際には狙った言葉。
失敗が許されないものほど、俺は自らそのタイミングやチャンスを作るタイプだ。

失敗の恐怖とか不安は、希望がある奴が抱けばいい。

最初から、餌に貶されたら逆上してくれるだろうってのは予想してたからな。

「陛下といい、あんたといい。もういいわ、知らないから。」

ぎりっと鞭を握りしめたサキュバスは、一回だけわざと俺の真横の床に鞭を打ち付けた。

「っ!」

盛大な音と共に、無数の破片が俺を襲う。

顔を庇いながらそれが落ち着くのを待ち、そろっと隣の床に視線を

向けようとして――やめた。

若干視界に入ったのが分かった瞬間、やめようと思った。
見たら腰を抜かす自信がある。

たぶん、今までのクレーターとは比にならないものが出来上がってるだろうなって、そう考えられるぐらいには見たから十分だよね。

「はっ、手加減してやってたんだっつーの。なんで俺が魔王の従者やってっと思ってるんだよ。」

「どうせ、言葉巧みに操られただけでしょ。」

正解です！
とは言いません。喉まで出かかりましたがなんとか抑えました。

代わりに、ばーかと貶してから用意していた言葉を放つ。
最大限、俺にできる最高の睨みを利かせながら。

「俺が人間の中で最強だからだよ。」

「っ！？」

ビバはったり。
ここで初めて、俺は自分からサキュバスの方へと突っ込み攻撃に転じる。

チャンスを作る為の準備は整った。
後はご主人様のお仕事ですよ？

2－6　胸は神様の贈り物

肩で息をする俺と、冷たい目をしたルディウス。
周囲は、ぷちテロでもあったかというぼろぼろで悲惨な光景だ。

終わってしまえば、どんどん実感や現実感が薄れていく。
だけど、自分の体の疲労と目の前のモノ、惨状が現実だとはっきり示していて。

「やだ…っ…、う……っ。」

俺達は、朦朧とした意識の中で痛みに呻くサキュバスをしばらく黙って見つめていた。

結果から言おう。
見事に俺達は、サキュバスに勝った。

攻撃が振りだというのを、ご主人様はちゃんと理解してくれていた。
鞭が俺の右わき腹に狙いを定め、それが命中することをサキュバスが確信した瞬間、そのサキュバスに右側の柱から巨大な空気砲が放たれる。

俺はルディウスが動いたことを確認できた時に、攻撃のために振り上げたパイプソードを右後ろへともっていき、目一杯足を踏ん張りながらバッターよろしくフルスイング。
空気砲の勢いも加わり、半ば自分からパイプソードに当たりにいったそのダメージは相当なものだったはずだ。

しかも、狙ったのは頭。
的としては胴体に比べて小さく、命中率には不安があったけど、そこはまあなんとか当たって正直ほっとした。
それでも、人間なら頭蓋骨陥没は免れないほどの力がぶつかったにも関わらず、意識を完璧に失うことがなかったから恐ろしい。

まあ、人外ということで色々考え、だからこそ頭を狙ったっていうのもあるんだけど。どんな生き物でも、基本頭を潰せばいいよなーって感じ。

そうして終わった戦いだけど、ルディウスは何かを考えていて、俺もこの後のことを考えている。
サキュバスの事もそうだけど、いかに人目を突かずにこの場から立ち去るかのほうが重要だ。
きっと、仕事に来た人は現場を見て唖然とするだろう。
警察に通報もするかもしれない。なら、人目につくのはかなりまずい。

「つき。」

「……あ？」

と、ルディウスが渋い顔をしたまま俺に声を掛けてきた。
お互い口調が荒くなるのは、興奮がまだ覚めやらないからか。

「それはもういい。」

そんな俺に、ルディウスはそう言った。

はて、それとはなんだろう。

そう思っていれば、すっと静かに指で示す。
それは、俺の相棒になりかけているパイプソードで。

「離して、いい。」

この時ルディウスが何を思っていたのかそんなことは健闘もつかないが、表情だけで言えば、どうも俺を訝しんでいる気がした。

俺は俺で、ちょっぴりパイプソードとの別れが名残惜しい。
といっても、頭を殴った時の衝撃で見るも無残にひしゃげたからには、もう活躍の場はこないだろう。
しっかり指紋を消すのは忘れず、パイプソードは役目を終えただの鉄パイプへと戻った。

「こいつ、どーすんだ?」

「殺すさ、勿論。私の封印が解けた事を知ったのは偶然だと言っていたし、ばれたら困る。」

そうして状況を終わらすべく聞いた質問。

いつ情報を引き出したんだよ、とは聞かない。たぶん見つかった時に聞いたんだろうし。
それよりも気になった。すごーく気になる。

ルディウスは、ナイフを取り出していた。
自分の横の何もない空間が黒い円を浮かべたと思ったら、その拳よりすこし大きいぐらいの円に手をつっこんで。

（武器、あったんかーい！）

大きなサイズじゃないから、武器として使えたかどうか分からないけど。

なんか俺の努力ってことごとく無駄なんじゃないかと思ってしまうほど、ナチュラルに出しすぎだ。

いや、いいんだ。パイプソードが十分俺の為に戦ってくれから。

と内心思いつつ、ルディウスの考えに同意する。

しゃがんでサキュバスを覗き込めば、死を恐れて顔を青くしていた。

といっても動けないんだから、潔く諦めるしか道はないんだけど。

「んだなー。ばれたらこういうことが増えるんだよな？」

「あぁ、間違いなく。取りあえず質問は後だ。ちゃんと答えるさ。」

「ＯＫ、ならいい。だったらほら、貸せ。」

ん、と手を出せば、ルディウスは明らかに戸惑っていた。

「どちらがやってもいいだろう？」

まぁ、そうだわな。

だから俺がやるって言ってるんだけど。

「いいよ、俺がやるから。」

すっと小さな手に握られていたナイフを奪い、そのナイフをしげし

げと眺めた。
丁寧な装飾がされていて、素人目にもいいものというか高いと分かる。

そのままで、どこが急所か問えば戸惑いはまだあるのか、ちょっと上ずった声で心臓と教えてもらった。

「……すまない。」

小さく呟かれた声はシカトしておいた。
だって、俺が引き受けたのは自分の為だし。

流石にほら、見た目が幼児な奴が見た目人とそんなに変わらない生き物をナイフで刺すとこ見るのは気分が良くない。
理由はそれだけだ。

逆に、嫌がる要素がないっていうか、罪悪感はもちろんあるけど、実行したところで俺が社会から迫害されることはない。

そんな冷めた俺とは違い、ルディウスはきっと、巻き込んでしまったこととかに少なからず申し訳ないと思ってはいるんだろう。
わがままが主成分みたいな奴だから、だからといって俺の日常が返ってくることはないだろうが。

そこは諦めるしかないって、もう分かってるからいいけどさ。

「んまー痛いだろうけど、悪いな。」

挑んだ時点で、負けることも考えていて当然だし。
早々に立ち去る為、俺はそう一言だけ告げて、躊躇なく心臓目掛け

てサキュバスの体にナイフを埋めた。

「うわ、やわらけー……。」

「お前なぁ、どっちが悪魔か判断しかねるぞそれは。」

その時に不可抗力で触ってしまった胸に対して思わず出た言葉にルディウスがつっこんでいたが、これは仕方ない。

一瞬苦しそうに顔を歪めたサキュバスは、すぐに弛緩してそして身体を砂に変えて消えていった。

「ん？」

その後に残ったのは、不思議な赤い石。

「それは魔力石だ。まぁ、名前そのまま魔力の塊だな。元の魔族が持っていた魔力の大きさに応じて力の差があるから、この石の場合はそう役には立たないだろうな。」

「ふ～ん。ならほら、お前持ってろ。俺が持ってるより、少しはマシだろさ。」

ほい、っと投げたその石をルディウスがキャッチしているのを確認して、俺は立ち上がって出口へと歩きだした。

「質問は帰ってからみっちりさせてもらうからなー？」

「あぁ、分かっているさ。」

そして、横に並んで歩くルディウスに気付かれないよう、腕を頭の後ろにまわす。
その手は貸すかに震えていた。

ナイフを埋めた時に感じた感触が抜けず、吐き気を覚えながらも、心が割り切っていることが少し悲しくて。

悪魔呼ばわりされても仕方ないよな、と一人呟いた。

2－7　試合に負けて勝負に勝つが如し

サキュバスとの戦いのその夜。
幼児と高校生が外にいるのには適さない時間に、俺達は出会ったあの幽霊屋敷にいた。

理由は勿論、ルディウスに説明をさせる為だ。

「面倒なことだな、お前も。」

「まぁなー。」

あの後、人目に付かないよう全力で注意しながら帰路についた俺達は、一度中野家へと帰宅し食事をして、もう一度外へ出た。
あえて偽装工作をしたのは、あの家で話をするにも、たぶん夜遅くまでかかってしまうと思ったので、声が自分の部屋から漏れて訝しまれても困るからだ。

家の者には俺が、延々と独り言を言っているようにしか聞こえないだろう。
そしたら、問答無用で病院に放り込まれかねない。流石に俺も、それは勘弁したいよ。

というわけで、時間をみて幽霊屋敷へと来たってわけ。
そんな回りくどいことをしなきゃいけない俺に、気を使って労ってくれたルディウス。
だけど、幼児に慰められるっていうのが逆にダメージを与えてきて

いるのは秘密だ。

そして幸いにも、明日は学校は休み。
朝までかかろうが問題ない。

無駄に気合を入れておかないと、こういった機会が今後もないかぎり、普段のルディウスは大切なこともはぐらかしかねないからなぁ。

「んじゃま、始めますかね。」

「お手柔らかに頼むな。」

苦笑まじりに答えたルディウスに、必要なこと以外詮索はしねーよと断りを入れて、俺は今まで溜まってたものを遠慮無く言葉にし始めた。

「お前は言っちゃえば、異世界から来たってことで合ってるんだよな。」

俺が手始めにしたことは、質問というよりは確認だった。
二人仲良く（？）、ルディウスが封印されていた本があった書斎の本棚に寄りかかりながら、静かな場所で静かに話しをする。

ほこりっぽさがまた、なんともいえない雰囲気を醸し出していた。

「あぁ。」

「で、お前は自分の意思でこっちに来たんだな？」

「まぁな。しかし理由は」

言いたくない、という言葉は途中で手を振って遮る。
といっても、言わせる為にじゃなくて分かっているという意思を込めてだ。

「詮索はしない、って言っただろ。俺の質問は全部、俺が必要なものだけだから。」

「すまん、助かる。」

それに、その詮索が俺にとって良いものにはならないと思ってるしな。
だから、礼なんていらない。

「あーでも、封印された理由は話してもらいたいかも。明確にお前を狙ってたんだったら、封印が継続されているか調べに来ていた可能性があるし。それに、もしそうだったらバレたら追ってがかかるだろ？」

そうなったら、かなり面倒なことになりそうだ。
俺じゃ対処しきれない可能性のが高いし、そんなことになるなら関わりたくない。
だけどルディウスは、即座に首を振った。

「理由は正直、俺にも分からん。だが、追ってについては否定できるな。封印されてから暫くは、文字通り全てを封じられていたが、そうだなこっちの世界で１５０年ぐらい経ってからは、思念体と言

ったら分かりやすいか。それで外には出れていた。その間、私目的の訪問者は一切いないかった。思念体だから、誰にも気付かれなかったがな。」

「いやいや、待て待て！お前一体どんだけ封印されてたんだよ。」

「４３７年。」

さらっと告げられたものに唖然。恐らく、わざわざ俺が分かりやすい時間で計算してくれたんだろうが、それでもだ。
そんだけの時間、こいつは一人で過ごしていたってことか。

自分は見えるのに、他の目には止まらない。そんな日々を。

寿命については、疑問に思ったところで仕方がないだろう。そもそも、人種というか種類が違う上に、世界までもが違うんだから。
それに、異世界について疑いを持とうにも、目の前でファンタジックなものを見すぎているため否定のしようが無い。

「あー、うん。まあいい。むしろ助かった。これで、大抵のことには驚かなくてすみそうだ。」

暫く頭を抱えて混乱しそうになる脳を落ち着けてから、俺は再び気合を入れた。
危うく、同情心から答えを出そうとしてしまったからだ。

何の答えかは、今は言わないし悟られるつもりもない。
相手は人外。しかも、自称魔王様。出会い頭に油断しまくった分、慎重にいくべきだ。

「くっく、お前は本当に不思議な奴だ。今のを驚いたで済ますか、普通。」

そんな人の気も知らず、ルディウスは楽しそうに笑った。
余程可笑しかったのか、それとも嬉しかったのか。破顔する姿は、初めてその姿に相応しく見えた。

「よし、んじゃ封印云々での追っては今の所気にし無くていいだろうな。じゃあ、何で今日襲われたんだよ?」

そっからは、質問と確認の繰り返しだった。
ルディウスは約束通りはぐらかすことはせず、答えられない事や答えたくない事はその都度はっきりそう言って。

そして話を聞いた限り、どっちにしろ今後ルディウスが襲われることは回避しようがないことが分かった。
その理由が、壮大なスケールのものとなってまた頭が痛くなったりもしたが、聞いて損はしなかった。

どうやら今日のサキュバスとか、俺の世界にいるそういった種類の魔族と呼ばれるものっていうのは、元はルディウスの世界で産まれたものらしい。
魔族の他に魔物というものも存在しているらしいが、予想外にそこの定義について拘りを持っているルディウスの説明が長すぎたため、今回そこは割愛。

それよりも重要なのが、何故その魔族が俺等の世界にいるかってことだ。

こっちにいる魔族は様は、生存競争に負けた弱者。自分の世界じゃ

生きていけないから、こっちの世界に堕ちてきたらしい。

そして重要となるのが、ルディウスというか、ルディウスの封印された魔力っていうことだ。

「魔力というのは、潜在的なもの。修行や鍛錬によってその質を上げることはできても、産まれた時に定められた限界は超えられない。例え能力的に吸収できたとしても、魔力石と同じくそれは消耗品だ。その身を喰らおうが、何をしようが得られはしない。だが、例外として、切り離された魔力だけがその身に取り込むことができる。つまり、あのサキュバスは、私の封印された魔力が目的だったってわけだ。」

しかし、予備知識っていうのがこれほど大事なものだったとは。

まるで、足し算すら知らないのに√の計算をさせられている気分だ。

あまり理解できていない様子の俺に、ルディウスも困った感じで肩を竦めた。

まぁ、本人にとっては知っていて当然な情報だから、今以上の説明を求めたって困るだけだわな。

「えーっと、あー…、つまりだ。魔力石を氷に置き換えたとして、それが飲み込むには無理な大きさだとする。だけど、力を得るには飲み込まなきゃいけないんだけど、その氷を溶かすことは出来ない。んで、封印されてるルディウスの力は氷ではなく水で保存されている。だから、手に入れば飲み込めるから力を得ることができるって感じ、か？」

仕方なく、無理やり、本当に無理やり今の話を自分なりに分かりやすくまとめてみた。

「そう！そういうことだ！」

するとどうだろう。予想外にうまい例え方だったらしく、柄にも無くルディウスが興奮した様子で同意した。
なんだろう、前にも説明したことがあって、理解してもらえなかった経験でもあるんだろうか。

まあそこは、詮索でしかないので聞く気はないけど。

「あれ？でもだったら、お前を狙う必要ないだろ。力持ってないんだし。」

そして抱いた疑問。簡単なことだ、封印を解いてしまえばいいだけじゃんか。
わざわざルディウスを狙う必要がどこにあるん……、いやあった。

「本体の封印は、他人でも解けるんだがな。力の封印は、本人しか解けないんだ。」

質問した後に気付いた答えと同じ事を、ルディウスも口にする。
ということは、成る程これは面倒だ。

俺の考えている事が分かっているのか、それでも、と言うルディウス。
出来ればそれ、聞きたくないな。

「私は、つき以外の人間に頼むつもりは毛頭ないからな。」

（いや、諦めはしてたけどさ。少しばっかり期待させてくれよ。）

余りにも周囲に邪険にされすぎてて、一人ぐらい自分を気に入ってくれる奴がいてくれたらな、なんて思ったこともあったが、まさかその小さな願いがこんな形で叶えられるなんて誰が予想しようか。
ただ、俺は元来切り替えの早い人間だ。

また文句を言われるのかと微妙に苛立っているちびっ子を隣に、俺はまず一つを決めた。
後は、一番重要なその一をベースに境界線を決めよう。
諦めるしか道がないなら、妥協にもっていくまでだ。

「いい、それはもう諦めた。だから、こっからはこれから先必要なことについて聞いていくぞ。」

「お前のその適応能力は尊敬するが、切り替えの速さは不気味すぎる。言っとくが、死ぬ可能性だってないわけじゃないんだぞ？」

しかし、そんな俺の心境とは真逆なルディウス。
張本人がそれを言っちゃだめだろ。

もしくは、俺が拒否して粘ると考えていたのか。だとしたら、こんなにあっさりしてたら不気味に思うかもな。

「つきは、何を考えているのか分からなくて困る。」

しまいには、死ぬかもしれないと脅されても動じない俺が気に食わないのかぷくーっと両頬を大きくした。

おいおい、頬を膨らませたところで、俺には何の効果もないぞ？
ぶっちゃければ、ちょっと可愛くてときめいてしまったりしてなく

もないが、むーって唸ったって俺にはどうしようもないからな。

「死で脅したところで、都合が良いって言ったり、しれっとしてたり。私が魔王だと信じているみたいだが、だからといって特に態度を変えたりしない。それどころか、魔王を顎で使ってサキュバスと戦うわ。お前、本当に人間か？思念体でうろつくようになってから、大分長い間こちらの世界の人間を観察してきたが、つきの様な奴は一人もいなかったぞ。」

（こいつ、怒鳴った事根に持ってやがんな。）

頬を膨らませたまま、両膝を抱え、床に「の」の字を書き始めるチビが、最強魔王様な世界が少し哀れに思えた。
もしかしたら、身体に併せて精神も幼くなってしまっているのだろうか。

「ま、腹黒いからなー。」

仕方なく、頭をぐりぐりと撫でてやる。
おまけに頬を突付けば、ぷす～っとなんとも気の抜けるような音。

「ぶっ！良い音したじゃんか。」

「つ～き～？」

さっきよりかは、幾分穏やかな空気が流れた。

お互いが気付き、でも敢えて言葉にはせず。そして、それぞれが噛み締める。
きっとルディウスも、こういう関係を知らない。

こういう、何の柵も邪魔しない関係を。

それから俺は、残っていた必要なことを聞いていった。

手がかりはあるのか、とか。どういった魔族が、地球にいそうなのか。

あと、封印を解けばどういった弊害が出てくるかとか。

５つの封印のうち、いくつ解けばある程度の力を取り戻せるのかとか。

始めより細かく、詳しく。予備知識を溜めていく。

何より、重要だったのが。

「何個封印を解けば、仲間を呼べるんだ？」

「……仲間か。」

「臣下っつーのか？そういうのでもいい。」

仲間はいないのか、そんな質問は不粋だと分かっていた。

いたらとっくに頼っているだろうし、そもそも俺が封印を解く必要なんてなかっただろう。

だからこそ、この問いだ。

俺の意図を悟ったのか、そもそも仲間を呼ぶ事事態難しいことだっ

たのか。
暫く黙ったまま、ルディウスは自分の掌を見つめていた。
「…3つ。恐らく、3つ分取り戻せればいけるはずだ。」
そして、ようやく口を開いたルディウスは真っ直ぐに俺を見る。
日本人と同じようでまるで違う、黒というよりは漆黒というのがしっくりくる瞳で射抜くように。
だから俺は、照れを隠すようにその瞳の上、額にでこぴんをくらわせてやった。
「あだっ！」
「仕方ないから、手伝ってやるよ。ただ襲われるだけってのは癪だし、そもそも大迷惑だからな。なら、お前が自分で自由に動けるようになるまでっていう制限付きで、契約に従うさ。」
それが俺の妥協の結果。
今でもめんどくさいとか、どうでもいいと思う部分はあるけど、俺にとってここまで関わった他人はいない。
だから、それに免じてってわけだ。
さすがに、俺等友達じゃん、てことは思わないし死んでも言わないが。
ただ、協力者程度ならなってやってもいいと思ってはいる。
「つき、私との契約内容を思いっきりシカトしてるだろ。」
「だーかーら、余命云々は最初に言ったけど逆に俺にとって都合が

良くなるかもしんないから気になんないんだって。ただ、今のままじゃ、俺もお前も不便すぎんだろ。だったら、俺にもメリットが出るところまで手伝うだけだ。その後は、自分の力で何とかしてくれ。お前がもし、俺を死なせたくないって思うんなら1年以内に全部取り戻せばいいし。つーか、それは契約を破棄すればいいのか。」

と、ここまで言ってふと気付く。それがあまりにも重要なことすぎて、言い切ってから固まった。

待てよ、しまった。

何素直に、仕方ないから途中まで手伝ってやるとか言ったんだ俺！

ここは、手伝うことを条件に、契約破棄してくれるよう交渉するべきだった。

（うおぉぉ！なに妥協とか言っちゃってんの俺。詰を見誤ったあぁ！）

最後の最後での大失態に打ちのめされて、頭を抱えて思わず唸る。

そんなことも露とも知らないルディウスは、暢気に笑った。

俺を、人間らしくないと言いながら。

「……ルディでいい。ルディウスは言いにくいだろ？」

そうして俺達は、3つの封印を解く為に一緒に過ごすこととなった。

愛称で呼ぶことの意味を、知らないままで一一。

閑話　魔王様的観察日記

中野樹という人間は、立場柄様々な者を見ていた私ですら出会った事の無い希有な人物に思う。
と、言葉を濁せばそう言えるが、実際には変人だ。

この世界のこの国、日本ではごく当たり前の黒髪に大きく長い睫に縁取られた茶色の瞳。
まだまだあどけなさの抜け切れない少年で、それでいてとてもとても端正な顔立ち。
美丈夫というよりかは美少年であり、その綺麗な顔がなければかなりの危ない人間と言える程に中身は変だ。

出会いは突然だった。

見えているのに見てもらえない。いるのにいない。
そんな状態で過ごすようになってから、２５０年ちょっと。
寂しいとか、解放されたいだとか。そういった感情もとっくに沸かなくなった頃にそれは訪れた。

といっても、中野樹という人間は、本体が封印されている場所に何度も来ていたので、私は知っていた。
少年は私が見ているということにも気付かず、初めは様々な顔を見せていた。

そのほとんどが悲しみ、苦しみ。負の感情ばかりだったから印象は強い。

しかも、屋敷に訪れる度にそれは色を増して行き、ある時突然止まった。

それからは、失笑、無気力、怠惰。
見た目にそぐわない雰囲気に言葉を失った。

私は、孤独を見ていたのだ。

或いは、まるで姿見の様に自分と重なった。
なんでもないと言うように、何も感じないというように、紫煙を揺らすだけ。

自分がその立場だとしても、存外本人は中々当たり前となって気付けない。
それが、こうやって第三者となってみれば気付くんだからおかしな話だ。

そして、ここ数年何度も屋敷に来ていた少年はその日も笑顔を失った顔で無表情に座っていた。
時たま携帯をいじくり、写真を眺め。独り言を零しながら、ただ時間だけを浪費する。

しばらく前から、私はこいつしかいないと思っていた。
いや、こいつが良いと。

封印が解けるなんて諦めていたから、それは些細な願望でしかなかった。
いや、それ以上だったかもしれない。こいつ以外にだったら、解かれたくないとすら思っていたのかも。

「分かってるっつーの。俺が保険である間は、みんな幸せなんだろうよ。」

そして、少年は口にした。
その言葉は、耳を通り脳髄を刺激する。

『私が内に秘めていれば済むことだろう?それで皆が幸せであれば、何も苦労ではないさ。』

『その皆には、陛下も含まれているのでしょうか?』

ある臣下と昔交わした会話が、突如浮かぶ。
当時は、何を言っているんだと思っていたが、ああそうか。
私がそれを言った時、あいつはこんな気持ちだったのかもしれない。

「それには、お前も含まれているのか?」

気付けば、届かないと分かっていながら聞かずにはいられなかった。

この少年に、友は家族はいないのだろうか。
まあ、居たとしてこんなにも孤独を纏わせていたとしたら、私はこれほど興味を惹かれなかっただろうが。

それは只単に、無いもの強請りや一人よがりでしかないから。

自笑しつつ少年に目を戻せば、その身体は固まっていた。
若干きょろきょろして、両腕で自分の身体を抱きしめて身震いをする。

「は…?やばい。今俺、幻聴が聞こえるぐらい病んでた…。」

ああ！この言葉を聴いた時の歓喜といったら！
驚いたのは私の方だ。
神という存在を初めて意識し、感謝したほどだった。

「幻聴ではない。」

半信半疑でありながら、今度は期待を込めて言う。声が震えるなんて、今までの人生であっただろうか。

「え、いや。いや、いや、いや、いや！」

再び反応があり、確信した。

それからは、平静を装いつつ少年を逃がさないよう必死だった。
あの時の自分の必死さは、きっと思い出す度に苦笑いしてしまうだろう。
これが恐らく、黒歴史というものだ。

この少年、中野樹との出会いは、私に様々な変化を与えてくれる。
出会ってまだ1ヶ月程でそうなのだから、これから先はもっと違った世界を見せてくれるんだろう。

だから、樹もそうであって欲しいと思う。

養子か何かなんだろうが、樹は中々上流の貴族だった。
しかし、平民の出らしくて待遇は眉を顰めるだけじゃ済まない程だ。
与えられている部屋は、屋根裏のようなベッドで半分以上埋まって

しまう狭さで最低限の家具しかなく。
食事も、住みこみの使用人の方が良い物を食べていると感じるぐらいに質素で、しかも夕食のみしか与えられない。
当然、屋敷の身内（家族と呼ぶのは樹が憐れすぎる）とは別に取っていた。

傲慢な貴族に対し、殺意が芽生える程の憤りを感じるなんて事、城にいてもまったくなかったというのに。

ただ、内面は変人ではあるが、そんな境遇にもかかわらず中々芯が通っていたことには驚いた。

確かに捻くれてはいるしやる気の無さは大きすぎるが、学校でのあの鈍感さは正直笑える。

本人曰く、蔑まれているだけらしいが。少なくとも女達はそうではないというのに。あれは明らかに、熱を帯びている。貴族としてのプライドが邪魔してはいるが、どうやったらあれが蔑みに思えるんだろうか。
忍び笑いと判断しているものも、明らかに歓声のようなものだというのに。

しかも、だ。樹よ。少しは危機感を持て。中には男でもそういう奴がいるぞ。
私もそうだが、男色の気がないのなら、あいつ等に尻を向けるな。
視線が怖い。怖すぎる。確実に狙われてるぞ！

おっと、すまない。少し取り乱してしまった。昔ちょっと、そっち方面でごたごたがあってな。まあ、トラウマみたいなものだ。

とにかく、私は樹を気に入っている。
でなければ、あれだけ精神的に強制力の強い契約を結ぼうなんて思わない。

だが、そこは私が気に入った樹だ。まさか、余命を定めたのが都合が良いと言ってのけるとは、全然思惑通りにさせてはくれない。

……幼少期の身体に戻ったのも、予想外だったが。

お前は知らない。ちょっとした仕草や言動が、私の封じた記憶を揺さぶり動揺させるなど。

例え、力が全て元に戻ったとしても、私はお前をもう手放そうとは思っていないということなど。

『私、夜が大好きなの。だって、ルディの髪と目は夜の色じゃない？だったら夜って、とっても優しい時間だわ！』

だからこそ、あの名で呼ぶ事を許したのだ。

今後も、存分に私を楽しませてくれることを期待しているぞ。

閑話　魔王様的観察日記（後書き）

ルディウスは外見は子供ですが、中身は立派な大人です。ただ、元々が我侭な性格なので、子供っぽい部分も大きいですが。

この日記は、樹に付いて学校にいった時に、暇を持余して魔族の言語で記したものだという設定。

遠く無い未来、きっとルディウスは読み返してあまりの恥ずかしさに悶えながら焼却処分するでしょう。

樹はその様子を目撃して、何やってんだこいつと呆れて見るか、もしくはこっそり中身を見ていた場合、馬鹿にして笑うかも。

（´，｀）プッ

って感じで。笑

さて、次章ではやっと1つ目の封印を解く云々に入るかと思います。自己満足で書いてる部分が大きいので、文才についてはノーコメントで行きたいと思いますが、アドバイスや誤字脱字がありましたら教えて頂ければ幸いです。（誤字脱字は今後自分でも見直してちょこちょこ直していきます）

3－1　秘め事は悲を纏う

自分を無視するのも、他人を無視するのも得意だ。
いつしかそれが、無視から気付かないに変わった。

分かりやすく言えば、動物が捨てられていても、誰かが拾ってくれるだろと思い通り過ぎる奴から、それ自体に気付かない奴に。

感じるのも放棄して、見るのも放棄して。
今の俺には、一体何が残っているんだろう。いや、そもそも何か持っていたんだろうか。

サキュバスとの対峙から3週間が経った。
その間、これといった変化も進展も無い。

「平和だなぁ。いやぁ、まったくもって素晴らしい。」

「…ボロボロで、よくそんなセリフが言えるな。」

「あー、おかえり。何か進展あったか？」

相変わらずルディはちびだし、封印も解けていない。あ、そうそう。実はこの魔王様、前々から察してはいたけど、元の姿は立派な大人だそうだ。
ま、どうでもいいっちゃいいことなんだけど。

「ない。それより、またか。少しは反撃したらどうだ。」

最近はずっと、俺が学校の間、ルディが情報を集めながら封印を探すという日々が続いている。
ただ、派手に動いて魔族にバレては困るから、満足な結果は出せていない。

勿論、俺も全力で手伝っている。――徒歩でいける範囲のみ限定で。

「そんなことしたら、それこそ相手の思うツボだからなぁ。」

あ、そういや変化が一つあったな。
それが今、俺をベッドに横にならせてる理由なんだけど。

「貴族の陰険さは、嫌になるほど見てきたつもりだが。これは、私もさすがに酷いと思うし、お前のその態度もどうかと思う。」

ルディはそう言って床に座り、ベッドの端に顎を乗せた。
納得いかない、理解できない。そんな顔をしながら、片肘を立て頭を支え、空いた手でつんつんと俺の身体をつつく。

「じゃあ俺は、お前をドSと認定してやろう。――いって！てめ、怪我人になにしやがる！」

「ドMが。」

冗談ではなくルディをドSだと言ったのを感じたのか、思いっきり服の下の痣を押されて痛みに呻いた。

以前の俺は、学校以外極力自分から外出しない、引きこもりのたまごだった。

それが、ルディに協力する約束をしてから、頻繁に外出するようにしている。

理由は勿論、封印の場所探し。

封印された当時の記憶を聞き、それを元に推測した結果、封印された力は日本以外にも飛んでしまってはいるだろうが、その殆どは日本にあるという考えに至った。

大きな力を押さえ込むのには、勿論同等の力が必要だし、それをさらに遠くに飛ばす為にはまた別にエネルギーが必要だ。

それが魔力にも適用されるかどうかは俺自身は判断できないが、その考えに対しルディの返事は肯定。

さらに、ルディの言葉を全面的に信用したとすれば（それしか予想材料がないので厳密には信用とは言えないが）、封印は油断が招いた結果らしい。

ということは、だ。油断していなければ回避できる程度の力だったということにならないだろうか。

だったとすれば、比較的近くに目的はあると考えられる。

そして、希望的予想も込めて、　国を基準としてにそういう推測となった。

だけど、予想外の妨害が一つ。それが、俺が頻繁に外出するようになるのと比例して行われるようになった、いやがらせだ。

これがまた、なんていうか馬鹿が考えた結果の馬鹿な行為というかなんというか。

どうやら周囲には、アウトドア派に突然なったのは俺が何か良からぬ事をしようとしているみたいに見えたらしく。

だったら、外に出ないよう動けなくしてしまおう、そうしよう！

しゃあ動けなくさせるにはどうしよう。痛めつければいいんじゃね？

（馬鹿かお前等！っと、馬鹿だったな。）

とういうわけだ。

ちなみに現在、服の下にはもはや笑えるぐらいの数の青あざがある。

ルディには抵抗してるとは言ってないけど、これでも最低限になるようには頑張ってるんだぜ。受身と避けならもう師範代レベルだと思うね。

「あの屋敷はもう探しつくしたしなー。」

「かといって、私じゃ誰かに聞いて回るってこともできないしな。」

「実体あって人間ですが、右に同じー。最近じゃあ、監視まで付いてくるしなぁ。」

ここで、二つの溜め息が重なった。

こういうのってさ、普通、序盤は意外にすんなりいくもんじゃないのかね。

でもま、ルディが封印されていて、強力な力が手に入るかもしれないっていうのは地球に堕ちた魔族に知れ渡っているらしいし。
そんな状態で、本体が今の今まで封印されていたんだから、そう簡単にはいかないんだろうな。

そんな時だった。
部屋に控えめなノック音が響く。

「つき……。」

ルディは途端に警戒を顕にする。こいつは、この屋敷の人間全員を嫌悪しているからな。
だけど俺は、相手が誰か見当がついているから気にすることなくどうぞ、と答えた。

「失礼致します。樹様、あの、大丈夫ですか？」

部屋を訪れたのは、そっち系が見たら発狂するかもしれないリアルメイドさん。
良い感じに似合う短髪が、利発さを表し。普通に可愛いと思う（年上だから失礼かもしれないが）、住み込みメイドの美鈴さんという女性だった。

「美鈴さん、前も言ったけど、俺に構うと怒られるよ。」

彼女は、事ある毎に俺を気遣ってくれるめずらしい人間だ。
その手には、たくさんの湿布が用意されていた。

たぶん、どこかで俺がいやがらせを受けているのを見たのか知った

んだろう。

「大丈夫ですよ。私、自分で言ったらあれですけど、要領いいので。」

「それって暗に、俺が要領悪いって言ってる？」

いいえ、とクスクス笑いながら美鈴さんは首を振る。
そして、ベッドで身体を起こす俺の横に湿布の束を置いた。

もう何度も遭遇している光景だけど、ルディがすぐ近くにいるのに、彼女は気付く素振りも見せない。
それが、見える俺にとっちゃどこか落ち着かなく感じる。

「あと、これ。」

「だめ。それは受け取らない。」

「でも……。」

「そりゃ、本音を言えば助かるけど、これは俺のプライドが許せ無いから。気持ちだけ受け取っとくよ。」

こういうのを善意と取れるか、偽善と取るか。それは人によってまちまちだろう。
少なくともルディは、偽善と取ったようだった。

美鈴さんが渡そうとしてきたのは、樋口一葉さんだ。ポイントなのは、ここで福沢諭吉さんじゃないってところ。
福沢さんになった途端、胡散臭さは倍増するからな。

かくいう俺は、偽善だとも善意だとも思っちゃいない。寧ろ、関心する。

「樹様は、相変わらずですね。」

苦笑しつつ美鈴さんに言われた言葉を、心の中でだけそっくりそのまま返しておいた。
彼女は、俺が中野家に来てからずっとこうして構ってくるから、2年の付き合いになる。

「人は早々変われないよ。でさ、それを受け取らない代わりと言っちゃなんだけど、変なこと聞いてもいい？」

この時は、別に期待はしていなかった。ただ、彼女の気を逸らしたいと考えていただけだ。
はい、と頷いた美鈴さんは居住まいを正して俺と向き合う。
こういうとこは、あぁメイドさんだなーって思うんだよなぁ。洗練された仕草ってーの？

「どっか近辺でさ、何かが封印されてるーとかって言い伝えがある場所とかない？」

「封印、ですか？」

思惑通り、美鈴さんの気を逸らすことには成功したけど、当然訝しげな顔をされた。
仕方なく、歴史の授業でそういうのを調べるっていう課題が出たと誤魔化しておいた。

無理はあるけどまぁ、詮索はしてこないだろう。

「んー……、そうですねぇ。」

美鈴さんは、難しい顔をしながらも一生懸命記憶を探ってくれていた。

それは、心当たりか何かひっかかるものがあるからだろうか。

（もしかして、偶然が幸を相した…？）

彼女をじっと見つめる。それは、現在空気と化しているルディも一緒だ。

もしかして、いやまさかな。その2パターンの顔を繰り返して、じっと彼女を見つめている。

その様子が可笑しくて噴出しそうになったのは、さすがに慌てた。

「あっ！」

「心当たりがあるのか！？」

そして美鈴さんは、はっと声を上げた。

思わず心当たりあるのかと聞こうとしたら、俺より先にルディの方が声を上げて、俺は中途半端に口の形を変えて止まった。

聞こえないと分かっているのにどきっとしたのは、仕方ないと思って欲しい。

「この住宅街から一番近いスーパーの駐車場に、小さな祠があるんですけど。そこ、何度も壊そうとしたけど、その度に何かしらのアクシデントがあって壊せず仕舞いだっていうのを聞いた事がありま

すね。４～５年前なので、今もそうなのかは分かりませんが。」

（そこだ！）

その情報は、俺だけじゃなくルディにも絶対の確信を持たせた。何故なら、そのスーパーは幽霊屋敷からも近い。

さすがに、声を出して興奮することはなかったが、思わずルディと目を合わせて頷く。

その様子を、美鈴さんが首を傾げて見ていたけど、それは気にならなかった。

「？では、私はそろそろ失礼致しますね。」

「あ、うん。湿布ありがとう。帰り、気を付けてね。」

「勿論です。では、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

そうして美鈴さんは、部屋を出ていった。

貰った湿布は、シャワーを浴びたら有難く使わせてもらうことにする。

ワンルームより小さい部屋だけど、ユニットバスが付いてるから、そこだけが唯一便利だ。

「思わぬ収穫だったな。」

「あぁ、明日は土曜日だし、気持ち悪いぐらいタイミングが良いし

な。」

足音がしなくなり、俺達は頷く。
いてて、と呟きながら身体を起こしスウェットを取り出していれば、
バスタオルをルディが用意してくれた。
サンキュ、とそれを受け取ろうとするが、ルディはバスタオルを渡
そうとしてじっと俺を見上げていた。

何が言いたいのかなんて、愚問でしかない。
だけど、逆にルディの方が気を使ってか中々それを口にしようとし
なかった。

俺は、意地悪く笑った。

（まだまだ甘く見られてるってこったな。）

「あのメイド…、お前はどう思ってるんだ？」

そして、思わずその質問に噴出。やっぱりルディは、毎度毎度俺の
つぼを刺激する。

（悩んだ末に、そうきたか。）

クツクツとした笑いは、自分でも感じが悪いと思う。それでも、ま
がりなりにも魔王様がそんな聞き方をすることが可笑しくて仕方が
ない。

「……つき、お前はほんと腹が黒い。」

しかも、精一杯の反抗がそれだ。

結局、一頻り笑った後、俺は涙の滲んだ目と笑いすぎて若干酸欠になりかけている頭を掌で支えながらルディの目線に合わせてしゃがんだ。

そして、たっぷりと間を開けて口を開く。

「あのメイドさんはな、”叔母様”が寄こしている人だ。俺がここに来たその日に、な。」

だから、関心してたんだ。
2年間飽きずに俺をかどわかそうとし続けている、諦めないその根性と執念さに。

「気付いていたのか。なら、尚更意地が悪い。」

どこか腑に落ちないルディに、でこぴん。ついでに、言っておこう。
痛いと頭を押さえているルディにまた笑いながら、俺は最近ちゃんと伝えておきたいと思っていた事を今告げようと決めた。

「俺は、誰も信用しねーよ。」

当然お前も、そして、俺自身すら。
今の言葉には、そういった意味が篭っている。

自惚れでも、過度な期待でもない。少なくともルディは、そういったことをちゃんと汲み取れる人物だ。

「寂しいとは、思わない、のか？」

俺がそこまではっきりと、しかも自分すらその対象であるのは、長

い年月独りだったルディですら思えなかったのかもしれない。
若干唖然と、そして何故か悔しさを滲ませたような顔をしながら、さらに見当違いな質問を返された。
だから、俺はさらに言う。

「だって、心は見えねーじゃん。」

人の本質というものは、心にあると俺は考える。生物学的にいえばまた違ってくるが、人間と人の表現の違いはその本質の見解の違いから現れている気がする。
心は、学問に必要ない。だけど、感情は心に左右されるし、化学的に言えばホルモンや電気信号で説明されるが、だからといってその説明で納得するかと問われればまた別だ。

だから、俺は口調も性格すら変えてみせる。それでも、ルディはイレギュラーだけどな。
俺”自身”を笑わせてくれたのは、久しぶりだから。

それでも、信用できない俺を、お前はどう思っているんだろう。

記憶が無い俺を、心がどこにあるのか分からない俺を、人間だと思ってくれるんだろうか。

心を読みたいだとか、読めればいいなんて気が触れたとしても思わないが、少しばかり胸が軋んだ。
だからといって、特別だなんて感情は持ちたくも無かった。

3－2　後悔先に立たず、しかしだから後悔なのだ

「っだー！なんでこうも、お前の世界の女ってこえーんだよ！」

「知るか！私に聞くな！」

お前魔王様だろ、という言い合いをしつつ、俺達は大型スーパーのだだっ広い駐車場を走り回る。

左右前後から、変な黒い塊が飛んでくるという、オプション付きでだ。

「「私達姉妹の玩具にしてあげるわ！」」

おほほほほ、と高笑いするそいつらに、もう若干なってるよとは言えなかった。

その途端、相手が図に乗るのは目に見えている。

思わぬところから有力な情報をゲットした俺達は、次の日の午前中、サキュバスと対峙した時とは違いある程度の計画と準備、ハプニングが起った場合の対処を話し合った。

そして夜。屋敷の住人が寝静まった後。

ルディの胸には、簡単なペンダントに加工したあのサキュバスだった魔石がぶらさがっている。
そして俺は、綺麗な装飾がされている剣を念のために持つ。

それは、ルディが封印された時に所持していたものであり、その為に一緒に封印されていたもの。
初戦で見た黒い空間は、言わば四次元ポケットらしい。
これをルディが出した時に、なんであの時にくれなかったのかという抗議をしたのはお約束というものだろう。

「無駄に似合うのがむかちゅくな。」

「……つっこんで欲しいか？」

久しぶりに噛んだルディは、手で口を押さえてか細くいや、いいと言った。
それにしても、大分流暢に話すようになってるなと思っていたのは、ただ単に噛まないように努力していただけらしい。

子供って、大変だったんだな。

と、思いつつ、俺は姿見の前に立った。
無駄に綺麗な装飾がされた剣は、あの時の小型ナイフに似た豪華さだ。
ただ、あのナイフは黒いカサブランカのような花の紋章があったのに対し、この剣は黒い薔薇が鍔（ガード）というらしい部分に咲き、茨が柄（ヒルト）に巻き付いている。
そして、柄頭（ポメル）には澄んだ青の魔石。どうやらこれは、剣の軽量化と

頑丈さ、鋭利さを増す役割を果たしているそうだ。ということは、相当な力の魔石だと思われる。

「子供用ってとこが複雑だけど、むしろ丁度良いのか。」

目立たないようにする為に、黒い細身のパンツに黒に近いグレーのパーカーを着て、剣を左側に吊るしている姿はシュールではあるけど、ルディが言った通りに悪くはない。

しかしこれは子供用らしく、小柄な体型ではないけど周りより小さい自分が持って大体膝下ぐらいの長さまできているから、この剣が大人用だったらもしかしたら引きずることになったかもな。

だとしても、子供が持つにはでかすぎる気がして、若干首を捻った。

「言っとくが、それは物だから普通の人間にも見えるからな。」

「おう。ばれたら当然、銃刀法違反でおまわりさんと楽しい追いかけっこが始まるな。でも、もし魔族が現れたらって考えたら、常備している方が良いだろ。」

優先順位っていうのは、明確にしておくべきだと思っているからね。

ははははは、とわざとらしく言ってのけた俺に対して、ルディは私以上に気ままな奴は初めてだとか抜かしていたけど、それは褒め言葉だよな。

そうだと俺は思ってるよ。

「よーし、行くか！」

「……お前、キャラ変わってないか？」

どことなく上機嫌な俺に、今度はルディが首を捻りながら付いてき

た。

そして、俺達は目的のスーパーへと辿り着いた。
これまでの道のりで、人に遭遇しなかったのは奇跡だろう。
とはいっても、車とはすれ違った為にパーティー帰りっぽい高級車の運転手やタクシーのおっちゃん達には若干怪しまれた。
だが、それは初めから道の左側を歩く様にしていたので、只単に深夜徘徊する若者に眉を顰めるって程度で済んでるはずなので問題なしだ。

「にしても、空気わっるー。」

「……。」

駐車場への入り口にはられているロープを跨ぎつつ、どことなく嫌な感じに思わず言葉を零す。
しかし、ルディは既に警戒態勢に入っている為か、黙りこくって周囲に意識を向けていた。

（美鈴さんの話じゃ、確か駐車場の端って言ってたよな。たぶん、人目に付かない場所か。）

なので、警戒はルディに任せて、とりあえず俺は目標を見つけることにする。

大型スーパーなので、地上の駐車場だけでもかなり広さがある。おまけに、立体駐車場もあるから、一々歩いて地道に探すよりかはある程度憶測をつけるべきだろう。

そう判断し、俺は駐車場の敷地の中央当たりで止まった。

（立体はそもそも、造る時に壊そうとするから除外するとして…。）

その場から動かず、美鈴さんの言葉を元に前方は勿論のこと後方も見ながら思考を巡らす。

敷地沿いには草木が植えられていて、目の前に佇むスーパー本体の左側は立体と繋がっている為、正確に言えば左後ろと右前後。

（壊さずに建設し始めたにしろ、壊そうとして壊せなかったからある程度建設予定を変更したにしろ、利便さからして立体側は除外してもいいだろ。だとしたらやっぱ、奥のできるだけ目に付かない場所にある可能性が一番高いな。）

営業中でもない為、辺りはシンと静まりかえっていて明かりもほとんど無いに等しい。

なので、視界よりは思考のほうが頼りになる。

よし、と気合を入れて、俺は第一候補に行こうと足を一一。

「まて、何か来る。」

「封印が先に解ければそっちのほうが良いだろ。」

だそうとして、今の今まで黙っていたルディにより制止がかかった。

だけど、仮に魔族が迫っていても、封印が解ければこっちのもんだ

と考えた俺は、再び足をだそうとして一一。

「「クスクス。みーつっけたぁ。」」

（いやいや、まずは目的目的。）

出そうとして一一。

「お姉様、私（わたくし）は陛下よりも彼の方が欲しいですわ。」

「あら、それは丁度いいわね。喧嘩をせずに済みそうよ。」

結局、一歩も足を踏み出すことなく、ギリギリと振り返ることになった。

「ちっ。バンシーの姉妹か。」

視線の先には、ぼろぼろの布を一枚被ったような感じの服の、顔面蒼白、髪はボサボサ。だけど、それでも美人だと思える釣り目の女が2人、空中に浮きながら笑っていた。

「「こんばんわ、陛下。」」

「ルディ、お前はこのままでっけー建物の右奥に向かって走れ！んで、祠を探せ！」

そして俺は、すぐさまルディに指示をした。顎で使うとも言うけど。

「「あら、なかなか肝の据わった子のようね、陛下の奴隷は。」」

ルディは小さな舌打ちで文句を済ませ、小さい足を全力で動かして俺の言った事を遂行しに行った。
その後を追わせまいと俺は、バンシーと呼んでいた謎の姉妹（本当に姉妹なのかは謎だ）に向き直り立つ。
にしても、この姉妹、息ぴったりすぎじゃね？

「奴隷じゃねーよ。ただのお手伝いさんだ。」

ただし、ご主人様の秘密を知りたがったり、殺人現場に遭遇するわけではないがな。

「「ふふ、たかが人間が、私達バンシー姉妹に勝てるのかしらね？」」

2人同時に小首を傾げ、馬鹿にしたように笑う。
勿論、俺はただの人間だし？武術を嗜んでるわけでもないし？逆にもやしっ子だから、勝てるって自慢気に自信満々に言うことはできない。
だけど、少なくともサキュバスの時とは違い焦っていないし、寧ろこっちは準備万端で事に望んでいる。
予備知識もばっちりだ！

「はっ！偉そうなこと言っても、所詮自分の世界を捨てるしかなかった奴だろ。」

「「威勢も良いみたいね？」」

しかし、どうやらサキュバスのように短絡的ではないみたい、寧ろ

健全な少年を相手に遊ぶタイプのお姉様方だった様で。
結局俺は、全力で頭を回転させて策を練らなくてはいけなくなったようだ。

それはまあ、別に良いとして。とりあえずそのフィーリングの良すぎる同時会話は止めて欲しい。
頭にエコーがかかってるようで、痛くなる。

「つーきー！あったぞ！祠だ！しかもビンゴだ！」

「お　ま　え　は！一国を担う王、しかも恐怖に慄かせる魔王じゃなかったのかよ、このど阿呆！」

「「大丈夫。２人とも私達がたーんと可愛がってあげるから。」」

おまけに、ルディは喜びのあまりバンシー（敵）がいるのを忘れたのか小躍りして戻ってくる。
しかも、わざわざ情報まで与えてしまう始末。

（泣きたい。激しく泣きたい。）

思わず地面で四つん這いになってがっくり項垂れた。追い討ちをかける様に、あらあらとまったくもって余裕そうに敵に慰められる俺。

「あ…、すまん。思わず忘れてた。いや、あれだ。大分政から離れていたから、な。ほら、その……。」

「いや、もういい。過ぎた事は仕方ない。しゃーねー、先にこいつら倒すぞ！」

別の意味でさらに頭が痛くなりこめかみを押さえながら、とにかく気を持ち直して立ち上がる。

「ぴっ！いた、いたたた！痛いぞつき！」

ルディへは、とりあえずのお仕置きで、頭をぎりぎりと掴んでやった。

「「じゃあ、準備運動もかねて鬼ごっこをしましょうか？」」

とりあえず、どう切り抜けていこうか。

頭をフル回転させようとしたところで、至極楽しそうに真っ赤な目を細めてまた笑ったバンシーは、余裕綽々、そうのたまった。

それが、冒頭へと繋がるのだった。

3－3　女の涙は恐怖で卑怯だ

自慢じゃないが、俺は怠け癖が強く、動くことも嫌いだ。
だからといって運動自体は苦手ではないが、そんな奴が運動を好むかどうかはまた別の話。

たとえ元々の体力が平均よりあったとしても、それは気力と一緒にエネルギーとなるから、結果的に宝の持ち腐れとなり強いけど弱いになる。

何が言いたいかというと、体育の授業なんてサボる以上に価値がないと思っていて、普段からだらだらと歩く以外に身体を動かすことなんてない俺が全力疾走をそう長期間続けられる程の持久力なんて無く、さらに、前回のサキュバスは鬼の形相で追って来ていて命の危険しかなかった状態だったから、あれは火事場の馬鹿力というイレギュラーなものだった。

性質の悪い事に、バンシーの姉妹は、俺達をおちょくって遊んでいるだけで本気ではなく、殺そうともしていない。

つまり。

「ば、ばてたっ！」

「ばっ?!まだ5分も経ってないぞ、このもやしが!」

「うっせ!何で一々、こんなお遊びに付き合わなきゃいけねーんだよ!」

もう一歩も動けない、とへばる俺を、ルディは引っ張って動かそうとする。

その間にも黒い塊が飛んでくる”気配”がして、首を左右に振ったり足を上げたり。

隣からは、せっつくルディの文句。

途端に、何やってんだ俺と、やる気のない心の声がする。

(なーんか、考えるのもめんどうになってきたなぁ。)

「つき、つき!いいから動け!」

(ていうかこいつ、なんで祠を見つけてしかもビンゴだったのに、封印解かずに戻ってきてるんだ?)

「あら、もう諦めちゃったの?」

「なーんだ、期待はずれだったのかしら。私、ひ弱なのは好みじゃないわ。」

整わない息を吐きながら、現実を見たくなくて目を瞑り静止する。

それに対し、バンシーは一旦お遊びをやめたようだ。

外野の騒がしさを無視して、俺は一旦全部をリセットした。

向こうが遊んでいるんだったら、言葉の駆け引きも何もかもが無駄だ。
無駄なことはしない。かといって逆手に取るのも面倒だから、代わりにシンプルに。

（黒い塊がどんだけ威力あるのかは知らんが、避ける。外れた塊は地面を砕くけど、そんなに抉れてないから、サキュバスの鞭よっか弱いだろうしたぶん剣で弾ける。なんでかしらんが、どっから飛んでくるかも気配で分かるし、暗いのは問題ない。バンシーがどこに居るかも分かる。）

必要そうな情報を浮かべて、一緒に沸いてくる疑問には首を振って、ふ～っと大きく息を吐いた。

「ルディ、時間をくれ。相手を引き付けろ。」

「……分かった。」

片膝を付いてルディの背に合わせるようにしゃがみ、目は閉じたままで、バンシーがまた動き出しても何を一番にすべきか定まっていないままでは後手に回ってしまうと判断し、そう指示を出す。
もやしっ子なめんな。もう一回さっきのをしたら吐く自信があるぞ、こんにゃろう。

ルディがもちょい魔王様らしく頭使って顎で俺を使ってくれれば楽なんだけどな。
そしたら相手の表情を窺うだけだし、隙も見つけやすい。
でも、素直に俺の指示にしたがっちゃう奴が相方な時点で、夢のまた夢だなそんな状況。
どっちかっていったらは囮とかスパイタイプで、こういった参謀的

なのは向かないのに。主に、面倒なところが。

ていうことはすごくね、俺。魔王様囮にしてる時点で最強じゃね？

（なーんて。そんなこと考える余裕があれば楽なんだけどねぇ。）

ルディは、今のところ唯一役に立つスキル、弱くても俺様魔王様を全開に発動して、バンシーに遊ばれていた。

でもそのお陰で、頭の中をすっきり簡潔に整理できたから、後で慰めもかねて何か我侭をひとつだけ聞いてあげよう。

中身は、あまりにルディが魔王だということを忘れさせてしまいそうだから、あいつの名誉のためにも黙っておくことにする。

いや、聞かなかったことにしてやる。

そして、もう一度ふ～っと息を吐いた俺は、ゆっくりと目を開けてその可哀相なルディの方へとゆっくり足を動かした。

さっきの追いかけっこで疲れてめっちゃガクガクしてるけど、なんとか頑張れ俺の足！

「「あら、回復したの？」」

「つき、策はできたのか。あいつらを全力で後悔させるような、素晴らしいものが！」

「疲れはこの通り、健気に俺に寄り添ってるよ。……取りあえず、2体同時に相手するのは面倒だ。先に片方を片付けるぞ。」

敵に労われつつ、ルディの頭にぽんと手を置いて、耳元でこいつにだけ聞こえるように囁く。

目の前でゆらゆらと浮いている姉妹は、相変わらず余裕を持ちまくりで笑っていた。
正直、赤い目が不気味で直視したくない。

「しかし、それができたとしても、そうなれば残りが逆上しないか？」

「だったら、何か良い案があんのかよ？」

そう言えば、ぐっと口を噤む。ったく、口しか取り柄がないのかよこいつ。

「「ふふ、さっきと違ってかなり冷静になったみたいね。それとも何かしら、まさか勝てると思っているの？」」

「……あぁ。」

良い加減、そのエコーがかってるみたいで頭に響く声を聞きたくないし、とこれは自分にだけしか聞こえないぐらいに小さく呟き、俺は不気味な赤い目2組と向き合った。
そして、そろそろ邪魔くさくて仕方がない髪をかき上げ笑う。

「俺ってばさー、普段超めんどくさがりで怠け者なんだよね。」

「つき？何を？」

俺の雰囲気が変わったのを感じたルディが、上目遣いでそろっと表情を窺ってくる。
それでも視線は、不気味なバンシーに向けたままだ。

「「だから？」」

小首を傾げるタイミングもぴったり、もうずっと2人で仲良くやってろやとなんか苛つく。

それを落ち着けるため、はっと鼻で笑って、俺はルディの頭に置いていた右手を敵にも本人にも気付かれないように襟足に自然を装ってずらした。

そして、言う。

「そろそろ、本気でいこーや。化け物共。」

「「威勢だけは、……え？！」」

「なっ？！」

それを合図に、構える暇を与えず動く。

俺の動きに合わせ、計3つの驚愕の声が夜の大型スーパーの駐車場に響いた。

「おらよ、いっけー！名付けて、魔王ミサイル！」

「な〝ぁぁぁぁぁ！？」

俺は、ルディの襟足近くの服を遠慮無しにぐわしと掴み、一度後ろにひっぱって反動を付けてから、そのまま上へと持っていき、綺麗な弧を描くようにバンシーめがけてぶん投げた。

このバンシー姉妹、見た目も声もそっくりな上にほとんど同時に喋ってるからどっちが姉でどっちが妹なのか見分けがつかない。

なので、取りあえずより命中しそうな、ぼさぼさの髪に落ち葉が絡

まってる方、区別をつける為にバンシー1号としよう。それに向けてルディを説明も無しに投げた為、投げられたルディは悲鳴とも驚愕ともとれない雄たけびを上げる。
相手も、俺の奇行に唖然として固まっていた。

にしてもあいつ、めっちゃ軽いな。以前、なんでか知らないが床で寝ていて、仕方無しにベッドまで移動させてやったことがあるんだが、その時に異様に軽いのは知っていたけど、それでもここまで楽にぶん投げられるとは思っていなかった。

（と、関心してる場合じゃねーな。）

俺は、魔王様をぶん投げて後を追うように駆け出し、腰に下げてあった剣をすっと抜いた。
闇に浮かぶ銀の光沢と魔石の蒼い輝きは、より一層剣の美しさを引き立たせる。

本来、こういった剣は両手で使うものなんだろうけど、これはたぶん魔石のお陰で、片手で振るったとしても大した負担にならない程軽い。
なので、右手のみで持って切っ先を下に向け、ルディの影に隠れるように俺も1号へと迫る。

距離としては、そんなに遠くで対峙したわけじゃないから、魔王ミサイルはもう少しで1号にぶつかるってところまできていた。
そこまでくれば、相手もハッと我に返ってくるだろう。
案の定1号は、慌てて両手を前に突き出し黒い塊を形成し始める。
それに合わせて、2号もルディに向けて同じような動きを見せる。

そして、囮のミサイルは未だにあたふた。

その様子に、はぁと諦めにも呆れにも取れる溜め息を一つ零した俺は、大きく息を吸って吐き出した。

「魔石を全力解放!!」

「っ!リヴァイ・オーヴァ!」

その指示に、ルディは弾かれたように耳慣れないフレーズを叫んだ。

瞬間、サキュバスを殺した時に手に入れた魔石は、敵味方関係無しに飲み込むように眩い光を放つ。

といっても、それは一瞬。あの魔石は、そう希少価値が高いわけではないらしいので、出来て目くらまし程度だろう、上手く調節して使ったとしても3回が限度だろうと聞いていた。

でも、それで十分だ。

「つき!お前後で覚えていろよ!魔王を囮にするのは大目に見たとしても、ぶん投げるとはどういうことだっ!」

次には、ルディの怒声が周囲に響く。魔石を使えと叫んだ時に、それがどんな力を持ったものなのか知っている俺達は、光りに備えて固く目を閉じたので無事。

そして、ルディに叫ぶ余裕があるから、バンシーのあいつへの攻撃は外したか放てなかったかだ。

ということは、目くらましが成功したという結果に繋がる。

しかも、それはわざわざ考えなくても効いたと分かる状況だ。

何故なら、今、俺の足の下にはバンシー1号がいる。

「油断大敵。ご愁傷様だ。」

「っ…、何?!なんで重いの?!目、目が開けれない。くそっ！」

目は光にやられ、痛みからか瞳を押さえてはいるが俺の全体重を乗っけてる為動きも封じられ。
焦りながらお姉様と呟こうとした口は、最後まで言うことが叶わなかった。

「こっふ…！あ、あ－－－」

「あ、こっちが妹だったのか。わり、ややっこしくなりそうだし、今更だわ。」

俺は、1号を押さえつけながら剣を眉間の上へと掲げ、そしてすっと落とした。
体の構造が違うのか、それとも剣が不思議なのか。それは阻まれることなくサクッと眉間を貫き、コンクリへと達する。

何度か小さな痙攣を繰り返した1号は、言葉にならない声を最後に動かなくなった。
そして、さらさらと砂に変化していく。

足からだったので、頭が砂になる前に剣を引き抜いて1号の上から地面に戻ると、剣は更に輝きを増したと思える程に光沢を魅せている。
俺は、バンシーには血が流れていないのか、何も付着していない剣を気分でピッと一度払った。

「ルディ、気合い入れろよ。こっからが本番だ。」

そんな俺に、文句の一つでもかまそうかと憤慨しながらやってきたルディに、2号へと視線を向けながら警戒を促す。

2号は無言で、赤い目を限界まで見開いて、俺の後ろの1号が砂になる様子を凝視していた。
時たま口が何かを発しようとして開き、それが叶わず閉じる。
俺はその様子を、じっと観察した。

なんだろう、この気分は。
高揚するような、内からしみ出てくる不思議な感じがする。

今までにないぐらい神経は研ぎ澄まされ、精神も集中していた。
それはもう、今まさに魔族を一体葬り去ったとは思えない程。

これまでの人生、動物にしろ何にしろ、明確に命を奪ったという自覚を抱ける状況に直面してきていない人間が、こんなにも冷静にそして冷酷に動けるものだろうか。

こういうことに関しては、例え無気力無関心、適応能力に優れている俺でさえ、初めての次にはもう慣れることが出来るとは思えない。
なのに、だ。

（殺気が分かる。剣の握り方が分かる。――戦いの心得が、分かる。）

恐怖心は勿論あるし、自分が弱いという自覚もある。それでも自然と、口角が上がっていく。
俺の視界には、悲しみを抱き憎しみに染まるバンシー2号しか映っていなかった。

「どうした、つき?」

「っ、来る!」

丁度、1号の身体全てが砂へ変わった時、2号は心に溜まったモノを爆発させた。

「ーーーーー!!」

滝のような涙を流して目をカッと見開き、こちらを凝視しながら開いた口から、この世のありとあらゆる叫び声を合わせたような凄まじい泣き声が俺達を襲う。

それが、地球では死を予告する妖精と伝えられている魔族の、全力で本気の攻撃だった。

3－4　それが現実

「ぐっ……！」

「耳が、壊れ、るっ！」

動くこともままならない、そんな音を聞いたことがある奴はどれだけいるんだろうか。

バンシー2号の泣き声に、俺達は耳を押さえて呻くことしか出来なかった。

耳は勿論、頭も割れそうなほどの痛みに襲われ、自分が今立っているのかどうかも分からなくなる。

そんな俺達に、尚も容赦なく降り注ぐ叫び。

『許さない、許さない、許さない！』

声自体は、言葉でも何でもない。でも、その奥から襲いかかる2号の気持ちが俺達をぎりぎりと締め上げていく。

といっても、罪悪感に苛まれるわけではなく、向こうの憎しみに引きずりこまれそうになっていくといったら伝わるだろうか。

『なんであの子が。なんであの子を！好きで堕ちたわけじゃないのに！見返したかっただけなのに！こんな魔王がいるから、あんな世界があるから、全部全部全部、消えればいいって思っただけよ！』

だけど、響いてこればくる程、どんどん俺は憎しみとは違う苛立ちを覚えた。
だって、なんだその理由は。なんだその、自分勝手な解釈は。

「ふっ、ざけんじゃ、ねーぞ…！」

上から圧迫されるような音の攻撃で地面に付いていた膝を叱責し、俺は立ち上がりながら思わず閉じていた目を開ける。

『うるさい、うるさい、うるさい！』

2号は、瞬きもせずに涙を流し続けていた。
罪悪感？恐怖？

（はっ、くだらねぇ。）

いくらこの平和な日本にいたってな、戦いというものを知らなくたって、分かることはあるんだよ。

「てめぇ、は、ルディの力を、奪おうとしてたじゃねーか。んの、くせ、自分が奪われたら、理不尽だ、と？」

けったいなご身分だなぁ、と笑えば叫び声はさらに強くなる。
でも、冗談じゃない。

「馬鹿、か、てめぇ。この世は、なぁ、理不尽しか、ねーんだ、よ！」

ぎりっと、この状況でも手放さなかった剣を強く握り締める。

もう片方は、あまり意味を為さないが耳を押さえ、俺は少しずつ2号との距離を詰めようとした。
そうすれば、尚更音が俺を襲う。

それでも、この音以上の脅威的な攻撃をバンシーは持っていない気がした。
この攻撃も、物理的というよりは精神的なもののほうが大きい。他にあれば、俺達はとっくにその餌食になっているはずだ。

「まさか、自分が、特別だとか、思ってる訳じゃねぇよな。さすがに、堕ちた奴が、そこまで図太いとは、思わねぇ、し？だけど、それで、も、馬鹿みてーに、頭ん中だけででも、まさか、世界は平等だ、とか、思ってんのか？自分の、都合よくにしか、解釈してねーん、だろ。」

『黙れ、うるさい、黙れ小僧！』

この音の中でも、俺の声は届いているようだった。
その言葉に、2号は激しく首を振る。

ほんと、嫌になる。当たり前にルディの力は奪っていいと思っていたり、自分達の予想外な事に発展していけば、あんな理由を並べて現実を見ない。
あまつさえ、まるで自分達は悪くないと言うようなあの言葉。

しかも、それを否定されたら受け付けないときた。

「あれは、ルディの力、だ！それが、分かってて、手出すんなら、逆に奪われる、覚悟くらい、してこいっつーんだよ、雑魚が！」

「つき！」

よく考えずに、しかも叫えるように言葉を発する。
その時、すっかり俺等から存在を忘れられていたルディが、タックルする勢いで俺に抱き付いてきた。

「リヴァイ。」

そして、サキュバスの魔石でも言っていた言葉を、さっきより短くして呟いた。
瞬間、2号の声が止む。
むしろ、全ての音が消えた。

「ーーー」

目の前のルディが何かを言う。それすら聞こえず、俺は首を傾げる。
それでもさらにもう一度、ルディの口が動く。
やっぱり聞こえなかったけど、今度は意味を汲み取れて俺は頷いた。

（さっきの1号から生まれた魔石の力だろうな。）

片耳を塞いでいた左手を外し手をルディに差し出せば、案の定そこにくすんだ青にも緑にも思える色の魔石が落とされる。
どうやらこれは、音を消す防音の役割を果たしてくれるようだ。しかも、魔石を持っている者に触れている者にまで効果が及ぶらしく、ルディも落ち着いた表情を見せた。

「さんきゅ、あと少しだけ辛抱してくれな。」

血の上っていた頭を冷静にさせてくれたことと、俺の代わりにこの

音の対処を見つけてくれていたこと。その2つに短く礼を言い、貰った魔石を握りしめて剣を構える。

今はまだ、ルディが俺のズボンを握っているから魔石の力でその言葉は聞こえなかっただろうが、分かってくれたのか深く頷いて2号を睨み付けていた。
俺も、視線を2号に戻す。

サキュバスの瞳は、深紅だった。それに比べ、バンシーの色はくすんだ赤。
それが生気を感じさせず、だから気持ちが悪かった。
見た目も、幽霊みたいで不気味だから、どことなく殺すというよりも成仏させるって感じがした。

だけど、剣を突き立てた時には、確かにサキュバスと同じように命を奪う感触がして。
こいつ等が欲を出してルディの力を手に入れようなんて思わなければ、俺はそんな感触味合わなくて済んだだろう。

そう思わなかったといえば嘘になる。

けど、だからといって、それを奪った相手に、奪おうとする相手に理不尽だと文句を言う奴がいるだろうか。
いや、いるかもしれない。それだけ世界は広くて、心を持った命も多いから。

それでも、それは自分勝手な我侭でしかない。

そもそも、だ。俺は思うんだ。
理不尽だとか、不平等だとか、特にこういった命のやり取りをする

場面でそうのたまうのはただの馬鹿だと。

平等を求めるのは、無駄だと。

「おい、雑魚野郎。俺がちーっとばっかし、情けかけて教えてやるよ。」

突然の無音な世界を味わいながら、俺は冷静になった頭をひっさげてゆっくりと歩を進めた。その途中で、右手の剣を止めを刺す為に左の腰側に持っていく。手首を丁度腰のくびれに添え、切っ先は下に。

自然とそんな構えをとっていた。

『お願い、見逃して。』

それを受けて、2号の口がそう言った。

合っているかどうかは分からないけど、動きからしてだいたいそんな感じのものだろう。

諦めたのか、他に理由があるのか、逃げる素振りも見せずに固まって動かない相手に俺は首を振る。

『ねぇ、お願いだから。もう邪魔しないから。』

もう一度首を振る。2号の涙は、1号へのものから自分のものへと変わっていた。

「そうだ、これこそ理不尽だ。でも、喧嘩売ってきた時点でそんなもん何の意味も為さないんだよ。」

距離はどんどん縮まっており、あと5歩程歩けば2号に触れられる

ぐらいに近づいている。
俺はより一層、睨みを強めて笑った。

「戦いに、其々の理由なんて関係ない。勝った方が正義、そうじゃねーの？だから俺は、最後に勝てるなら何度試合に負けたって良いと思ってる。いくら殴られて痣作ろうが、罵倒されようが、な。」

その笑いは、後ろで一生懸命声に耐えているルディに対してだけど。
突然振り向かれたルディは、流石に声は聞こえなかったのか、俺が笑った理由が分からず一瞬きょとんとする。その間に、視線を2号に戻した。

「あー、忘れてた。んで、さっき言った教えてやるっつった内容だけど。」

だいたい3歩ぐらい手前の目的の距離まで詰めた俺は、最後の〆に取りかかる。
まず、ルディやバンシーの真似をして小首を傾げ、左手の人差し指を立てて自分の口に当てた。
これ持論なんだけど、人に言うと人格疑われるから内緒な、と今から殺す相手に最低な言葉で前置きしながら。

「人生も世界も、何もかも。俺達に起こる事も得るものも、平等に不平等じゃね？たぶん不平等こそが、平等って意味を持つ気がすんだよな。」

目を細め、俺的に最高の笑みを2号に贈り、そして一閃。
ずっと構えっぱなしだった剣で、バンシーを左下から右上に切りつける。

『お前は、何？』

まるでこの世で一番恐ろしいものを見たというような恐怖に染めた顔をしながら、バンシーはその言葉を最後に1号より早いスピードで砂へと変化した。

「俺も、知らねーんだよな、残念ながら。」

たぶん人間だと思うんだけどねぇ、その言葉はきっと、耳に届く前に終わってしまっただろう。そもそも、今の会話が成立してたとも思えない。

キンっと剣を納めて、苦笑する。

「つき。」

「お、いつの間に。無事、殲滅完了だぞ、魔王様。」

内に篭りかけた俺を引き戻したのは、気付かない間にまたズボンを掴んで魔石の力を止めた小さな魔王様。
そのルディは、どこか不安そうに瞳を揺らしてこっちを見ていた。

「らしくない冗談はよせ。つきには、魔王と呼ばれたくない。それよりだ、怪我は無いか？大丈夫か？」

（らしくない、か。）

何を分かってるんだかと思いつつ、その小さな背に合わせてしゃがみぽんぽんと頭を軽く叩いて小さく笑った。

（そっちこそ、心配するなんてめずらしい。それとも、心配させる程俺がおかしかったのかねぇ。）

ぴんぴんしてるぞと答えながら、俺は目の前のチビと出会ってから感じるようになった自分への違和感に少しだけ、ほんの少しだけ不安と恐怖を覚えた。

まるでそれは、今まで頑なに閉ざしていた扉が開いてくるような感じ。

鍵が開くとかじゃない、扉が開かないように繋いでいた何本もの鎖が一本一本、徐々に朽ちていくような。そんな、気配。

「で、だ。お前は何で、見つけたのに封印を解かずに俺のとこに戻って来たんだ？自分で解けるとか言ってなかったか？え？」

「いた、いたたた！ま、まて、説明を、ちゃんと説明するから。その頭ぎりぎりは止めてくれ！」

だから、俺自身を誤魔化すようにルディの頭を締め上げて、気付かない振りをした。

そんな俺の事を、ルディが予想以上に見て、考えていたなんて。

封印が全て解けた時、色々な謎が解決すると思った。

でも、たとえそうだとしても、その時その場に俺はいない。

それだけが、今の所確実に分かっていることだ。

3―5　The　first　seal

美鈴さんの言っていた祠は、ほんと小さくてボロクて、朽ち果てる寸前の寂しい姿をしていた。

「祠に何か術がかけられていて、触れなかったんだ。」

ルディは今、どんな気持ちでそれを見ているんだろうか。
俺にはただの祠にしか見えなくて、何が駄目なのか見当もつかない。
ルディがほらっと小さな手を伸ばして触れようとした。

「うお！」

「っ……。」

すると、祠に触れた瞬間、ばちっと大きな音がして電撃のようなものが光り、ルディが瞬時に小さな手をひっこめて痛そうに摩る。

（んー、結界、みたいなもんか？）

その様子に、いくつか思考を巡らせた。

この結界のようなものが、ルディのみに反応するのかそれとも魔族に反応するのかとか。５つ全てにこういったものがあるのかとか。

まぁ、いくら考えても、予想の範囲を出ないので、取りあえずは俺

が触れるかどうかを試す必要がありそうだ。

「封印って、そういやどうやって解くんだ？」

「恐らく、何か器のようなものを媒体にされているはずだから、それに私が触れればいい。」

その答えに、ふーんと納得。ただ、ここまでファンタジーに接してきた為、こう格好良く呪文とか唱えるんじゃないのかと、意外には思った。ほら、中二病的なさ。

「んじゃ、祠は壊れてもいいって感じか。」

「まぁ、影響はないだろうが、しかし。」

「そいっ。」

「んなっ？！」

考えても仕方がない、という考えに至った俺は、触れるという選択をせず、戸惑いも躊躇も一切無しに、膝上ぐらいのそれを蹴り倒した。

蹴るというより踏む、と言った方が正しいかもしれない。

それだけで、祠はバランスを失い傾き後ろに倒れる。

「罰当たりだろ！」

「いや、祀られてるのってお前の力じゃん。ご利益も罰もあったも

んじゃねぇだろ。」

俺の行動は、つくづくルディの予想の範疇の斜め上をいくらしい。
それはそうだが！と息巻くルディを放置しつつ、祠の残骸を漁る。

いやぁ、崩れた柱とか触る限り、さっきのみたいにばちっと来ないから良かった良かった。

「あいたっ！」

横では、諦めずに自分もと祠の残骸に触り拒否されて、たぶん痛み以外の理由でも涙ぐんでいる子がいるが。
そうしてしばらく、短い悲鳴と自棄になって見えない何かに立ち向かう鬱陶しい息遣いをＢＧＭに、俺は目当ての物を探した。

といっても、どれがそうかなんて分からないから、それっぽいものを見つけては、どっか別のところに集中してるルディ目掛けてぽいっと投げつけているだけだ。だから、たまーにそのせいで悲鳴をあげてる。

ただ、あまりにもそれに気付かないから、後半は明らかに違うだろってものまで投げて、普段の憂さ晴らしをしていた。

「つき！お前か！」

「あ、ばれた。」

そして、とうとうばれる。まぁ、そうだわな。何も触って無いのに痛みが来たら、流石に気付く。

「さっきから、頭や背中が痛いと思ったら！何を遊んでるんだ！」

「いやぁ、ルディだって遊んでたし？」

「私は戦ってたんだ！戦って、たんだ！」

（何故2回言ったし。）

憤慨して詰め寄ってくるルディ。
手は拳を作り喚くのでまぁまぁと宥めつつ、何かの装飾だったのかもしれない小さなガラス玉のようなものを右手に握って止めの一発に投げてやろう考えた。

しかし、絶対当たるという確信が出来るぐらいに警戒心が薄くて、投げる前から笑いが俺を襲う。

「何を笑うんだ！」

「いや、くっ、なんでも、ぷっ。」

「なーぜーわーらーうー！」

憤慨を通り越して憤怒になりかけてるルディに、そろそろやばいとは思うんだけど、ちょっと喋るのも難しいぐらい本格的にツボにはまってきた。
ちょっとタンマという気持ちを左手を前に翳す事で表現し、右手を口元へ。

つまり。

「もう我慢ならん！つきにはしっかりと、主に仕える従者の心得たるものをその身に叩き込んでやるっ。」

（どうみても、今のは馬鹿にしてる仕草ですよね、はい。）

小さな体で全力で、俺に向かって来ました。

馬鹿にすることなかれ。あの突進は、かなりの攻撃力を持っております。

なので、さっきからまだかまだかと期待を大きくしている右手の物を今こそ使う。

「これ程従順な下僕はいないと自負しているので、結構でありますご主人様！」

「うわたっ！」

見事なフォームで繰り出されたガラス玉は、見事にルディの眉間に命中。

だけど、そこで予想外な事が起こった。

勿論それは、俺等が当初の目的を忘れていた為に予想外だった、ということだ。

「お、ビンゴだったか。さすが俺！」

「な、な？！」

ただ、俺は直ぐにその様子から思い出して冷静だ。でも、おこちゃまなルディは本気で驚いていた。

俺が投げたガラス玉こそが、ルディの力を封じていた器で、そして持ち主に触れたことにより力は目覚める。

「心の準備くらい、させろうおおおお！」

例え、持ち主を置き去りにしたとしても。

そうやって、俺達の最初の封印は解かれた。
眩い光と、黒い影を生みながら。

光と影。
それは、相対しながらも、決して切れない絆のように離れないもの。
例えば、ルディと俺のように。

ただ、俺達の場合はどちらがどちらという訳ではなく。
お互いがどちらでもあるという、矛盾した繋がり。

弾ける光の中で、俺は影を見ていた。

4－1　枕は吸収してくれる、色々と。

ルディと出会ったのが、春と夏の境目ぐらいだった。
あれから季節は過ぎ、今はもう真夏。

入学式から約3ヶ月が経ち、新入生という雰囲気は無くなり教室内でのグループも確立され、そして目前に迫った長期休暇に心躍らせて騒めく。そんな時期にいつの間にかなっていた。

さて、話は飛ぶが、この年代の悩みって、さすがにこの学校の人間は一般の生徒っていえる環境な奴等ではないから、少し特殊ではあるかもしれないけど、まぁ精々親の仕事の手伝いが大変だとか、許婚の相手が気に入らないだとかぐらいで、後は普通の若者の悩みと同じだろう。

そんな中で、敢えて俺の悩みをカミングアウトさせてくれ。

ずばり、人外からの襲撃が鬱陶しくてこの上ない、です。

どう考えても、なんだその悩みは、だ。色々可笑しいだろと自分でも思うし、誰かに相談しようものなら、頭大丈夫と心配されるか引かれるかのどっちかだ。

それは分かっているけど、只でさえ気温が上がり、何かしなくても汗が流れるっていうのに、最近の俺は毎日毎日冷や汗をかかざるを得なくてもう爆発しそうだ。

それもこれも全ては、ルディの最初の封印を解いたことに起因する。
あの、お遊びのような緊張感の無い状態での封印の解放は、大きな分岐点だった。それはもう、色々な意味で。

ルディにとっては自分の力の一端を取り戻せたことで、出来る事が大幅に増えた。たった一つ、されど一つ。しかも、元々の力が膨大であれば、例え分割された内の1であっても大きいものだ。

それで、何故人外の存在から襲撃されるようになったかだが、それはあの時の眩い光こそが封じられていた力だったからだ。
あの後、目を開けていられない程の眩い光は徐々にルディの中へと吸い込まれて収まっていった。
そして、全てが収まった途端、ただの人間であるはずの俺でさえ、空気が震えたのが分かった。

まるで、怯えるような、そんな不気味さに支配された。
と同時に、俺は一人理解もした。

これは、躍起になって欲しがるはずだと。
特に、劣等感に苛まれていればいる程に涎が出るぐらい魅力的だと。

また話がずれてしまったが、つまり、視覚で力を捉えられたということは、感じるのはもっと容易いということだ。
そして、サキュバスは偶然、バンシーも偶然封印された力を発見してあそこに居たとしても、じゃあこれからもそうなるってことは無くなった。

それは、ルディ本人が警告も兼ねて俺に言っていたから確実だろう

し、俺もそう思う。

「今ので、私が復活したことがこの世界の魔に属する連中には知れ渡るだろう。」

だって、俺だって感じたんだから魔力を持っている奴は気付いて当然だし、ネットワークがあるかどうかは定かではないが、噂だって広がっていくだろう。

案の定、それから数日後、ルディが復活したと知った奴は、これ以上力を取り戻させてたまるかと、ルディを探し出して襲ってき始めた。

元々、本体の封印場所を探していた奴がほとんどだ。

なら、尚更そうなって当然なんだけど、唯一封印が解けたことで迷惑を被っている俺としては、毎日毎日ストレスが溜まっていく。

「もうヤダっ、ううっ……。」

「何を泣く！情報も集まってきていて一石二鳥ではないか！」

そして今。誰にでもなく長々と語ってしまう程にやつれている俺は、体育座りで丸まった背中にそんな慰めもへったくれもない言葉と共に重みを感じていた。

「しかも、私が主戦力になれるようになった今、つきの無駄に姑息な智が真価を発揮できるんだぞ。」

（どのくちがそれをいうか！）

恨みがましく振り返れば、無駄にキラキラした顔がそこにはある。
毟り取ってしまいたいぐらいサラサラした髪は襟足まであり、尚且つ漆黒に艶をプラスして輝き、愛らしさから利発に印象を変えた顔。
膝上ぐらいの背は腰より上までに伸びただろう。

そう、力を僅かながらも取り戻したルディは、幼児から小学校高学年程度の児童に成長を遂げた。

中身は差して変わっていないが。もう、俺の名前はつきで定着してしまっているが！

「だ～か～ら～、早く次をさくっと取り戻しに行こう！場所は既に判明してるんだ。」

むしろ、我侭さが出来る事が増えたことによりレベルアップした気がする。
人の背中でなーなーと喚きつつ揺さぶりながら、ルディは催促をした。

「夏休みにはいらねぇと、俺は動けないって言ってるだろうが。」

これから、休み前のテスト地獄が控えてるんだ。
お飾りでも中野家の人間が、それこそ最下位なんて取った日には地獄が見える。２回しか会ったことはないが、あの爺はまじで鬼だからな。

思わず身震いしながら、無意識に手が動く。
今や魔石は、俺のお守りになっていた。
以前のルディの様に簡単なネックレスにした、バンシー姉妹だったそれを手の中で転がしながら、はぁと溜め息。

進化したルディにとってはもう、今までのサキュバスやバンシークラスは片手で捻れるぐらいで敵にはならない。
1つでこれだから恐ろしいんだか、それ以上に怖いのがその慢心だろう。

かといって、諭そうとしたところで聞く耳を持たないのが現状であり、それがさらに俺のストレスを助長させる。

正直に言えば、もう勝手にやれよと言いたいところだが、次もこの前みたいな結界がある可能性があるし、何より約束をした手前いい加減な事をしたくないってのもある。

「ルディ、いいか？一つ言っておく。」

「お、その気になったか。」

お前は犬か、と思いながらアホと器用に背後のルディの頭を軽く叩く。

「俺は人間で、しかも高校生。んな人外の戦いが頻繁にあっても身がもたねぇっつの。それに、少しはこっちの都合も汲んでくれ。」

「むー。」

（嬉しいのが分かるから、強く言えないのがなぁ……。）

誰だって、最早諦めてたことに光明が射して、しかも実際手に入れられれば喜んで当然だ。俺だって、それが分からないほど非道じゃないつもりだし。

でも。

「油断大敵、沈着冷静。今のお前に必要なのは、落ち着くことだ。焦れば焦るだけ、何もないところで躓くぞ。」

少なくとも、ルディしか解放が出来ないんだから、お前が大人しくしてれば事は動かない。少しは俺に仮初の平穏を満喫させてくれよ。

「じゃあ、夏休みになったら必ずだぞ！」

何とか納得させることに成功した俺は、ほっと安堵した。
これである程度は、襲撃がなくなるだろう。

と、思った矢先。
不満をぶつけてきたのか、思いっきり背中を押しながら飛び離れたルディは、そのせいで前につんのめって顔が床に叩き付けられる寸前でなんとか腕を前に出して回避した俺を無視して、外に面した窓枠に乗っていた。

あたたたた、とブチ切れそうになりながら振り向いてそれを見た俺は、何をしようとしているのか予想できすぎて、言われる前にだめだこいつはと項垂れそうになる頭を押さえる。

「暇だし、仕方ないから遊んでくるな！」

「はぁ……。いや、お前はそういう奴だよな。」

基本じっとしてらんないもんな。
そんな俺を気にせず、そのまま出かけようとしたルディに近付き首

根っこを掴んでそれは阻止。

「あれも駄目！これも駄目！つきは鬼だ！」

「鬼で結構、てめぇは馬鹿だ。」

最早お仕置きする時には当たり前になった頭ギリギリをやりながら、こいつには何か仕事をやらなきゃ制御しきれないと思った。

かといって、何が出来るのか。

してくれたら助かるって事はいくらでもあるが、こいつが出来そうなものっていうのは残念ながらほとんどない。

だけど、そこを何とか探してピックアップし、後は天秤にかけた。

俺のプライドと、ルディの制御をだ。

（いや、背に腹は代えられねぇか。しゃーねぇ。）

痛さに悲鳴を上げて暴れるルディを無視して、ぐるぐると頭を働かす。

結局は、どっちを取ればより面倒かで決まるんだが、そんなのルディが暴れるのと比べたら、ほとんどのことが面倒じゃなくなるから比べる意味もないんだけど。だけどそこは、ほら、自分を納得させるぐらいしたいじゃん。

「日中は、３つ目を探して走り回れ。夜は、あれだ。」

お仕置きの痛さに涙目になっていたルディは、俺の言葉で上目遣いにこっちを見た。仕方なく、最後に一発頭を叩いて解放してやり、握られた頭を一生懸命摩って痛みを紛らわそうとしている間に、べ

ッド脇に置いてある剣を持つ。

それを抜けば、相変わらずの輝きを魅せる剣。今のままじゃ、どうやっても宝の持ち腐れだっていう自覚はある。だから、何とかならないかとは考えていたけど、俺には部活に入る余裕もどっか道場に通う時間も無い。

元々あったのは、若干の抵抗だけだ。ルディ（…）に教わるっていうことに関して。

けど、いい機会だ。こいつの暴走を止める為っていう建前で、そこは自分を納得させよう。欲しいのは、実践に対しての技術だし。

本当は、俺より大人な姿だって自己暗示すればいいし。

「俺に剣を教えろ。」

最後の抵抗にと無駄に自己問答してから、抜き身の剣をルディに向けた。

その瞬間、瞳の鋭さと色が変わる。

「本気か？」

ふさげた空気が一変、まるで俺とルディが敵対しているような感じになった。

目が、剣を向けるということがどういうことか分かっているのか、と説いてくる。

そういうとこだけは、魔王一一人の上に立ち、纏めて、従える奴なんだと実感させるんだよな。普段はあんなにも考え無しなくせにさ。

「俺は、お前に守られるってことだけはされたくねぇんだよ。それ

に、今更だ。まがりなりにも魔王だろ?だったら、人並みに剣は使えるだろ。」

「いいのか?私に借りを作ることになるんだぞ。」

ていうか、協力者に対して借りとかどうとか言うか普通。

あぁ、違いますね。俺は従者という体の良い下僕でした。

だけど残念。こういう腹の探り合い的な頭脳戦は俺の土俵だ。

面白そうにニヒルに笑うルディに、お返しとして見下した笑みを返してやった。

そして、キンと剣を鞘に納める。

「今更お前に借りを1つ作ったところで、俺は既に何度も借りを作らさしてもらってるんでね。痛くも痒くもねぇ。」

本体の解放に、宿も与えてやってる。ルディの最大の交渉材料になるはずだった余命も、俺には使えない。どうやったって、こっちに分がある。

簡単にそれを告げれば、ルディは一瞬ポカンとした後に、盛大に笑った。

「くくっ!本当につきは、面白い。私に指図するは、顎で使うわ。新鮮で飽きないぞ。」

「それはどーも。お褒めに預かり光栄でゴザイマス。」

「生憎、私はどっちかというと魔力で戦うから、人並みにしか教えられないが。いいぞ、これを機会に日頃の恨みを晴らさせてもらう

！」

新鮮で飽きないとか言いつつ、しっかり癪に触っていると暴露するルディに呆れながらも、こうして俺は馬鹿の暴走を止めることに成功した。

ただ、それに対して消費した体力と崩れたプライドという代償は大きかったが。

だって、小学生に教わる高校生って、情けなさすぎるだろ！

今日、俺は、何かを失った。

（こいつに頭を下げるとしたら、俺が死ぬ時だ！）

一つだけ心に誓って、今夜は枕を涙で濡らすことにする。

4－2　解き放て、若者よ

（終わった、色んな意味で終わった……くっ！）

独特な解放感で満たされた教室で、俺は一人机に突っ伏す。
今日は、夏休み前の大きなテストの最終日。
あれから毎日、昼は休日以外平和に学校に行き、夜は幽霊屋敷で指導という名の理不尽な怒りをぶつけられ。身も心もすり減らしながらこの日を迎えた。

面倒くさい状況が多々ある学校が平和だと思う時点で、大分毒されているんだろう。大丈夫だ、自覚は大いにある。

「お前は、狡賢いくせに賢くは無いんだな。少し意外だ。」

「……は？」

後はＳＨＲを受けて帰るだけ。それまで大人しく突っ伏していよう。
そう思う俺は贅沢だったんだろうか。
机と体の少し開いた隙間から、何故かルディが見える。
属に言うヤンキー座りをしながら、ニヤニヤとむかつく笑いを携えて俺を見上げていた。

「つきの真剣な顔っていうのは、何故だか加虐心をくすぐるな。男に興味は無いはずだが、思わず想像してしまった。」

「っ－－－？！」

ただでさえ、ルディが居たことが予想外で驚いたというのに、それ以上にその言葉に恐怖を感じて立ち上がりそうになった。

ていうか、何を想像したんだこいつは！

体が成長したっていうだけで、まだ違和感は拭えていないのに、言動まで大人びて来てる。しかも、危険な方向で。

だけど、そこは何とか椅子を僅かに引くに止め、再び元の体制に戻る。

重荷から解放された時、何故か人は心まで軽くなって、馬鹿な奴は頭まで軽くなるんだ。

ここで、注目を浴びるような事をしてみろ。

絶対フラグが立つ。

「そう思ってる時点で、フラグは十分立ってると思うけどな。」

「心を読むな。ていうか、何で居るんだよ。」

不吉な事を！とにかく、ルディを追っ払おうと理由を聞けば、返ってきたのはすごく分かりやすくて短くて、殺意が芽生える５文字だった。

「暇だった。」

「滅されろ。それが世界の為だ。」

ここ最近で一番だと言えるぐらい深い溜め息は、組んでいる足にぶつかって戻ってきた。吸ったら更に面倒が増える気がして、無駄に

息を止める俺。

餓鬼だと馬鹿にしてくれて結構。１６歳はまだまだ子供です！
もう子供じゃないって言う奴ほど、子供な事ばっかするんです。

いや、俺は子供じゃないって反抗したりしないけど。
だって、反抗する人自体いないしねー。

「あぁ……、自分で更にダメージを。」

「ふむ。前々からお前は自虐的な節があったが、やはり真性のどＭだったんだな。」

もういいや、こいつは無視しよう。

（むしろ、俺が空気だ。俺は空気だ。俺こそが空気だ！）

必死に自己暗示をかけながら、やっとこさ始まったＳＨＲがさっさと終わるように、担任に呪念を飛ばしておく。
その間も、ルディは一人、ふむとか呟きながらしゃがんだままだった。

最近特に、ルディの行動が読めなくなってる気がする。
いや、ただ端に振り回されてるだけか。

「つき、終わったみたいだぞ？」

「あ、あ～、いいやもう。帰ろう。」

見事に担任の言葉は、１文字も俺の耳に侵入出来なかったようだ。

ふはは は、流石俺。明日は絶対、嫌味の弾丸が振ってくるだろうよ。

（もう全部、ルディのせいだ。）

最後のMP（エムピー）が消えた瞬間だった。

「そうだな。だが、そうはさせてくれないみたいだぞ。しっかりフラグは立っていたか。ほんと、お互いモテる男はつらいな。」

だが、神様の俺への嫌がらせはこれで終わりじゃなかったようだ。

寧ろ、こっからが本番だったみたい。

ルディの言葉で、次は何なんだと顔を上げれば、目の前には全然知らない男子生徒が3人いた。

（あ～、誰だこいつ等。）

思わず首を傾げれば、真ん中の一人はニヤリと笑う。

（クラスの連中から察するに、違うクラスの奴なんだろうなぁ。）

何の用かは聞かなくても見当が付くっていうのが悲しいところだが、元々がエスカレーター式のこの学校で、今更新しく俺にちょっかいを出そうとする奴が居たことはめずらしい。

まぁ、どうせ隣のクラスの従兄弟の差し金なんだろうけど。

案の定、その従兄弟である三郎もとい中野聡（さとし）君が、廊下で楽しそうにこちらの様子を眺めていらっしゃいました。

自分の父親に似て、肥満体型でチビの極太眉毛。三兄弟一不男という笑える称号をお持ちの、残念なオツムな子でいらっしゃいます。

いやさ、人間顔だけが全てじゃないけど、何も努力をしない癖にモテたいだとか抜かす奴とか、性格最悪な奴に遠慮っていうのは必要無いと思うんだよね。

「あれが、お前の叔父の息子か……。」

「三男坊な。ちなみに、顔と性格を知った途端、許婚が自殺未遂しちゃうって裏では有名。今までにか弱いお嬢様が6名犠牲になっていて、現在も記録更新中です。」

ルディも目ざとく俺の視線から気付き、吐き捨てる様に呟いたので、せっかくだからとこいつだけに聞こえるよう小声で補足説明をしてやれば、一瞬止まった後にぶふっと噴出していた。
ま、そのお嬢様達全員が、実行する前に使用人や親が止めて無傷だから、笑い話になってるんだけどね。

「あー、いいよ何も言わなくて。部室棟の裏がこっから一番近いから、そこでいいよな？」

その聡君が顎で合図をした様子を見て、目の前の男子生徒に視線を戻せば、多分アレの取り巻きだろう真ん中の奴が口を開きかけたので遮る。
勿論、相手は少し不満そうに眉を顰めた。

それが分かりながらも、俺は机の横にひっかけてあるぺしゃんこの学生鞄を持って立ち上がり、慣れた足取りで鞄を持った腕を肩に乗せた。

「……行かねぇの？」

一刻も早く帰りたいっていうのに、やる気が無いなら構わんでくれ。動かないそいつ等にわざわざ声を掛けてやれば、大人しく従うから馬鹿らしい。

面白そうについてこようとする奴等でざわめく中、耳が腐ると3人の言葉はシャットアウトして1年の校舎から一番近い、目立たない場所を目指して歩く。

「大人しく甚振られるのか。」

「無視したほうが面倒だし、せめて家はある程度安全にしときたいんだよ。」

その横を、ルディがつまらなさそうに付いててくる。

あの家のどこが安全なんだ、とぶつくさ言ってるが、それは被害者である俺が判断すべき事だし、一番分かるものだ。

だって、家だったら部屋から故意に出ない限り、連中がわざわざ尋ねて来ることはない。汚らわしいんだと。

勿論、秘書の松田さんや使用人経由で、屋敷の中心に呼び出されることもあるが、こうやって学校で三男坊の暇つぶしにある程度付き合ってやれば、大学生の次男と社会経験を積まされ中の長男はライフスタイルが合わないので、たまにあるソレを我慢するだけでいい。

最近は、変に勘ぐって頻度は増してるけどさ。

それでもそう考えれば、家は格段に安全であるし、安全にしときたい。

他人の常識と、俺の常識はどっかズレているけど、態々合わせる意味なんてないんだ。

「しかし、その三男はコレに加わらないみたいだぞ?様子を見て逃

げればいいんじゃないか？」

出会って当初、ルディは俺自身が変わる事をある意味強制してきていた。
可笑しいとか馬鹿だとか、中身の無い言葉で俺の常識を強制的に矯正しようと。頭が悪いって訳では無いから、すぐに無駄だと気付いたみたいだけど。
そして以降、今度はことある毎に回避をさせようとしてくる。

本人は、言葉巧みにしているつもりで。

そうしている内に、俺達は目的の場所に着いた。
流石に相手との距離が近いため、さっきの質問には答えられない。

「噂には聴いてたけど、まじで無抵抗なサンドバックなんだなお前。プライドとか無いわけ？」

「プライドなんて、凡人が持ってるわけね～だろ。頭下げてヘコヘコするしか能力ないんだから。」

同時に、便利なエアー耳栓の機能もオフにした。
途端に、耳障りな”雑音”が届いてくる。

「聡さんの許可が中々下りないから、今まで別の事でストレス発散してたけど、これで楽になるな。」

よし、さっきから真ん中を陣取っている奴をAとして、右をB、左をCにしよう。

容姿は全員人並み。女子からしたら、まあ付き合っても私のステー

タスに傷を付けることは無いけど、別れた数年後に元彼の話題が出ても、そういやあんなのと付き合ってた事もあった気がするけど、あんま覚えて無いし、ノーカンでも見栄張る為に加えてやっても、どっちでもいい感じね。的な、平々凡々だな。まぁ、ぶっちゃけ残念そうな奴等？

それにしてもと、ちらっと自分の格好を見てみた。
向こうは、ブレザーの制服をきちっと着こなしている。ある程度最近の若者っぽいけど、一応お坊ちゃまとしてそれ相応の格好でいなきゃいけないんだろう。
それに比べ、自分はカッターシャツはだらしなく出してネクタイもしていない。髪は染めていないけど、実はピアスが左右1個ずつと左の上（耳介だっけ？）に1つ開いてたりするし、だるっとズボンもはいてて、傍から見たら逆の立場が正しい気がする。いや、まぁ、三つ折り靴下履いてるからカツアゲしないなんてルールは無いからさ、ダメでは無いとは思うんだけど。だけど、ねぇ？

「ぱっとしないな。」

（そうそう、それが言いたかった俺は。）

ルディも同じ事を思っていたのか、一人呟いた。

「だけどさぁ、俺等優しいから、少しは同情してんだぜ？」

「そうそう、あの中野家に養子にされるってだけで、ある意味地獄だろうもんな。」

「しかも、孫があんな連中だしさー。権力と金持った家じゃなかったら、絶対付き合いたくねぇよ。」

どうやら、アルファベット3人組は、残念そうじゃなく残念な奴等が正しいみたいだ。
その気持ちには激しく同意できるけど、俺に言うべき内容ではない。

ルディは早くも、3人組に合掌していた。
その間俺は、両ポッケに手をつっこんで壁に凭れ、早く話が終わらないかなーっと待機中だったりする。

だけど、こいつ等は相当お喋りなのか中々終わらない。
仕方ない、俺から動くのが一番得策だなと身体を起こした。

「はぁ～…、だったらさ、もう帰っていいか？」

「「「は？」」」

いやまぁ、分かってるけどさ。
声をかけると、3人組は自分等で盛り上がって爆笑していた空気から一転、何言ってんだこいつと俺に注目した。

「え、まじで言ってんのお前？」

「ぷっ、馬鹿じゃね？」

「いやいや、無い無い。無いってそれは！」

はいはい、同情はするけどサンドバックにするのは変わらないってんでしょ。
こういったパターンは、何度も経験してるから別に驚きもしない。

2年前、引き取られたばっかの頃はこういった理不尽さに怒ったり、憤っていたかもしれないけど、今の俺はそんなに可愛くないからねぇ。

一旦起こした体をもう一度壁に預け、今度は俺に対して笑い出した3人組が落ち着くのを待つ。
ただ、さっきは真正面を向いていた頭は若干下に落ちている。

落ち込んでるのかって？それこそ無い無い。

（ま、苛々はするけどねぇ。）

でも、それだけだ。感情を無視したり押し殺すのなんて、意識せずとも出来るぐらいにハイスペックな怠け癖だし。

ルディはルディで、飽きたのか近くの木に上り昼寝を始める始末だ。

「んじゃま、恨むなら駆け落ちなんてした自分の親を恨んでくれ。」

そうこうしてる間に相手側は落ち着いたのか、やっとこさ本来の目的を果たす為に動き出してくれた。

何が楽しいのか、ニヤニヤと笑いながら俺に迫ってくる。

あぁ、こういう時に俺を見る連中の目は皆一緒だ。
まるで人として認識していない。かといって、道端の石ころでもない。

そういった中途半端な意識程、嫌悪するものは無い。

俺は希薄だとしてもしっかりと感情を持っている人間だ。だけど、相手からしたら自分の為に存在する物と一緒。

そう、物だ。

まだ道端の石ころを見る目の方が、優しいと感じる。

だって、普段の日常で石ころに対して興味を持って見るなんてしないだろ。

無意識っていうのはそういうもんだ。

だけど、周りの連中が俺に向けるのはそうじゃない。

好きっていうのは当然無いし、だからといって嫌いもない。

あるのは、どう”使用”しようかなっていう、用途の模索。

ルディは日ごろから、何故抵抗しないのかと聞く。

ことある毎に、何故と問う。

教えたりはしないが、答えはそこにある。

削ぐんだ、そういう視線はそういった感情を。

そして、だからこそ抵抗しないし反撃もしない。

俺にとっては、しないことが最大の抵抗であり反撃だから。

当然、世間一般でのだからこそは、抵抗し反撃することだと分かってはいるが、でも同時に、それにより相手をさらに楽しませてしまう。

苛めや陰口もそうだ。こっちが反応を見せれば調子に乗って度合いが増す。

逆に、何の反応も見せずに見かけだけでも平静を保ってノーダメー

ジを装えば、あっという間にターゲットを移す。
まぁ、それまでに、馬鹿みたいに色々な事をしてくるけど。

だから、そんな考え方をする俺は、今日も無抵抗を装ってある程度ダメージを減らしてこの場を凌ごうと考えていた。
今までもそうしてきたし、これからもそうしていくつもりだった。

だけど、3人組が俺を囲み、笑いながら3方向から蹴りを繰り出そうとした時。自分でも予想外の出来事が起こる。

今までに無い経験が生み出した、新しい感情。
ファンタジーな出来事で訪れた、自己の変化。

人は変化する生き物だ。

突然浮かんだ誰かの名言の意味に気付く前に、俺の身体は気持ち悪いぐらい自然に行動を起こした。

それを、寝た振りをしていたルディが見ていて、そして満足げにほくそ笑んでいたことを知っているのは、寝床を供給した木の青付いた葉と、偶然近くを飛んでいた鳥達だけだ。

4－2　解き放て、若者よ（後書き）

明るく行こうとするのに、樹を自由に動かしてたらいつの間にか捻くれた方向に……。ルディも、気付いたらどっか行ってる。
何この自由な子たちッ！

4－2．5　桜と薔薇と記憶と混乱（前書き）

これだけを明日更新するのも微妙なので、連続投稿です。

4－2．5　桜と薔薇と記憶と混乱

『おにぃ、早く早く！』

ー待てって、そんな引っ張るなよ。

『ほんと、お兄ちゃんが大好きなんだから。パパが焼きもちを妬いちゃうわ。』

『そうだな、妬いちゃうぞー！』

『きゃー！パパが追いかけてくるー！』

長閑な公園。薄く敷かれた花びらの絨毯。息を呑むほど美しく見頃な桜並木。
小さな女の子に引かれた腕は、抵抗なんてするわけもなく導かれていく。

（この記憶は……？）

だけど、唯一の傍観者であるはずの俺は、どこか別次元を揺蕩っている感じで、まるでそこに登場していないような気がしていた。

一見、温かい家族の日常の一小間だ。遠く無い未来、そういえばそんなこともあったなと思い出すような色褪せてしまう風景であり、

鮮明に刻まれるような出来事では無い。

なのに、気にせずにはいられない違和感が溢れ出てくる。

何かが足りない。何かが違う。何かが可笑しい。何かが――。

その何かが分からず、見当もつかず。俺は柄にも無く焦る。

しかし、そんな俺を置いて、その家族は動き続ける。

小さな女の子に腕を引かれる”お兄ちゃん”は、笑顔で歩く2人の両親に追いつき、全員で一本の桜の木の下に着いた。

規則正しく並ぶ人工的な仲間達と違い、少し離れた場所でまるでここがゴールだと言わんばかりに一際美しく咲き誇るその木は、少し寂しそうにも感じた。

木を背後に並んだ家族は、父親がカメラをセットしに一度輪から外れ、その間に母親が小さな女の子を腕に抱く。

お兄ちゃんは母の前に立ち、そこで父親が準備出来たぞと愛する家族に大きな声で合図をした。

『おしゃしんとるの？』

――そうだよ。今日の記念に。

『家族皆でね。』

久しぶりの外出だったのかもしれない。女の子は楽しそうにはしゃいで、お家に飾ろうねと笑う。

『じゃあいくぞー！ちゃんとカメラを見てくれよ。』

皆、笑っていた。
幸せそうに、愛しそうに。

父親はシャッターを押し走る。
母親は、愛する人が立つスペースを空ける為に身体を少しずらし、
息子の肩に片手を置く。
女の子は、間に合った父親に笑いかけ、カメラの方向を向くように
誘導される。
そして、男の子。彼は、一度背後の両親と妹に振り返り照れくさそ
うにカメラを見た。

今か今かと待ちわびていたデジタルカメラは、数度ライトを点滅さ
せて時を刻んだ。
陽の光で合図が分からず止まっていた家族。

撮れたか、撮れたでしょ。
まるで初めて写真を撮ったような掛け合いをしながら、今度は全員
でカメラの場所まで向かって、今し方刻んだ風景の確認をした。

上手く撮れていたのだろう、カメラと三脚を仕舞い満足そうに家族
は来た道を戻る。

それを見送る1本の大桜。

しかし、実際の桜は見送る余裕が無かった。

顔があったら気持ちが悪いだけだろうが、心情としては驚いたこと
だろう。
だって、あの家族が来た時には居なかった筈の人物が残っていたの

だから。

俺が、その木の前に立っていたのだから。

「今、のは……？」

俺は問いかける。答えが返ってくることは無いと分かっていながら。
それでも、桜に問いかける。

分からない。違和感しかないのに、その原因の何かが分からない。
この胸を締め付ける感情も、理由も。

知っているはずなのに、あの男性も、女性も、女の子も、男の子も。
全員”何なのか”は知っているのに、”誰なのか”が分からない。

「なぁ、お前は、分かるか？」

俯いた視線を上げて桜を見ても、当然悠然と佇む以外に変化など訪れない。
それでも、誰かに問わずにはいられなかった。

背後に響くのは、幸せそうな声。置いてけぼりにされているのは、無様な顔をしているであろう俺。

「これは、記憶、なのか？俺は――」

浮かんでは沈んでいく気持ち。
喉まで出かかり、必死に押し込めた感情。

何度もそれを口にしそうになり、開いては閉じてを繰り返す唇。

誰も答えてはくれないし、答えられないだろう。

だから結局、蓋をするしかない。

それが、明らかに異質であろうとも。

（家族の名前が分からなくたって、支障はないんだから。）

たとえ蓋が開きかけそうになったとしても、また閉めてしまえばいいことだ。

背中の声が聞こえなくなり、桜と2人っきりになってしばらくして、そう結論付けた俺は顔を上げた。

暫く素直に美しさに見惚れて、俺は踵を返す。一人きりの道を辿ろうとする。

しかし、振り返った先にあった光景は、それを良しとしなかった。

「そうはさせないぞ、つき。」

広がっていたのは公園の芝生でも、桜並木の風景でもない。

黒と青がバランス良く混ざりあった酔ってしまいそうな程濃厚な香りが漂う薔薇園だった。

そして、そこに佇んでいたのは、薔薇以上の存在感を放つ、長い漆黒の髪を蒼いリボンで纏めそれを風に遊ばせ、全身黒の服に身を包んで本来耳があるべき所に茶色の巻き角がある、美しく鋭利で官能的な男。

「止まるのは、許さない。いいや、止まれるはずがない。そうだろ？――つき。」

本能で後ずさりする俺に、その男はそう言った。

切れ長で鋭い眼光の漆黒の瞳が意識を呑み込もうと迫り、何が楽しいのか吊り上げた唇が身体を貪りたがる。

全てが、存在そのものが脳髄を刺激して、限界を超えた混乱が震えを産んだ。

と、そこに一陣の風が吹いた。

どう頑張っても男から視線を外せない俺を他所に、またもや風景が変わる。

黒い薔薇の花弁がまるでカーテンの様に俺達を隔て、舞う黒と動かない風景の境目から徐々に変化していく。

黒と青だった薔薇は全て透き通る青に。

謎の男も別の人物へと入れ替わった様で、服は西洋の貴族のようで、青と白を組み合わせた清楚なものに。

顔はまだ見えないが、体格から男だと分かる。

首が見えるぐらいになった時には、金色の毛先が覗いていた。

そして、黒のカーテンが顎まで開けた時。

新たな男は口を動かす。

「駄目だよ。まだ、駄目だ。」

最早、これは現実なのか、夢なのか。妄想なのか、気のせいなのか。

何の判断も付かなくなった頃に響いた声。

瞬間、俺の頭は割れた。

物理的にでは無く、大きな痛みで思考も何もかもを刈り取った。

（これは、俺は、一体――！）

足場が崩れる感覚。
落ちていくのは身体か心か。

期待していなかったが、思わず縋る様に伸ばした手を、微かに2本の腕が掴もうとしてくれたのが、シャットアウトする視界の中で映った気がした。

4－3　経験値は高いから良いわけじゃない

ルディ指導の剣の修行は、過酷の言葉に尽きる。

基礎体力？基本？
そんなん勝手に頑張れ。

そういう感じだ。
叩きこまれたのは、俺の素早さをどう利用するかと、どれだけ上手く避けるか。後は若干の受身で、所謂反射神経の強化がメインだ。

まあ、魔王であれば倒す技術よりも生き延びる術が必要だからだろう。

その中で、唯一変わらなかったのは、俺の片手持ちぐらい。
何故か両手で剣を持つと、教わった事も元々のものも全部レベルが下がるんだよね。剣があれじゃなきゃ、きっと挫けてただろう。

勿論、付け焼刃にしかならないのは分かってる。
でも良く良く考えてみれば、この経験すらも、現実の社会尚且つ日本ではそう経験するものでは無いだろう。
まず、剣を持つこと自体限りなく０に近いんだから。

（あ……ら？ちょ！どうしたよ俺。）

時間にしたら数秒。白昼夢を見ていた感覚と、現状把握が出来ずに混乱する。

蹴られそうになって、どれを避けるかなーと考えていたところから、今の状況までの記憶が無いのだ。

「お前、何避けてるんだよ！」

「え、そこ？！それよりも、おかしくね？」

「おかしいよな。今、飛び越えたのか？」

それは、アルファベット3人組も同様だった。

自分達が囲んでいたはずの相手がその包囲から外れて背後にいれば、誰だって驚く。俺だって驚く。あ、いや、今は驚かないかも。

間抜けに蹴ろうとした足がそのまま前に出されているが、ここにいる全員がそれを笑う余裕を持っていない。

「くくっ。このもやしに、人を飛び越えるだけの脚力があるわけないだろ。隙間から逃げたのが、早過ぎて見えなかっただけだというのに。」

撤回。お昼寝していると思っていたルディだけが、俺のしたことを分かっていた様だ。

木の枝の上にリラックスした状態で寝そべりながら、避けた本人が分かっていないのが尚の事楽しいらしい。

（避ける気無かったのになー。）

ルディの言葉で状況把握が出来た俺は、さてどうしようかと唸る。
このまま、じゃあなと帰る（逃げる）のは簡単だが、明日からの事を考えると俺の意思に反するし、かといって弁解できるわけでもない。

（やっぱ、悪い今の無しっつって誤魔化すしかないかぁ。しまったなぁ。）

こうなると、怪我の度合いが増すからいくらなんでも遠慮したいという気持ちもあるのだけど、やっぱり今後の学園生活と家の安全とその場凌ぎの逃げじゃあ越えられない壁がある。

一瞬の唸りの結果を即実行しようとし、右手がしゅたっと上がりかけた。
しかし、今までと違う存在――ルディが居るこの場ではそれは至難の業だった。

「無駄だぞ。お前が避ける気が無くても、身体が反射で動く。そういう風に仕込んだからな。」

「っだあああ！やられた！」

まさかの弊害！いや、この場合絶対確信犯だ！
脳裏に、修行の夜の光景が蘇る。

恍惚とした表情で攻めてくるルディに、必死の形相で避ける俺。
止む気のしない攻撃一つ一つは、手加減無しに食らえば死ぬ危険性があって、否応無しに殺気を覚えた。

初日から数日経てば、寝てる間に剣を突きたててきたほどだ。

今じゃあ、ルディに対してなら、隠した殺気も察知できる。

そんな修羅場を潜り抜けて来た（いやまじで）奴の身体が、こんなお遊びにぼーっとするわけがない。

細胞の気持ちとしては、赤ん坊が振り回してる剣をひったくるより簡単で、むしろ持ち主の俺に対して、お前何やってんだよ馬鹿か、と怒鳴りたいぐらいだろう。

「なんだこいつ、気持ちわるっ！」

「い、いいからやっちまおうぜ。」

「おう。」

3人は、突然しゃがんで大声を上げながら頭を抱えた俺に当然引き、でも当初の目的は忘れずに再び迫ってきた。

その間も、ルディの思惑にまんまと嵌ってしまった事が屈辱すぎて悶えてしまう。

あ、殴られる。そう気付いた時には、また囲まれていて足が目の前に迫っていた。

「う……おおう。」

しかし、それすらも俺の細胞ちゃん達にとっては、お茶の子さいさいだった。

痛みがくると声が上がりかけ、それが驚きに変わった。

3方向からの蹴りを、しゃがんだまま飛んで避け、華麗に着地。
2度目も避けられた事でヒートアップした3人は、暴言を吐きながら蹴りと拳を駆使して猛攻を仕掛けてきた。

「流石私だ。素晴らしい指導！つきは、褒め讃えながら跪いて感謝を述べるべきだ。」

（もうヤダ。こいつまじでありえねぇ！）

持ち主を無視する細胞ちゃんにも同じ気持ちを抱きつつ、何故か悔しくて涙が出かかった。涙に夕日が染みて痛い。

なのに、身体は避けるのを止めてくれない。

それどころか、温室育ちのお坊ちゃん達の方が息があがる始末だ。

仕方なく、俺は別の対応策を考えることにする。
肩で息をする3人の言葉は、エアー耳栓でシャットアウト。
ぐるぐるぐるぐる、思考を回す。

「そのまま殴り倒せばいいのに、つまらん。」

我がご主人様の案は、速攻却下。つまらなくて結構。
俺が欲しいのは安息だ。

（うーん、後9ヶ月……。準備って結構かかんのかなぁ。）

基準は、ルディに言った保険の中身のとある事情。それが、俺の全てを突き動かし我慢をさせる。

頭の中の情報を元に必死に計算し、唸った。
危ない橋は正直渡りたくないっていうのに、石橋を叩かず渡らない精神はどうやら通用しないみたいだ。

「めんどくせぇなぁ。」

思わず零した言葉に、3人がびくっと震えた。

（準備…準備…。この前、そろそろとか言ってたのを聞いた様な。しまったなぁ、もっとちゃんと聞いとくべきだった。）

唸る俺、訝しむ3人。
結果、めんどくさくなった俺は、人の噂も75日を期待することにした。
今回の出来事の一番最初に、切り札はゲットしてたわけだし。

ということで、エアー耳栓をオフ。
そして、舐められ平民の皮を破った。

後日、この時の俺を、ルディは正真正銘の悪魔を見たと言っている。

「悪ぃ、やめたわ。」

「「「は？」」」

んーっと伸びをしながらそう言うと、困惑した声が返ってきた。
気にせずに、無駄に悩んで固まった筋肉を解しつつ、俺は笑う。

「いやさ、俺としても最初は、大人しくしてるつもりだったのよ？だけどさー、ちょっと予想外な事が色々あって。どうせもう少ししたら事は動くだろうし、ぶっちゃけ面倒くさくなった。」

今まで学校での俺は、基本喋らない、無表情、喋っても敬語、聞き訳の良い玩具。たぶん、そう認識されていたと思う。事実、そう思われるように行動していた。

だから、3人はそれがどうだ、な心境だろう。

お互いに顔を見合わせ、誰だこいつはって感じに困惑している。それを無視して、俺は続けた。

「そもそもさ、皆考えなさすぎだろ。いくら一般家庭の出だからって、あの中野の人間に対して舐めた行動しすぎ。あのさ、言っとくけど、俺が頼み込んであの家に入ったわけじゃないんだぜ？」

こいつ等に、言ってる意味が分かるだろうか。
これは只単にこの場を凌ぐ為のはったりに過ぎないが、でも認識としては俺の言ってる事の方が利に叶ってるのだ。

「お前等も言ってただろ。孫があんな連中じゃ、って。だから俺が養子になった訳なんだけどさ、それってどういうことか分かってんのか？」

残念ながら、3人は意味が分からない様で、仕方なくさらに分かりやすく気付きやすく言ってやる。
すると、内1人がはっとして顔を青くさせ始めた。

「お、気付いた？つまり、そういうことだ。俺が、中野の中で大き

な意味を持たない限り、養子になるわけねぇんだよ。」

誰だって、利益の無い奴を態々囲おうとは思わない。
理由には色々あれど、受け入れる側にメリットが無いとそんな事はしないだろう。じゃなきゃ、孤児院のような施設が出来たりしないだろう。

「ほんと、俺が面倒くさがりじゃなかったら、今頃どうなっていたことかねぇ。」

「当然なものなど無きに等しいということが、今の者には分からないんだろう。」

ぽそりとルディが言ったその意味は、とても重かった。
楽しそうにこちらを眺めているくせに、どうやら頭は違う方向でいるらしい。

今の言葉通り、少し考えれば分かることが世の中には溢れていて、だけど、実際考える人は少ない。突き詰めていけば、毎日が死ぬかもしれないと考えるのと同じわけだから、そんなのを考えてばかりは精神的に無理だって分かってる。
それでも、思慮が足りないという言葉はそういうことからきているわけで。

俺が、当主である糞爺に告げ口するのが有り得るってことだ。

それをしなかったのは、只単に、“染まりたく無い”っていう俺の意固地。

誰かに頼ったり、貸しを作ったりするのが嫌いだっていう強がり。

「そして、文明の力っていうのは日々増していくわけで。俺のポケットには、携帯があります。そして、ここに着て直ぐ、俺はある機能をＯＮにしていましたー。」

この時点で、顔を青くしているのは1人から3人、つまり全員になっていた。

さすがに、どちらに分があるかなんて気付けるだろう。気付いてなきゃおかしいぐらいだ。

「……聡サマに知られたくなかったら、今後俺に近付くなよ。勿論、向こうには悟られないぐらいできるだろ？」

こんなことで言葉を発することが出来なくなった“一般人”に、止めの一言を放てば、アルファベット3人は無言で拘束に頷き、あっという間に消えていった。

そのあっけなさに、今までの我慢がなんだったんだろうかと少し切なくなる。

ただ、今日はタイミングが良かっただけだ。

修行が身に付いていて、尚且つ、タイムリミットが迫っているというね。

「今までででも、普通に上手く回避する力を持っていただろうが。こんな簡単なことを面倒くさいと言うお前の神経は、少しおかしいぞ。」

木からストンと飛び降りて着地したルディはそういった。

だけど、それだけは受け取れない自分がいた。

だって、それは、守るべきものがある奴の考え方だ。
そっちのほうが世渡り上手でもあるけれど、守るものが何も無い俺にとってはそれすらも煩わしいんだよ。

そう思うが、それは言わなかった。

「色々、事情ってもんがあるだろ。それだけだ。」

「だったら、その事情をどうにかしろ。もしくは、相談してくれ。」

「それは、詮索になると俺は思うがねー。」

飄々と流す俺に、ルディは苛立つ。苛立つルディに、俺が苛立つ。
協力者と相棒の壁は厚い。

この日から夏休みまでの数日、脅しはしっかりと効いていたのか、3人が何かしらヘマをすることはなく、危惧していた噂になることもなかった。

そうして、俺が味わえる短い高校生活の1学期は幕を閉じる。

待っているのは夏休み。物語は、どんどん進む。
持ち主との再会に静かに期待を募らせる2つ目の封印は、新しい戦いを生むだろう。

ルディはそこで、何を思うのか。俺はそこで、少しでも自分の異変の答えを手に入れられるのだろうか。

知っているのは、それこそ神様だけだろう。

この日視た白昼夢は、記憶の深層に沈んでいく。

４－４　アイスはシンプルで十分

服装的にも、精神的も解放的になり、一年の内で最も出会いと別れが多い季節。

祭りにプールにキャンプに海。

労働という柵が無く、夏休みという長期休暇がある学生にとってはまさに天国。青春であり、性春にもなることだろう。

で。俺はというと。

「あ〜、天国だ。」

主がバカンスに出かけた事でほぼ無人となった屋敷、いつもなら絶対に近寄らないような部屋で文明の力に感銘を受けている真っ最中である。

残念ながら、俺の部屋にはクーラーなんてものも扇風機すらもない。廊下ですらあるっていうのに、と嘆きながらいつもは入り口を開けて冷気のおこぼれをもらうのが精一杯。

それが、俺の監視と警戒を申し付かった人間以外、憎き親族と使用人がいないことが、今の季節最も喜ばしいことだった。遊び盛りであるはずの高校生が、嘆かわしい限りである。

だからといって、食料を漁ったりへそくり探しが出来るわけではないのが毎年残念だった。

「つき、アイスを見つけたぞ！」

しかし、今の俺には秘密兵器がある！半思念体であるルディだ。
鍵なんてなんのその、意識すればちょちょいと通り抜けが出来ちゃうこいつを使えば食料ゲットなんて屁でもない。

「でかした！」

どや顔で現れたルディの言葉で、寛いでいたソファから飛び起き、戦利品であるアイスを2人で頬張る。

いつ振りの、栄養摂取が目的じゃない食事だろうか。
本来おやつであるはずの飴ですら、俺にとっちゃ立派な食事なのだ。
アイスなんて、それこそこの2年食べた記憶がない。

「くぅ～っ！初めてルディと出会ってよかったと思うぞ、俺。」

思わず涙混じりに歓喜すると、ルディは失礼なと言って笑った。

さて、ここで疑問を持つ人もいるだろう。
夏休みに入ったら2つ目の封印を解く云々はどうなったのだ、ということだ。

しかも現在、煩い周りの目が少ないから、尚の事遠出がしやすい状況である。
当然、ルディもレッツラゴーと意気様様になっていた。

そう、問題は遠出ということだった！
それは俺の前に、ヒマラヤ山脈の如く立ち塞がったのだ。

ルディが場所を地図で示した時、俺が発した言葉は至極簡単。

「行く金がねぇ……。」

以上である。

煙草での消費が無くなった分、1日2食の食生活が確保できたといっても、それ以外に浪費できる余裕がない極貧な俺にとって、電車であれ飛行機であれ資金を用意できるはずがなかったのだ。

何故ソレに気付かなかったのか、甚だ不思議である。

というわけで、魔法やら魔族やら有り得ないほどファンタジックなものと関っているはずの俺は、お金というとても現実的な問題で立ち止まっているのだ。

協力してやると上目線で言い放った手前、自分のせいで動けなくなっているのには、さすがの俺も情けなさすぎて落ち込んだ、とだけ言っておこう。

（この家の金をちょろまかせれば、楽なんだけどねー。）

それ一個で夏目さんが何枚かいなくなる、っていう高級アイスを寝そべって味わいながら、スイカの形をしたこの時期にしかお目にかかれ無い棒アイスに思いを馳せるという今までに無い最上級の贅沢を味わいつつ、何とかならないかと何度目かの思案をする。

今まで試したのは、ルディまかせの家捜しである。

主要で重要な部屋のほとんどは、俺対策で厳重に鍵を閉めた上でその鍵を屋敷の主本人が持っていってしまった。

なので、俺はどうにもできない。
窓を割ったりしたら、すぐさま「してますか？」の警備会社の方々が大勢で駆けつけてしまうからな。

そこで、まだ実体を取り戻せていない半思念体のルディに扉やら壁やらをすり抜けてもらい、資金調達をしてもらおうとした。
しかし、そこはがめつい叔父様一同。
屋敷のお金の一切を、金庫に入れてしまっていたようだ。

こうなると、ルディにもどうにもできなかった。
たとえ、少しばかり魔力が戻り、現時点で生身の人間じゃあ太刀打ちできない最強児童になったとしてもだ。

何故なら、ルディは物質に意図的に干渉はできる（食べたり触ったりはできる）が、それを自分の空間に引き込むことは出来ないからだ。

物質は、物質でしかない。
それがどういうことかというと、そもそもルディが人に見えないのは、この地球にいながらにして別次元に存在する存在だからだ。
もっと正確に言うと、その別次元と俺のいる次元の重なる部分にいる存在。

その上で俺達が出会えたのは奇跡に近く、そしてルディとの魂の波長が似ていたからしい。

……認識が出来たから、俺からも触れるし見えるという部分だけ受け取っておいた。

まぁ、常識的にこの考え方自体ファンタジックなんだろうけどね。
俺も説明された当初は、頭から煙が出るかと思ったし。

まぁつまりだ。
扉は通り抜けられても、俺が存在する所と同次元の物を持って通り抜けることは出来ないってこと。

なので、このアイスも、入る時は通り抜けて侵入し、内側から鍵を開けてアイスをかっぱらい、証拠隠滅にまた通り抜けて鍵をわざわざ締めて持ってきている。

普段だってたぶん俺以外の普通の人からしたら、ルディが今食べているアイスの器とスプーンは、空中に浮いて見えるはずだ。

え？服とか着てるじゃんって？

着ている服は、元々封印された当初から着ていたもので、ルディの世界のものだから同じ原理だそうだ。魔石も然り。

「ごちそーさまでした。」

「でした。」

二人揃ってアイスを食べ終わり、またしてもクーラーの幸せを噛み締める。
ルディは即効寝てしまった。

「うーあー、いっその事前借すっかなー。いや、でも、どう理由つければ……。そもそも、あの爺に連絡取る手段自体がねぇ！」

俺はアイスを食いながらも悩んでいた事に、まだ頭を使っている。
高い割りに味がたいしたものじゃなかったから、悔しかったわけじゃない。決してそんなことはない。

「当主に対して、かなり相応しく無い呼び方ですね。報告しますよ？」

「うぁ？」

高級ソファに身体を横たえ、考えすぎて消費しすぎた血を巡らす為にと頭を端から下に垂らしている俺の腹の上でルディが寝息をたてる。

そんな若干きつい体制で唸っていたところに突然振ってきた第三者の声に、俺は何の対応もできなかった。

頭側に立たれるが、姿勢のせいで相手の足しか見えない。

落ち着いているけど、若さは失っていない艶のある女性のボイス。
グレーのパンツスーツで細身の足を隠し、きっちりとした印象を与えるヒール。

そんな格好をしている人に心当たりがあり、声自体にも聞き覚えがあった。

嫌な予感しかせず、しかも相手には認識できないと分かっていても、気持ちよさそうに腹の上で寝ているルディを起こすのも憚られる。

それでもなんとか、首だけをギチギチとぎこちない動きで上げた。

瞬間、冷たい印象しか与えない黒い目と視線が合う。

「……お久しぶりです、紫苑さん。」

「お久しぶりです、樹様。相変わらずの貧相な体つき、お代わりないようでなにより。ところで、良い加減居住まいを正して欲しいのですが？」

腰までの長い茶色の髪をふさぁ～っと払いながら告げられた言葉は、氷河以上に冷えていました。この際、ルディの惰眠は諦めて頂くことにします。

4－5　できる女も乙女なのです

ストレートで手入れの行き届いた髪は腰まであり、切れ長の一重の瞳は冷たさの中に知性を感じさせる。頭の天辺から爪の先までできっちりとしている様は、固さと同時に大人の女性という印象も与えるだろう。

そんな彼女の名前は、松田紫苑といい、爺一一もとい、中野家当主の補佐を若くして勤めるやり手だ。

ちなみに、彼女の弟は叔父様の補佐兼秘書をしているが、姉とは雲泥の差。是非とも精進してほしいものである。

渋々身体を起こした俺の向かいに、紫苑さんは腰を下ろす。

その仕草の間に、目覚めてしまったルディに目で部屋を出るよう訴えた。

様子から、彼女は俺に用事があってここに来たんだろう。

であれば、ルディに居られては困る。

俺達がする会話には、重大な秘密が関係してくることが多々あるからだ。

内容は、たとえルディであっても知られたくない。

そして、普段ならこそっと耳打ちしたりするのにそれをしないのは、紫苑さんがかなり察しの良いお方だから。下手をしなくてもバレて

しまい兼ねない。

「後で説明できるならしろ。」

普段周りに居る奴とは明らかに毛色が違うのを本人も察したのか、ルディはそれだけ言って部屋を通り抜けて出て行った。

「お茶とか出したいんですけどねぇ。」

「出せるのなら欲しいですが、元より期待してません。」

「……スイマセン、おっしゃる通りキッチンの鍵締められてマス。」

ただ、正直この人は苦手だ。

立場上とかそんなん抜きに、何を考えているのかが分からない。

言葉には、蔑みも何も無いのでやり易くはあるんだけど、駆け引きの美味さは流石に適わないからなぁ。そもそも、彼女は仕事としてそれをやっているからキャリアが違う。

「相変わらず、肩身が狭いのね。不器用な子。」

ちゃっかり持参していたアイスコーヒーを飲みながら、紫苑さんは零すように言った。

「失礼な。こっちの器用さが追いつかない程、相手が馬鹿な事に関してのみ天才的な才能を発揮してるだけですよ。」

「それに対処できてこそ、器用と言うんでしょ?そもそも、あなたの場合は面倒くさがって手を抜いているだけ。」

「まっさかー。俺が殴られ損を許すわけないじゃないですか。これでも全力でやってますよ。只単に、まだ準備段階なだけってだけですぅー。若いんだもん、少しぐらいやり過ぎてもお咎めは軽くで済みますし？」

わざと俺の分を持ってきていないのにむかついて、その缶をひったくって承諾無しに一口だけもらい、スラッと足を組んで座る紫苑さんに笑いながら答える。

事情を知らない人が見たら、何の接点も感じない2人であることだろう。

キャリアウーマンと不良もどき。うん、危ない関係に感じてしまうな。

相手と違ってソファに胡坐を掻く俺に、紫苑さんは深い溜め息を吐いた。

「ほんっと、腹黒い。まぁ、だから気に入ってるんだけど。冗談抜きに、部下に欲しいぐらいよ。」

「それは光栄だな。だけど、もし部下になったら安心できないと思うよ。何時寝首かかれるかって、毎日ヒヤヒヤしなきゃいけなくなるだろ。」

ごちそうさまと缶を返しながら言うと、眉間に手を当てながら、自分でも何でこんなのを気に入ってんだか分からない、と頭を振る。

失礼千万である。

「で、何しに来たんですか。アレ、早まったとか？」

「違うわ。今日は取引に来たの。」

はて、何か俺に出来ることがあるだろうか。思いつかなくて首を捻る。

紫苑さんが、悪い話では無いわと悪どく笑うので、恐らく相手側は是が非でも俺にそれを承諾させたいんだろう、とだけ分かった。

「ていうわけでまずは、はいこれ。」

「お、おー！え、何、お土産！？まじでこれ、貰っていいの？」

取引をしたい、って言った直後のコレだ。流石、やり手なだけはある。

紫苑さんが屋敷に来たとき、彼女に似合わない大きな紙袋が２つあり不思議には思っていた。

それをテーブルにどんっと置いたのだから、当然中身を見てしまうだろう。

そこにあったのは、明らかに俺の為の”物資”だった。

「あなたの管理と観察は、私に一任されてるからね。基本はご子息に預けるしかないけど。言っとくけど、これ、自腹なんだから。」

「あざーーーっす！」

思わず立ち上がり、９０度の礼を取る。

そんな俺に、紫苑さんは大げさねと笑った。

いやだって、服に非常食にジュースまで！？

なんて豪華なお土産なんだ。しかも、同情の金は受け取らないけど貰える物は貰う俺のポリシーをしっかり心得ていらっしゃる。

「にしても、それだけ喜びながら、お土産かどうか確認するなんてほんとちゃっかりしてるわ。」

「え、じゃあ何、支援物資って聞けばよかった?そもそも、俺、本当なら礼なんていらないって思ってるからね。でも、それは紫苑さんが悪いわけじゃないし、好意だっていうのも分かってる。だから、取引とコレは別モノです!」

久しぶりのコーラに感動しつつも、シレっと言った俺に、彼女も反論はしなかった。

元々2年前、両親の葬儀の際に俺をこっちに連れて来たのが紫苑さんだ。
本来であれば、そのまま俺は彼女の下で生活するはずだった。
それを横からかっさらっていったのが、叔父様一家。

いくら当主の補佐だからといって、お爺様が拒否しない限り彼女に抵抗できるわけがない。

だけど、あの時も、今までも、彼女は度々取引を俺に持ちかけてくる。

そもそも、提案自体はお爺様の意向なので、彼女がわざわざそんなことする必要は無いし俺にも拒否権はないというのに。
その真意を直接聞いたことはないけれど、恐らくそれは逃げ道を用意してくれているんだと思う。彼女自身の為にも。

一番最初は、家族から引き離してしまう罪悪感、その後は、こんな生活をさせてしまう罪悪感。それらで自分の判断を鈍らせないように、俺にも自分にも逃げ道を作ってくれてる。

（出来る女はやっぱりちげーな。）

ふと、いつもの癖で相手を観察してしまった。

「その目はやめて頂戴って言ったはずだけど？こんな場所に放り込んでしまった奴が言うのもアレだけど、少しは味方を作る努力をしなさい。」

途端に顔色が変わる。心底嫌そうにして、ピシャリと苦言を呈した。

なんでも俺が人を観察するときの目は、本当に無機物を見ている感じなんだそうだ。そして、全てを見透かされそうだと言う。

俺は一体何なんだと問い詰めたくなりそうだが、でもまぁ、相手に裏があるか無いかを見極めたりするのは得意だし、大抵の人間の質を見ただけで判断できちゃったりするので、仕方はないのかもしれない。

只単に、悪意ばかりを見てきたから身に付いたスキルなんだけどね。

にしても、と思う。

紫苑さんの言葉を聞くと、いつも大人の意見だと感じるのに、同じようなことを言うルディには反抗してしまっているんだな。

「自分以外を幸せにしようするなら、自分もそこに入れなさい。あなたなら、出来るはずよ。」

――それには、お前も含まれているのか？

交わした言葉の中で、一番印象に残っていたものと同じことを言われ、目の前の人に今までに無い親近感が沸いた。

思わず肩の力が抜ける。自分がどんな表情をしているのかは分からないが、少なくとも紫苑さんは見た事がないものだったんだろう。

少し驚いていた。

「それについてはどうこう言えないけど、でも、少なくとも敵じゃない奴は最近作れた。だから紫苑さんも、別に気に病まないでもらっていいよ。」

俺の協力者じゃないから味方でもないし、悪友という友人でもない。なので、そんな捻くれた言い方ではあったけど、今までそんなことすら言う素振りの無かった俺だから、少しは紫苑さんが感じている責任は軽くできるんじゃないかと思う。

珍しく言葉を探しあぐねている様子は、大人というよりお姉さんって感じで可笑しかった。

「それで、取引って？」

もう少し眺めていたい気もしたけど、それをすれば後から手痛い仕返しがきそうなのでやめておく。

俺の言葉で冷静さと本来の目的を思い出したのか、やられたって顔をしつつも咳払いを一つ。そして、仕事モードに戻った。

「実は、こっちもそろそろ動くのよ。だから、種が欲しいの。」

「なるほ。バカンス中の今が、絶好のチャンスってわけね。でも、大抵の部屋に鍵がかかってるけど。」

「それは問題無いわ。ここは、当主の元屋敷よ?当然スペアはあるし、新しく付け替えてたとしても、特別に雇った鍵師がいる。」

（うーわー。流石と言うべきかねぇ。）

でも、だからと言って俺にどうしろと。その間、俺が邪魔だっていうのは分かるけど。でも、俺も外泊禁止令出てるんだよなぁ。

紫苑さんにしてみれば、俺の心配は予想通りだったんだろう。というわけで、と前置きをしてから、彼女は腕を組んで無い胸を張った。

「明日から2泊3日で、どこかに旅行に行きなさい。報酬は、経費がこちら持ちということ。北海道でも沖縄でも、国内であれば何処でも良いわ。し・か・も、報酬という名のお小遣いまで弾んでくれるそうよ。さて、どうする?といっても、当主命令だから、今回ばかりは拒否権は確実にないんだけど。」

最後は苦笑していたけど、それは分かりきっていたことで。しかし、俺は違う意味でポカンとした。

（旅行＝遠出……旅費いらない…お小遣い！）

「乗った！」

「成立ね。あぁそうそう、旅行に必要そうなものも買っておいたから、その中に入ってるわ。」

思わず身を乗り出して叫んだ俺に、初めて年相応に見えたわと言いながら、紫苑さんは立ち上がる。
旅費は振り込んでおくそうなので、残った額は返せば良いらしい。
勿論、指定された金額のお小遣いを抜いた分を。

ルディとの約束を守れるっていうだけでも満足な上に、お小遣いまで頂けちゃうっていうことでテンションの上がっていた俺。
自分で感じた以上に、機嫌が良かったらしい。

明日からの打ち合わせで時間が無いという紫苑さんを、見送りとは別の理由で引き止めた。

「嬉しいのは分かったから。私が忙しい身だっていうの、分かってるでしょ？」

「分かってるって。でも、紫苑さんにかなり得な話だから。」

流石にそれには苛立ったようだけど、俺はわざと焦らして意外にがっしりした腕を掴んで耳を寄せた。

「叔母様の寝室のベッドのサイドランプの中。そこに、ひまわりぐらいの花が咲きそうな種があるよ。むしろ、大樹の苗かも。」

「……参考にしとくわ。」

「んっ。じゃ、仕事頑張って。まじであんがと！」

それを伝えて手を離せば、お互い悪どい笑みを浮かべており、最後に、その香水良い匂いだねっと手を振れば目の前で扉が閉まる。

「っ～！何あの子。どこであんな口説き文句覚えてきてんの…。」

鼻歌交じりで物資を吟味していた俺には、扉の向こうで赤くなった頬を押さえながら悔しがる呟きを聞く術は無かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0491w/

最強魔王と下僕様!?

2011年10月21日08時04分発行